

令和6年度 第65回沖縄県中学校長研究大会
中 頭 大 会

地区別提案資料



 沖縄県中学校長会

第65回沖縄県中学校長研究大会中頭大会 地区別提案資料

第1分科会「教育課程」

第2分科会「確かな学力」

第3分科会「豊かな心」「健やかな身体」

第4分科会「自らの生き方」

第5分科会「人材育成」

第6分科会「学校経営」

第65回沖縄県中学校長研究大会中頭大会

地区別提案資料

中学校 第1分科会
「教育課程」

研 究 主 題

カリキュラム・マネジメントの推進
～学校教育の改善・充実に向けた
「社会に開かれた教育課程」の実践～

新城 基之 金武中学校
渡具知 久浩 羽地中学校
伊波 寿光 伊江中学校

1 はじめに

学校教育には、一人一人の児童生徒が多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り開き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。

2 主題設定の理由

校長は生徒、学校、地域の確かな現状把握に基づいた学校教育目標を設定し、その実現に向けて明確なビジョンを示し、教育課程を編成・実施・評価・改善していくカリキュラム・マネジメントに努めなくてはならない。本分科会は前年度に続き2年継続の報告となる「社会・地域に開かれた教育課程」の理念に基づき、学校・家庭・地域が連携・協働し、子どもたちが未来の創り手となるために求められる資質・能力を育むための学校教育の改善・充実について研究を深めていきたい。

3 研究の視点

(1) 学校で育成する資質・能力の明確化

(2) 学校・家庭・地域における目指す子ども像の共有

(3) 地域等の人的・物的資源の効果的な活用

4 研究の実際

【伊江中学校（生徒数132名）】

【社会に開かれた学校作りの取り組み】

(1) 現状

本村では地域と学校が密着につながりあらゆる機関との連携が行われている。今年度は昨年の課題を振り返り解決策を取りながら実践をしていく。

(2) 地域との連携（管理職）

①伊江村青年会・婦人会総会への参加

②学教連（学校・委員会・社会体育施設等）の情報交換会

③保・幼・小・中連絡協議会への参加

(3) 地域との連携（学校全体）

①保・幼・小・中連携講演会

期日：令和6年5月15日（水）

講師：羽地知香（沖縄女子短期大学・講師）

伊江村内の全教職員参加の講演会

演台：「子どもを笑顔にする保育・教育

～幼児教育の現場から～

②保・幼・小・中連携学習会（伊江小・会場）

期日：令和6年5月27日（火）

伊江島スタンダード研修会（国語）小学校5年生
～自立した学習者を育成する授業づくりについて～

③伊江村PTA連合会・各小中学校・保護者対象

講話・池田卓氏シンガーソングライター

（演題）不便が残してくれたもの

④保・幼・小・中連携学習会（伊江中・会場）

期日：令和6年7月11日（木）道徳・全学級
～自立した学習者を育成する授業づくりについて～

⑤保・幼・小・中連携学習会（保育所体験）

期日：令和6年7月25日（木）村合同研修

各保育所の見学・参観・午後は情報リテラシー
研修・保護者対応研修

⑥保・幼・小・中連携学習会（西小・会場）

期日：令和6年9月18日（水）国語

～自立した学習者を育成する授業づくりについて～

(4) 各区との連携（区生徒会の開催）

①各区長を招き区生徒会の結成式および年間計画
の作成と区長による模擬面接の実施

②各区におけるゴミ0運動の参加（5月30日）

③旧暦5月4日（海神祭）のハーリーへの参加

(5) 運動会指導（エイサー指導・伊江島青年会）

(6) 区長による模擬面接 10月16日（火）

(7) 校長の関り

①各区公民館・民生委員への学校だよりの配布

②今年度より区長会への定期的な参加

③●課題として部活動の地域移行

【羽地中学校（生徒数 265 ）】

(1) 現状及び課題

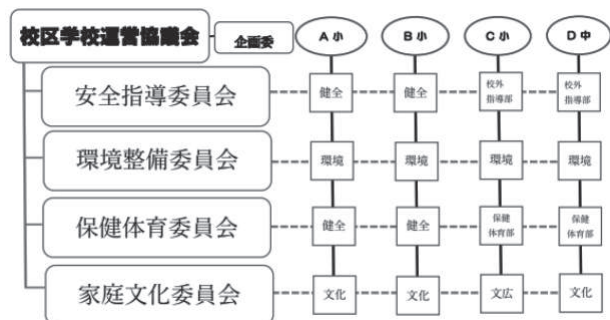
小・中4校合同の学校運営協議会であり、会運営や地域学校協働活動を担う委員会活動の工夫が必要である。

(2) 学校運営協議会（CS）の取組

①各委員会の活動の充実

本校区学校運絵協議会（CS）では会活動の推進と各学校におけるPTA活動のさらなる充実を図るため、各学校のPTA専門部を繋げ、地域学

校協働活動を担う組織として再編成した。



各委員会では基本理念や目指す子ども像を基に各学校の教育課程と関連させながら、年間活動計画を作成し、学校運営協議会の承認・助言を得て、活動を展開している。活動内容を以下に示す。

〈校外指導委員会〉安全マップ作成、安全に関する看板作成⇔特活等

〈家庭文化委員会〉絵本製作、ふるさと自慢コンクール・羽地展における表彰⇔国語・総合

〈環境整備委員会〉稲作体験補助、羽地大川改修碑周辺合同草刈作業⇔総合・社会

〈保健体育委員会〉小中合同プール清掃、小中連携競技大会（小6・中2）⇔保体・行事

(3) 学校の取組（地域貢献活動）⇔総合

全校生徒・地域住民・保護者による地域貢献活動を実施した。各区区長と区担当職員の連携の下、リーダーを中心として生徒が主体的に企画・実践した。生徒の達成感や自己肯定感の高揚に繋がった。

(4) 校長の関わり

- ①運営方針の提案及び4校の協働体制の構築
- ②名護市教育委員会・地区区長会との調整・連携
- ③教育課程への位置づけに関する指導助言
- ④地域学校協働活動の企画・運営に関する指導助言

(5) 成果と課題

○CSにおける委員会活動等の充実及び教育課程への位置づけ

●職員の異動に伴う4校の連携及び協働体制の維持

【金武町立金武中学校（生徒数 413）】

(1) 現状と課題

今年度の教育課程を実施する上で、コロナ過による制限が解除されたが、人と人との接触を最小限に抑え、また外部との交流も大きく制限された時を過ごした子ども達や先生方、保護者にとってやりづらさは否めない。また「社会に開かれた教育課程」を謳っているが、地域と教育課程の共有を再開する難しさがあるのが現状である。

(2) 学校の取組

①地域人材を活用した職業人講話

2年生で実施する職場体験学習の事前学習として地域人材による職業人講話を実施した。金武中学校出身者がほとんどで、中学校時代に考えていたことやその道にすすむきっかけや思いなどを語ってもらった。成果として、身近な大人が現在に至るまでを知ることにより自分の夢へと繋がる内容となった。教育活動のねらいや生徒のめざす姿などを地域の方々と共有できたことが成果に繋がった。

②PTA（地域人材）活動の再開

前年度は運動会前日のPTAによる激励カレーの実施やPTA環境整備を再開させた。今年度も激励カレーの実施やPTA親子作業を計画している。また、4年ぶりにPTAによる読み聞かせ（語れ-会）を計画。生徒会とPTAが協働してお掃除大会も企画し、2学期に開催予定。

教育課程の中に地域人材を活用した取り組みを積極的に活用し、社会に開かれた教育課程の実現を目指したい。

(3) 校長の関わり

地域との連携や開かれた教育課程の推進については、教職員や地域関係者との連携や情報の共有を意識しなければならない。常にアンテナを高く掲げ情報を収集し時には地域に出向き情報発信や情報収集を行う。

(4) 成果と課題

○地域人材を活用した授業（職業人講話）や読み聞かせ（語れ-会）を実施し、地域と子ども達が繋がり、将来に向け展望が開けた事が成果。

●コミュニティスクールの実施が求められる中、PTA活動と地域活動をどう繋ぐかが課題。

5 まとめ

「社会に開かれた教育課程」の編成・実施・改善には、前年度の教育課程の編成において当該市町村・地域の日程や行事等と擦り合わせながら教育課程の編成が不可欠である。そのために必要なのは、校長として地域の方々（公民館や各行政の部署）連携を密に取り協力体制を整えていくことは不可欠である。ただし、その中には教職員の働き方改革があることを念頭に置きPTAや保護者の可能な限り取り込み、連携をしながら開かれた教育課程作成の意見の集約も常日頃から必要である。子ども達の知徳体の成長を一義的に配慮した無理のない教育課程の編成を早めに取り組むことが重要である。

第 1 分科会「教育課程」

研究主題

カリキュラム・マネジメントの推進
～ 学校教育の改善・充実に向けた
「社会に開かれた教育課程」の実践 ～

共同研究者

- ◇山本 薫（沖縄市立越來中学校）
- ◇仲宗根政人（沖縄市立コザ中学校）
- ◇多和田 勝（沖縄市立山内中学校）
- ◇石原 昌英（北中城村立北中城中学校）
- ◇具志堅博昭（中城村立中城中学校）

1 はじめに

カリキュラム・マネジメントは、「社会に開かれた教育課程」の理念の実現に向けて、学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えながら、組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくことである。

変化の激しい時代を生き抜く子供たちに必要な資質・能力をしっかりと身に付けさせることができるよう、学校の教育目標や目指す子供像などを地域社会と共有しながら連携・協働を進めることが必要となる。

2 主題設定の理由

校長は、生徒、学校、地域の実態把握、地域の願いに基づいて学校教育目標を設定し、その具現化に向けて明確なビジョンを示し、教育課程を編成・実施・評価・改善していく「カリキュラム・マネジメント」に努めなければならない。そのため、社会に開かれた教育課程を効果的に実践することが求められている。

本分科会では、校長のリーダーシップによる学校教育の改善・充実に向けた取組や、家庭や地域社会との連携・協働による「社会に開かれた教育課程」のより良い実践につなげるために本主題を設定した。

3 研究の視点

- (1) 社会に開かれた教育課程の実践の在り方
- (2) 学校の改善・充実に向けた校長の関わり

4 研究の実際

(1) 沖縄市立越來中学校（生徒数 203 名）

① 具体的実践

ア 本校は、令和3年度からの3年間市指定を受け、越來小中学校区の保護者・地域と協力・連携のもと、知（自立）・徳（尊重）・体（剛健）の育成と学校課題の改善を目指し、小中連携教育を実施しており、研究成果を生かした教育活動を推進している。

イ 安全・安心な学校づくりの取組では小中合同学校運営協議会、生徒指導連絡協議会、自治会、PTA 等との協力・連携を推進している。また、地域連携担当・地域コーディネーター

を活用し地域人材・素材等を生かした取組を行っている。

ウ 不登校生徒の自立支援に向けて校内支援体制を整え、学校・家庭・地域・関係機関と連携した組織的な取組を行っている。

エ R6 本校学力向上推進プロジェクトによる共通実践（ICT の効果的な活用、自主学習力育成シートの活用等）を家庭・地域と情報共有し協力して取り組んでいる。

オ 学校だより、ホームページ等により学校の取組を情報発信し地域に開かれた信頼される学校づくりに取り組んでいる。

② 成果と課題

- 「チーム越來」体制の整備
- PDCA サイクルによる教育課程の推進

(2) 沖縄市立コザ中学校（生徒数 385 名）

① 具体的実践

ア 文科省指定「リーディング DX」をうけて授業改善に取り組み、同じく指定を受けている諸見小学校との連携強化を図っている。

イ 平和学習での地域ボランティアの活用を図っている。2・3年では平和ネットワークガイドの講師を招き中南部の戦跡のフィールドワークを実施し、1年は胡屋十字路近辺の地域学習のガイドを保護者に努めてもらった。

ウ 学校運営協議会や PTA 活動の活性化を図っている。新型コロナの影響からの脱却をめざし、地域との連携を再度構築するため、組織作りから始めている。

エ 部活動地域移行の取り組みを始めている。保護者の要望で保護者責任の下バレークラブの立ち上げをサポートし、行政との確認の元校長裁量で体育館使用を許可している。

② 成果と課題

○校長のリーダーシップで小中連携や保護者地域との連携、それを受けての学校教育の改善が図られている。

●行政や関係機関との連携で、地域人材の活用をさらに推進する必要がある。

(3) 沖縄市立山内中学校（生徒数 464 名）**① 具体的実践**

ア 信頼関係を築く「キーワード」の共通確認
年度当初の職員会議においてキーワードの共通確認を行い、当初・中間面談において実践の確認を行う。

イ カリキュラム・マネジメント

○参観日 年2回 → 毎月

○定期テスト 確認テスト→中間テスト

○朝読書 実施なし →週2回 等

学校教育の改善・充実に向けた教育課程のマネジメントで最も重要なことは全職員の共通理解とベクトル(方向性)の統一と考える。

ウ 地域伝統行事「風山際」の活用

本校を会場に伝統文化の継承と親睦が図られるが、特に青年会との関わりを深める。

エ 学校長の思惑（関わり）

サーバント・リーダーシップの手法で、魅力ある職場は自分たちの知恵で作りだしていくことを基本とし、心理的安全性確保のため校長は機嫌良くどこか呑気に見せ、さりげなく指導・支援することを心情とした。

② 成果と課題

○教職員が働きやすい環境を整え、子ども達の成長をしっかりと支援することについて学校評価で100%近い肯定的な回答が導き出した。

●生徒の置かれた環境そして一人一人の特性や価値観も多様化し、学校に求められる役割が急速に変化していることを理解し、その変化に迅速に対応できる組織体制を整える。

(4) 北中城村立北中城中学校（生徒数 541 名）**① 具体的実践**

ア キャリア教育では産官学のネットワークを生かし地域の教育資源を最大限に活用した。

イ ローテーション道徳授業では全職員が授業実践し参観し合い授業改善が図られた。

ウ 総合的な学習の時間では郷土の歴史や文化と関連付け地域人材を活用した「職業人講話」「平和学習」等、学年の実態に応じ実施した。

エ 学校運営協議会（コミュニティ・スクール）では学校経営方針の共有化と学校課題改善に向けた協議を行った。

オ 村教育委員会と連携し、部活動外部指導者の人材確保と地域移行に向け準備している。

カ 授業や学校行事等で必要な地域人材を地域コーディネーターを通し、有機的に活用した。

キ 週時程に教科部会を位置づけ、校内研修と

連動した校内OJT（一人一授業）を推進した。

② 成果と課題

○校長のリーダーシップのもと教育の質を向上させるため授業改善を中心に据えた研修の充実及び特色ある教育課程の編成に取り組んだ。

●学校課題（学力保障）の改善・充実に向けた実効性のある教育課程の編成に努める。

(5) 中城村立中城中学校（生徒数 542 名）**① 具体的実践**

ア 定期テストを廃止し、単元テストへ移行するために、週時程の見直しを行い、年度当初で単元計画を作成し、年間計画に位置付けた。採点処理では、自動採点ソフトを導入した。

イ 令和5年度・令和6年度文部科学省指定「道徳教育の抜本的改善・充実に係る支援授業」を活用し、週1の道徳授業検討会を充実させ、組織的授業改善を図った。

ウ 学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の委員を抜本的に見直し、各組織の代表者を中心に幅広い年代の方で再構成し、機能化を図った。

エ ゲストティーチャーを招いての授業（家庭科、保健体育科他）を計画的に実施した。

オ 村企画課、村教育委員会と連携し、平和体験学習事業を全学年で実施した。

② 成果と課題

○校長のリーダーシップのもと、教育課程を工夫・改善したことで、道徳科を核とした教科横断的な組織的授業改善につなげることができた。

●外部人材を積極的に活用し、地域や関係機関との連携・協働をさらに推進し、主体的に学ぶ生徒の育成につとめる。

5 おわりに

学校が活性化するには、生徒の成長が保障され、教職員が生き生きと教育活動に専念し、地域の教育力が学校に反映され、保護者や地域の連携・協働による開かれた教育課程の実践がますます必要となる。

これからの社会に対応できる有機的な組織体としての学校をつくるため、校長は、全教職員が学校経営の意識を持ち、学校経営方針を十分に理解し尊重して、同一の方向を向いて職務にあたれるよう、内外の評価を受け、絶えず改善・充実につとめていく。

第1分科会 『教育課程』 【島尻地区】

研究主題：カリキュラム・マネジメントの推進

～ 学校教育の改善・充実に向けた

「社会に開かれた教育課程」の実践 ～

1 はじめに

学習指導要領では「『社会に開かれた教育課程』の実現に向けて、各学校がその特色を生かして創意工夫を重ね、長年にわたり積み重ねられてきた教育実践や学術研究の蓄積を生かしながら、生徒や地域の現状や課題を捉え、家庭や地域社会と協力して、学習指導要領を踏まえた教育活動の更なる充実を図っていくことが重要である。」と述べている。

本分科会では、各学校が「学校教育の改善・充実に向け『社会に開かれた教育課程』の実践」をどのように展開し、どのような成果及び課題があるのかを研究することとした。

2 研究の視点

(1) 各学校における「社会に開かれた教育課程」の実践について

(2) 「社会に開かれた教育課程」から一步踏み出し、地域の人々と目標やビジョンを共有し、子どもたちを育む「学校運営評議会制度(コミュニティスクール)」の実践等について

上記の視点を中心に、各学校で実践している内容について報告する。

3 研究の実際

(1) 与那原町立与那原中学校

① はじめに

一町一中学校の本校は、地域の伝統行事をはじめ、生徒支援における地域との連携、学校評議員の効果的運用等、様々なアプローチを通して「地域との連携」「社会に開かれた教育課程」に取り組んでいる。

② 地域伝統行事「与那原大綱曳まつり」の取組

450 年余の歴史を誇る地域行事への参加を通して、伝統文化の継承と、地域を愛し地域に誇りを持つ心の育成を目的に全校体制で地域行事へ参加している。生徒の参加の仕方は、2年生男子が金鼓隊(きんこたい)、2年生女子が前舞(メーモーイ)として参加。ほかにも吹奏楽部や地域での役割など、生徒は様々な形で地域行事に参加している。まつりは毎年夏休み期間中の日曜日に開催されるが、学校職員は勤務日として大綱曳まつりに参加し、参加生徒の支援・安全管理・健康管理に当たっている。

また事前学習として、毎年地域の有識者を講師に、

共同研究者

◇當間 保 (与那原町立与那原中学校)

◇下地 秀隆 (豊見城市立伊良波中学校)

◇大城 正篤 (豊見城市立豊崎中学校)

◇宮城 義隆 (座間味村立座間味中学校)

大綱曳の歴史や特徴などを学び、夏休み期間中には地域の方と連携して、金鼓隊と前舞(メーモーイ)の練習を行っている。数十年前から学校と地域が連携して生徒を育ててきた象徴的な行事である。

③ 学校評議会について

本町では、毎年町教委よりコミュニティスクール立ち上げの話が出されるものの、実現には至っておらず、現在も学校評議員を通して地域との連携を行っている。昨年度から構成メンバーに、本校の課題である特別支援教育と不登校対応についての専門家を加え、年2回の定められた会議以外でも、必要に応じて来校してもらい助言をいただいている。

④ 校長の役割

各取組がより大きな成果をあげられるよう、必要に応じて助言等を行う。また、校長講話やPTA総会での保護者への説明や、商工会や区長会等での取組紹介、HPでの広報等、生徒・保護者向けの学校便りや職員向けの校長便りの中で、各取組の様子を周知し、情報共有を図っている。

(2) 豊見城市立伊良波中学校

① 社会に開かれた教育課程について

本校では、将来の夢や目標の達成に向け、生徒が自らの生活や学習を調整しながら継続的に取り組む改善していく「自立した学習者」を育成するために、自学自習ガイドを活用して「自学自習力」の向上に取り組んでいる。また、主体的に学習に取り組めるよう各学年に「自学自習室」を設置し、学習環境の整備を行っている。さらに、外部から講師を招聘し、将来に向けてより良い進路選択が出来るよう、「進路学習会」や「情報モラル理解の促進のためSNS講演会」等を開催した。生徒が将来の夢や希望を持ちその実現に主体的かつ前向きに取り組んでいく勇氣や意欲を持つことが出来るよう、地域人材を活用したキャリア教育の充実に取り組んでいる。

② 学校運営協議会(コミュニティスクール)について

豊見城市では、「地域とともにある学校づくり」を目指して今年度より学校運営協議会(コミュニティスクール)が開始され、本校では「地域の学

校」を合言葉に、今年度の主な取り組み内容を熟議で共通確認した。

今年度は、朝の立哨活動に保護者の協力を得ながら取り組んでいる。また、豊見城市ハーリーには、生徒チームや部活動、職員と保護者の合同チームが参加し、地域と連携を図ることができた。また、12月には「伊良波フェスタ」を保護者や地域の支援のもと開催する予定である。

今後は、学校・家庭・地域等と連携を図り、情報及び課題を共有し、共通の目標・ビジョンの達成に向けて日々の教育活動に取り組みたい。

（3）豊見城市立豊崎中学校

① はじめに

分離母体校である伊良波中学校の生徒数の増加にともなう教育環境上及び学校運営上の様々な課題が懸念されることから、教育環境の充実と課題解消を図るため伊良波中学校を分離し、令和6年4月に「豊崎中学校」が開校した。

開校準備段階からこれまでに「社会に開かれた教育課程」の実現に向け取り組んでいる。

② 「みんなで創る！夢・実現する学校」の取組

校長が開校前年度から市教育委員会との協働で開校準備を進めてきた。「みんなで創る学校」を目指して、制服を作成するにあたり、児童生徒、保護者を交えた意見交換会を開催した。また、児童生徒、保護者と本市観光大使の「かりゆし58」との協働で校歌を作成した。いずれの取組からも「私たちみんな（児童生徒・保護者・地域）で創った制服、校歌」という意識が高まった。

③ コミュニティスクールの設置

本市では今年度より全ての小中学校においてコミュニティスクール（以下CS）が設置されることになった。15名の定員を学校・保護者・地域・有識者とし、年5回開催を予定。本校は災害時の豊崎地区における住民避難場所に指定されていることから、今年度は「防災」をテーマに〈熟議〉〈協働〉〈マネジメント〉の3つの機能を通じて、地域とともにある学校運営を推進していく。

④ 地域と連携・協働する取組

ア PTCA 委員会を毎月開催し、学校経営方針の共通理解、情報交換等を通して、学校運営の改善・推進を図る。

イ 『美らSUN会（豊崎地区在各種団体から成る組織）』、『市商工会』との連携による学校運

営の充実

（4）座間味村立座間味中学校

① 「社会に開かれた教育課程」の実践について

本校においては、6月に開催されるサバニ帆漕レース（座間味島から那覇までのおよそ40kmの距離を帆付きのサバニで帆漕するレース）の参加に向けて、PTA組織に位置づけられた海学校育成会が活動計画の立案や運営及び技術指導を担っている。また学校はその取り組みを総合的な学習の時間に位置づけ、学校教育活動の一環として実践している。

この活動のねらいは、○サバニを自力で漕ぐ体験を通し、座間味を愛し、誇りと自信を持ち、15の旅立ちを迎えられるようにする○協力性、忍耐力等を育成すると共に、充実感、達成感及び保護者や地域の方々に感謝の心を醸成する○保護者、地域、学校が一体となって「海学校」を支援することにより、島の子を育てる風土を育て、相互連携を深める、となっている。

このようにこの活動は、生徒や地域の現状や課題を捉え、家庭や地域社会と協力して、学習指導要領を踏まえた教育活動となっており、本校における特徴的な「社会に開かれた教育課程」であると捉えている。

② コミュニティスクールについて

本校では、「学校評議員会」を年2回開催し、村教育委員会から委嘱された評議員の方々から学校運営に関する意見を頂き、その改善に努めている。コミュニティスクールの導入については現在、検討中である。

4 成果と課題

（1）成果

- 町伝統行事や、一町一中の強みを生かした日常的な地域との連携が図られている。
- 「みんなで創る！夢・実現する学校」の共通理解が図られている。
- 「海学校育成会」と連携した取組が充実している。

（2）課題

- コミュニティスクールの早期導入
- 更なる開校1年目の学校基盤作り
- コミュニティスクールの導入に向けた村教育委員会との連携

5 おわりに

今後も校長がリーダーシップを発揮し、生徒や地域の強みや課題を的確に捉え、家庭や地域と持続可能な協力体制を構築し「社会に開かれた教育課程」に取り組んでいきたい。

第 1 分科会 【宮古地区】

『教 育 課 程』

研 究 主 題

カリキュラム・マネジメントの推進

共同研究者

濱 川 泰 成（宮古島市立鏡原中学校）

渡久山英徳（宮古島市立 北 中学校）

1 はじめに

学習指導要領の前文に「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創る」という理念がある。そのためには、それぞれの学校が学びの意義や育成したい資質・能力を明確にしながら、社会との連携及び協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。各学校においては校長の方針の下、各学校の特色を生かした教育課程を編成し、その基本的な方針を家庭や地域と共有しながら実施、改善していくカリキュラム・マネジメントに努めることが求められている。

2 主題設定の理由

校長は、「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて明確なビジョンを示し、教育課程（カリキュラム）を管理し地域社会との連携や協働により、効果的に実践を図ることが求められている。そのため、教育課程を編成・実施・評価・改善していくPDCAサイクルによる「カリキュラム・マネジメント」を推進しなければならない。そこで、校長の「カリキュラム・マネジメント」が各学年、各学級、各教科等に浸透し、全教職員が協働する体制づくりを目指すため、次の視点を持ち、各学校の課題解決に向けた研究を実践する。

3 研究の視点

- (1) 学校教育の改善・充実に向けた「社会に開かれた教育課程」の実践
- (2) 学校のカリキュラム・マネジメントの実践及び教育活動の活性化

4 研究の実際

〈実践例1〉鏡原中学校 生徒数125名
(通常学級：6学級 特別支援学級：2学級)

(1) 具体的な取り組み

① 社会に開かれた教育課程の実践

ア ICTの有効活用

- ・保護者連絡ツール「テトル」を活用し、学校行事や対外行事、授業等、普段の学校生活の様子を情報発信し、協働体制の構築を図る。

イ 地域人材・地域資源を活用した学習

- ・地域人材による「菊づくり」講習会
- ・高校生（卒業生）による進路学習講話
- ・福祉体験学習 ・職場体験学習
- ・地域ボランティア活動（海浜清掃等）

ウ 地域行事参加による体験学習

- ・ハーリー体験、地域夏祭りへの参加

② 教科横断的な実践

ア 授業スタイルの統一

- ・同じスタンスの協働的な学びである「チーム学習」を共有し、子ども達の授業参加を図る。
- ・個人で考える時間、チームで考える時間をしっかり確保し、「学習スタンダード」の徹底を図る。

イ 育成したい資質・能力を育む共通実践

- ・各教科行事等、全ての教育活動で育成したい資質・能力の項目を意識した活動の展開。
- ・異学年で縦割り班での協働体制の実施し、連携、協働の教育活動を推進し、人間関係の構築を図る。

③ 諸会議、学校評価等によるマネジメント

ア 諸会議によるマネジメント

- ・3K会（校長・教頭・教務）、生徒指導委員会、運営委員会、職員連絡会を連動させ毎週振り返り行課題解決を図る。

イ 学校評価によるマネジメント

- ・年2回（7月・12月）、教育活動の評価を職員・生徒・保護者にアンケート形式で実施し、データを基に授業改善・学校改善に繋げている。

ウ 教職員評価システム（申告・面談）を活用したマネジメント⇒進捗状況のチェック・改善

(2) 校長の関わり

- ① ビジョンを明確に示し、生徒理解や授業づくり、資質能力の向上への取り組みをしっかりと示めた。
- ② 「チーム学校」としての連携・協働を、集会や会合等を通し家庭や地域、関係機関へ積極的に働きかけ協力体制を構築した。
- ③ 職員会議や校内研修等を通して教職員の同僚性を高め、「教師エージェンシーの醸成」を図った。
- ④ PDCAサイクルによる教育課程の検証を行い、課題解決についての指導・助言を行った。

〈実践例2〉北中学校 生徒数 363名

(通常学級：11学級 特別支援学級：5学級)

令和5年度から本校の最優先課題である学力向上に向けて校長の経営方針をイメージ化し（配布・掲示）、全職員からの生徒への支援が同じ方向で実践できるようにしている。

中 1-5-②

第 1 分科会【八重山地区】『教育課程』

研究主題「カリキュラム・マネジメントの推進」
～教科横断的な視点を含めた、教育課程の編成・実施・
評価・改善の在り方～

1 はじめに

学習指導要領の前文に「よりよい学校教育を通しよりよい社会を創る」という理念がある。

各学校においては校長の方針の下、各学校の特色を生かした教育課程を編成し、その基本的な方針を家庭や地域と共有しながら実施、改善していくカリキュラムマネジメントに努めていく必要がある。

2 主題設定の理由

竹富町には、小中併置校 7 校、小学校 3 校、中学校 2 校が設置され、本研究員の 4 校は離島僻地にあり、複式学級を編成する小中併置校である。各島それぞれ地域行事が盛んで地域との関わりも密接である。また、令和元年度から町内の全学校において海洋教育を推進しており、その取組においても地域社会との関わりによるものが大きい。そこでその海洋教育を含め、各学校の実態に応じた特色ある教育課程を編成・実践し、まとめることで研究主題に迫ることとした。

3 研究の視点

- (1) カリキュラム・マネジメントの実践及び教育活動の活性化
- (2) 学校教育の改善・充実に向けた、社会に開かれた教育課程の実践
- (3) 教科横断的な視点を含めた教育課程の PDCA の在り方

4 研究の実際

■竹富町立小浜小中学校（児童 42 名、生徒 18 名）

- (1) 教科横断的な視点と教育課程の PDCA の在り方

① 連続した学びの意識化

キャリア教育とも関連付けて、次学年へつなげている。この一連した学び（キーワード：循環）には島の豊かな自然の恩恵を受けるだけではなく、人として自然にも何かしら還していくという考えを持って欲しいという願いも込められている。

② 教育課程の実施における教科横断的な視点

海洋教育を教科横断的な視点で取り組むために、全学年で「海洋教育として取り組める単元一覧」

共同研究者

大瀨 用四郎（竹富町立西表小中学校）
北田 憲司（竹富町立黒島小中学校）
岡崎 心一（竹富町立竹富小中学校）
仲山 ゆかり（竹富町立小浜小中学校）

を作成し、教職員の意識化を図っている。

③ 評価・改善の在り方

体験的な活動を行う際は、その目的を教職員で共通理解を図り、実施後の振り返りを通して、「自分と海のかかわり方について問い続ける子」が育成されているかを検証していく。

(2) 実践例

① 海洋教育の取組

ア 美ら海体験（ダイビング）

イ サンゴ学習

② 地域連携、キャリア教育の充実

ア 職場体験学習（小浜島島内事業所）

イ キャリア講話・ワークショップ

③ 地域の伝統文化の継承

ア 祭祀について（あぶる作り体験）

イ 伝統芸能の学習

ウ 結願祭への参加

(3) 校長の関わりとリーダーシップ

① 取り組むべき教育活動の視点の明確化

② 教育目標の視点である「自立・共生」を全職員が意識しながら実践できる教育活動を推進。

③ 島の生活と海とのつながりが、自分の生活と未来に関係していることを自覚し、持続可能な未来の創り手となることを意識させる。

■竹富町立西表小中学校（児童7名、生徒14名）

- (1) 教科横断的な視点と教育課程の PDCA の在り方

① 教科横断的な視点

ア 総合的な学習の時間を核としたカリキュラムの作成と体験学習のマニュアル化

イ 目指す資質・能力の明確化

ウ 発達段階に応じた学習内容や目標の設定

② 編成・実施・評価・改善の在り方

ア 持続可能な取組かどうか

イ ねらいが明確か(何を身に付けさせたいのか)

ウ 子供の主体性が発揮できる活動かどうか

エ 学んだことが社会と繋がっているかどうか

(2) 実践例

① 海洋教育に関する取組

- ア 海神祭への参加
- イ 海の体験学習：サバニ体験等
- ウ ビーチクリーン

② 地域連携（文化継承等）に係る取組

- ア 稲作体験学習
- イ 和紙作り
- ウ 節祭（シチ）への参加

(3) 校長の関わりとリーダーシップ

- ① 学校教育目標等の周知と推進（PTA 総会・学校だより等）
- ② 教職員及び児童生徒と身に付けさせたい資質・能力の共有化（校長講話、集会等）
- ③ 学校評価や各教育活動後の振り返り等を通した PDCA サイクルの推進と助言

■竹富町立黒島小中学校（児童 16 名、生徒 6 名）

(1) 教科横断的な視点と教育課程の PDCA の在り方

- ① 教科横断的な視点
 - ア 身につけさせたい力を明確にする。
 - イ 多教科にわたり総合的に応用する力を身につけさせるために編成する。
 - ウ 子どもと地域の実態に基づき編成する。
- ② 編成・実施・評価・改善のあり方
 - ア 教師と子どもが一体となった「チーム」として機能するように計画・実践を行う。
 - イ 子ども主体の取組になっているかを評価する
 - ウ 地域とのつながりを意識させた取組になっているかを評価する。

(2) 実践例

- ① 地域連携、交流学習の取組およびキャリア教育の充実
 - ア 職場体験学習（石垣市内事業所等）
 - イ 交流学習（石垣市内大規模校）
 - ウ 豊年祭・牛祭りなど地域行事への参加
- ② 海洋教育の取組（総合的な学習の時間等を含む）
 - R 6 年度（小中共通テーマ＝海との共生）
 - ア 体験ダイビング
 - イ マリンボトルアクアリウム体験
- ③ 地域の芸能・伝統文化の継承に向けた取組
 - ア 豊年祭奉納舞踊、地域行事への参加
 - イ 三線・棒術・舞踊等、伝統芸能の学習

(3) 校長の関わりとリーダーシップ

- ① 目指す児童生徒像を意識した教育活動の推進（学校だよりで発信、HP 掲載、三役との連携）
- ② PTA と連携した学校行事、人材活用の推進

- ③ 学校評価、各種テスト・調査、教育活動等の PDCA サイクルを意識した活動の推進

■竹富町立竹富小中学校（児童24名、生徒10名）

- (1) 教科横断的な視点と教育課程の PDCA の在り方

本校の特色である海洋教育について、各教科間の関連をおさえて指導できるよう各学年で教科横断的なカリキュラムの年間指導計画を作成し実践している。適宜振り返りを行うことで課題を明確にし、教育課程の改善を行っている。

(2) 実践例

- ① 主な海洋教育の取組
 - 学年ごとの海洋教育目標を設定し全体活動と個人テーマの探求学習を合わせた取組を行う。
 - 全ての学年で学習デザインを作成し、事前学習、探究活動、事後学習、未来のための力・行動へとつなげ「持続可能な社会の創り手」の育成を目指す。
 - ア 海の子集会（もずく・アーサ採り）
 - イ ゴミ焼却場見学、ビーチクリーン活動
- ② 種子取祭の取組
 - ア 芋・粟・ごま・大豆栽培とイーヤチ作り
 - イ 総合的な学習発表会のプレゼンテーション
- ③ 方言の継承
 - ア てーどうんむに（竹富方言）による朝の放送
 - イ てーどうんむに大会

(3) 校長の関わりとリーダーシップ

- ① 学校経営方針や指導の重点との関連、活動のねらいや目指す児童生徒像の明確化
- ② 地域人材（素材）バンクの作成と海洋教育サポーターの配置

5 まとめ（全体の成果と課題）

【成果】

- (1) 本地区のそれぞれの地域や学校の実態に応じた特色ある教育課程を編成し、小中連携して共通実践することができた。
- (2) 家庭や地域と連携し、各教育活動で地域人材や地域資源を有効に活用し、取組を進めることができた。
- (3) 教科横断的な視点を含めた教育課程を編成し実践する中で、職員間の協働体制を確立し、評価・改善に向けてのサイクルを展開することができた。

【課題】

- 海洋教育に関する教科等横断的な視点を取入れた持続可能で実効性のあるカリキュラム・マネジメントを構築し、適宜見直しを図る必要がある。

[illegible]

第65回沖縄県中学校長研究大会中頭大会

地区別提案資料

中学校 第2分科会

「確かな学力」

研究主題

『主体的・対話的で深い学びの実現』
学習の質を一層高めるための「主体的・対話的
で深い学び」の授業実践と学校の体制づくり

仲田 欣五 (名護市立屋部中学校)
根路銘 国哉 (本部町立本部中学校)
渡慶次 靖 (宜野座村立宜野座中学校)
謝花 しのぶ (名護市立緑風学園)

1 はじめに

予測困難な時代を生き抜く子供たちの資質能力を育てるために、「令和の日本型学校教育」の構築に向けて、協働的な学びと個別最適な学びが求められている。確かな学力を身につけ、「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、本研究部会では授業改善と学校の体制づくりを進めてきた。以下、実践事例を紹介する。

2 主題設定の理由

変化の激しい社会において主体的に考え、他者と協働し、よりよく問題を解決していく人材を育成するため、校長のリーダーシップのもと、学習の質を高めるための「主体的・対話的で深い学び」の授業実践と学校の体制づくりに関連し、次の視点から共同研究を実践する。

3 研究の視点

- (1) 授業改善に係る学校組織体制づくり
- (2) 各学校の特色ある取組み
- (3) 校長の関わり・指導性

4 研究の実際

【屋部中学校 生徒数 361名】

(1) 学校の実態

- ①令和6年度全国学力・学習状況調査結果(3年生)
より、国(県+5、国-0.1)、数(県+5、国-4.5)
- ②令和6年度全国学力・学習状況調査(質問紙調査)
結果(3年生)より、「自分には、よいところがある
と思いますか」…(県-1.1、国+1.7)「家で計画
を立てて勉強をしていますか」…(県-9.3、国-21.2)
※県や国と比較して1日あたりの家庭学習時間が少
ない(課題)。
- ③令和6年度学びの確かめ(6月実施)より
1学年…国(県+0)、数(県+0.8)
2学年…国(県-0.8)、数(県+0.6)、英(県-0.2)

(2) 授業改善に係る学校組織体制づくり

今年度も名護市教育委員会の指定を受け、「主体的・対話的に学び、粘り強くやり抜く生徒の育成」～生徒の自学自習力の向上につながる授業改善(か・ふ・や・み)を通して～の校内研究テーマの下、各教科部会、道徳部会、キャリア教育部会の3つの部を組織し、研究を推進している。

(3) 特色ある取組み

- ①各教科における「主体的・対話的で深い学び」を育

む授業づくり

- (ア) 教科部会の充実 (イ) 県教委の資料を活用した指導と評価の一体化を目指す授業改善・学習評価
- (ウ) 「自学自習力」の育成につながる(か・ふ・や・み)を意識した授業改善 (エ) 各教科共通実践事項の設定 (オ) 互見授業(年2回実施)の充実
- (カ) SDGsの視点を踏まえた授業 (キ) 一人一台端末を活用した授業
- ②道徳科授業における「考え、議論する道徳」の研究
(ア) 道徳部会の充実 (イ) ローテーション道徳の授業の実施 (ウ) 教材分析シートの研究 (エ) 互見授業の充実 (オ) 地域人材を活用した授業実践
- ③キャリア教育の視点を踏まえた特別活動及び総合的な学習の時間の充実
(ア) キャリア教育部会の充実 (イ) 「話し合い活動」の充実 (ウ) 学級企画委員会、学年企画委員会の充実 (エ) 生徒会活動の充実 (オ) キャリアパスポートの活用充実 (カ) 地域人材を活用した「ふるさと学習(ていんさぐ学習)」の充実

(4) 校長の関わり・指導性

- ①学校経営ビジョン(屋部中学校スクールプラン)の周知徹底及びPDCAマネジメントサイクルによる教育課程の実施(ショートスパンでの改善見直し)。
- ②各教科等の授業における授業観察及び授業後の確実なフィードバック。
- ③各種組織や校内研修、研究指定校研究における指導助言。
- ④校長便りや週案の確認(コメント)等を通じた指導助言。

【本部中学校(生徒282名)】

(1) 学校の実態

令和5年度全国学力・学習状況調査結果は各教科とも全国と約-15ptの差がある。質問紙等の調査においては「自己肯定感の高まり」に関する課題が幾分解消に向かっているが「主体的な学び」については「授業の課題解決に向けて自ら考え自ら進んで取り組んでいるか」の項目で全国差(-3.6pt)があり課題がある。

(2) 授業改善に係る学校組織体制づくり

- ①校内研修における研究体制の充実
各学級における生徒個々の特性を理解し、「個別最

適な学び」を充実させる ICT 機器等を活用した授業づくりや、考えを交流し協働で解決する授業実践に向けて、年間2回の互見授業を実施して教諭間で学びあい、授業改善の充実を図っている。

②学年・学級経営の充実

学年主任を中心とした組織体制を整え、生徒一人一人への組織的な関わりを充実させ生徒理解を図っている。また、生徒の主体的な活動を支える学級活動の充実により学級及び学年のチーム力向上を図っている。

(3) 特色ある取組み

①学年チーム担任制の取組

複数の教師が多角的な視点で生徒の状況を把握し職員の組織的な対応と生徒の主体的活動を促進する。

②チャレンジ学習活動の実施

町雇用の学力向上推進教師及び学習生活支援員等による朝のドリル学習や放課後の補習活動（セルフスタディ）を実施。

③「人間関係づくり（スリンプル）」の実施（週1回）

(4) 校長の関わり・指導性

①教育課程の短期的な評価・改善を図る。

（スクールプランの活用）

②校長講話による生徒及び職員の意識改革

③授業観察の実施とフィードバック

④地域との連携推進

【宜野座中学校（生徒261名）】

(1) 学校の実態

各種調査からは、自分の意見を書くこと等に課題がある結果がでている。課題改善のためには多様な考えや意見を根拠に、自分の意見も持たせる必要性があると考え。

(2) 授業改善に係る学校組織体制づくり

全職員、年1回以上の公開授業の実施。村教委とも連携し、校内研修主任を中心に推進している。また、授業改善を支える支持的風土の醸成をふまえ、グランドデザインの中心にウェルビーイングの循環を位置づけている。

(3) 特色ある取組み

①「教える」から「考えさせる」授業への転換。発問の工夫、生徒同士の対話を中心とした授業改善。

②生徒の学びを見取る力の育成。研修授業等では、視点を教師から生徒に移し、生徒の学ぶ姿から教師の手立てを探るように努めている。

③「部分的チーム担任制」、「道徳ローテーション」の実施。

(4) 校長の関わり・指導性

文部科学省や県教育委員会等の施策や根拠を示し、

学校の実態をふまえた指導や助言を対話を通して周知するよう心掛けている。

【緑風学園（児童生徒166名）】

(1) 学校の実態

各種調査やアンケート等から見て取れる本校の実態として、「友達の考えを聴き考えを広げ深める」ことにおいては評価が高いが、自分の考えをアウトプットすることに関しては課題がある。

(2) 授業改善に係る学校組織体制づくり

①全職員で取り組む校内研修

②緑風スタンダードを踏まえた授業実践

(3) 特色ある取組み

①校内研修の充実

全教師が校内研テーマに対する「自己テーマ」を設定、年1回の互見授業や主体的な公開授業を通して授業改善に取り組んでいる。

②地域資源を生かしたふさと学習の充実

キャリア教育の視点及び各教科等で身に付けた知識や技能等を関連付け、探究的な活動に主体的に取り組む、その成果をアウトプットできる学習環境の整備や充実に取り組んでいる。

(4) 校長の関わり・指導性

①日常的な授業観察とフィードバック

②学校経営ビジョンやスクールプランの共通理解

③教職員評価システムの適切な運用とキャリアステージに合わせた指導助言

④地域との連携推進

5 成果と課題

(1) 成果

①学校・学年の組織体制の充実により職員と生徒との信頼関係が高まり学校課題の解決に向かっている。

②互見授業や管理職による参観授業により、職員の授業改善への意識が高まり、各種学力調査等からも生徒の良い変容が見られるケースが増えた。

(2) 課題

①「チーム学校」の推進を図る。

②「主体的・対話的で深い学び」や「自学自習力の向上」に向けた更なる授業改善

③名護市のCS（コミュニティ・スクール）の取組と学力向上を関連づけた取組の積極的な推進。

6 おわりに

今回の研究を通して、校内研修、授業改善に向けた実践を共有することができた。今後も、校長のリーダーシップを発揮して、学校経営の中軸に校内研究、授業改善を据え、研究を推進していきたい。

第 2 分科会【中頭地区】 『 確かな学力 』

研究協議題

主体的・対話的で深い学びの授業改善に向かう学校
全体の体制づくり

1 はじめに

コロナ禍以降、社会は予測困難で急激に変化している。
その将来の予測が困難な時代にあっても、児童生徒 1 人
ひとりが自分の人生を切り拓き、より良い社会を創り出
していけるよう、教育界において育成すべき資質・能力
を明確にし、確実に育むことが求められている。

2 主題設定の理由

そこで本研究会では、より良い社会の形成者として児
童生徒が主体的に考え、他者と協働し、よりよく解決で
きる人材を育成するため、校長のリーダーシップのもと、
「主体的・対話的で深い学び」の授業実践と学校の体制
づくりに向け、次の視点から共同研究を実践する。

3 研究の視点

- (1) 主体的・対話的な授業実践に向かう学校づくり
- (2) 各校の具体的な取組と校長の関わり

4 研究の実際と校長の関わり

【うるま市立与勝中学校】

① 現状と課題

全国学力調査の結果分析から次のような課題が確認さ
れた。国語では、図と文章を関係づけて理解し、図を用
いて効果的に説明することに課題が見られた。数学では、
基本的な文字式や式の変形、日常生活で見られる事象を
数学的に解釈すること、図形の証明に課題が見られる。

② 学校の具体的な取組

全国学力調査実施後の自校採点結果を集計・分析し、
自校と県の比較と、生徒一人一人の状況や設問ごとに正
答・誤答・無解答の生徒をリストアップできる集計ファ
イルを作成し、学校の現状を的確に分析できる環境を整
え、各教科部会で分析を行った。教職員評価システム当
初面談においても、教科としてこれらの課題にどのよう
に取り組むか、共通実践目標を設定していただいた。現
在「つかむ・考える・自力解決・交流・発表・ふり返し」
の授業改善の視点をもとに実践を試みている。

③ 校長の関わり

全国学力調査実施直後に分析データを提供すること
で、先生方が感じる課題を数値的な根拠に基づいて確認
できるようにした。授業改善の方向性と視点を示し、先
生方が主体的に授業改善に取り組めるよう提案を行った。

④ ○成果と●課題

共同研究者 ◇田港 朝満（与勝中学校）
◇上門 博之（与勝第二中学校）
◇當銘 剛（津堅小中学校）
◇塩川 斉（高江洲中学校）
◇仲村美恵子（彩橋小中学校）

○全国学力調査直後の分析により、年度当初から自校の
課題に取り組む体制が構築できた。また、教科部会を通
して自校の課題に対し統一したテーマで取り組む体制が
整いつつある。●取組の成果を「学びの確かめ」等の調
査で確認し、職員にフィードバックする体制の構築。

【うるま市立与勝第二中学校】

① 現状と課題

他校への流出が前年度課題であったが、今年度は新入
生が倍増し学校が活性化している。全国学力調査結果か
ら、「文章と図表とを結びつきを解釈すること」「意見と
根拠等情報の関係の理解」に課題。数学では「図形を考
察する力」「重要語句の意味定着」に課題がある。

② 学校の具体的な取組

子ども達の学び・育ちを支える見取りと豊かな関わり。
学校の優位性を活かした多様な教育活動。生徒理解を基
盤とした授業改善の充実。生徒による学校 HP の自主運
営。GIGA スクール構想の推進。フォーサイトアプリを
活用し、個々の PDCA サイクルの定着を図る。デジタル
ドリルを活用した個別最適な学びの推進。

いじめ・不登校等の問題解決に向けた取組の充実。山
野式スクリーニング・校内支援会議での支援体制の構築。
生徒会活動の充実（他校と交流会）ICT 活用による学習
保障と学びの場づくり。教福連携による支援体制の構築。

③ 校長の関わり

今年度の育成テーマ「生徒の自己肯定感・自己有用感
を高め、想像力・発信力・創造力を身に付けさせる」を
年度当初に全教職員で共有した。そこから授業改善等、
各視点を踏まえ組織全体で取り組む体制を構築した。

④ ○成果と●課題

○少しずつではあるが、個々人が自分の良さを見つけ、
自信を持ち主体的に学び深く考え、自ら課題解決に向
けて取り組むようになった。●各教科 1 名体制となってい
るので、教科の練り合いが不十分な面がある。今後、校
外の教科研修会に積極的に参加しスキルアップを図る。

【うるま市立高江洲中学校】（生徒数 550 名）

（1）現状と課題

調査アンケートにおいて「地域行事に積極的に参加」
や「新聞を読んでいますか」の項目の達成率が低く地域
社会への興味関心が低い。もしくは興味関心が偏ってい

ると予想される。学習面では「家庭学習」や「週末の勉強時間」の達成率が低く、計画的な学習に課題がある。

（2）学校の具体的取組

夏期校内研修においてアセスの研修を行い、生徒の実態把握と、心理的安全性のある学校をつくる手立を確認した。全国学力学習状況調査の結果を全職員で共有し、その後、各教科で検討した結果を全体で共有した。ICT活用の事例紹介を校内研で行い、協働的な学び、振り返り等、他教科での活用を自分の教科に生かせないか討議した。今後は、校内研・学推・生徒指導・教育相談担当と連携して更なる充実を図る。

（3）校長としての関わり

日常での授業参観を通した各教科担任への助言、学校教育目標（めざす生徒像）とめざす学校像を全生徒全職員で確認。「夢・じりつ・共生」を教育目標に絡め、その中で「主体的」や「深い学び」について考え実践するよう助言。教科横断的な視点を持ち学びにつなげ、深い学びの推進を図る校長講話の実施。

（4）○成果と●課題

○学び合いのツールとしたICT活用がみられる。職員も気づき考え、協働的に取り組む姿勢がみえる。●ねらいに迫る意図的計画的な発問、新たな実践を生み出す力や、生徒の実践力育成や、最後までやり抜く力の育成を継続していく。

【うるま市立彩橋小中学校】

⑤ 現状と課題

全国学力調査の結果分析から、全国平均から下回るも、無答率は改善傾向にある。国語については、自分の考えを記述する問題に課題が見られる。図形の意味や性質を理解する問題や式や言葉を使って説明する際、求められている条件や根拠をもとに記述する事に課題が見られた。質問紙より計画的な学習の姿勢に大きな課題が見られた。

⑥ 学校の具体的取組

2学期当初に校内研において学推担当者より、調査の結果分析の振り返りを小中全体で実施。学校全体として、児童生徒に育むべき「資質・能力」を明確化し、スクールプランシートで確認を行った。本校の「一点突破」を、「聴き合う力の育成」、「ボイスシャワーの実践」とした。「授業像」では、「他者と関わりながら課題解決を目指す授業」、「自分の考えや意見が現れる授業」をめざした。

③ 校長の関わり

授業改善の方向性と視点を示し、全校体制での取組とした。「一点突破事項」の「聴き合う力の育成」について、学校教育目標・学級経営目標の統一事項とした。

⑦ ○成果と●課題

○主体的で対話的な深い学びに向かうために土台づくりとして行った「聴き合う力の育成」と、校内研と連動した「自分の思いをまとめる力の育成」により、検定合格者の増加、諸調査での無答率の改善が図られてきた。

●中学部における対話を通した授業改善には課題がある。

【うるま市立津堅小中学校】

① 現状と課題

本校は、全校児童生徒9名という小さな学校である。今年度の全国学力学習状況調査は、国語が14.3P、数学が5.9Pと県平均を上回る結果となったが、生徒数が少ない為学年間格差が顕著で、年度によって結果に大きな差が生じる。基本事項の定着や帰国子女等の在籍もあり、長期スパンで計画的に取り組む必要がある。

② 学校の具体的な取り組み

（ア）ビティ島タイム（月曜朝 8:20～）

テスト等に向け学習計画的をしっかりと立てるなど、自己調整学習に取り組んでいる。

（イ）自主学習の取り組み（水・木の 8:20～8:40）

自分で教科や単元を選択し、1人1台端末で、（小）すららドリル、（中）スタディサプリに組み組み主体的に学習に取り組む姿勢作りを促している。

（ウ）補習等の充実

放課後補習や検定試験対策をはじめ、夏休み期間の勉強会など、習等の充実を図り学力向上に努めている。

③ 校長としての関わり

教頭、教務、研究主任、学推担当と連携を図ると同時に企画会議の中で共通確認を行い、朝学習の時間を週時程へ位置づけた。放課後や長期休業中の補習や検定対策に関しては、学校経営の取り組みの重点及び必要性を伝え、職員への共通理解を図るよう努めた。

④ 成果と課題

補習や検定試験対策の取り組みを行った結果、個々の実力アップや学習に向かう姿勢作りを図ることができた。また、検定試験は現段階で合格率100%であり、中には英語検定2級合格者もでた。

6 おわりに

校長先生方のリーダーシップのもと創意工夫しながら、学校教育の充実を図る各校の取り組みが見られた。今後も、時代に対応した資質・能力を育成する姿勢を持ち、校長のマネジメント力を発揮して、児童生徒が主体的に考え、他者と協働し、よりよく課題解決できる人材に育成する事を目指していく。



研究主題

「主体的・対話的で深い学びの実現」

〈共同研究者〉

宮良 安剛 (那覇市立石田中学校)
 望月 雄紀 (那覇市立寄宮中学校)
 新地 康秀 (那覇市立古蔵中学校)
 金城 光明 (那覇市立仲井真中学校)

1 はじめに

学習指導要領では、3つの資質・能力「学びに向かう力、知識・技能、思考力・判断力・表現力等」の育成の充実が求められている。それは、予測困難な時代を生き抜くための「生きる力」の育成にかかせないものであるからである。

そのためにはこれまで以上に、ICTを最大限活用し、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と子供たちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」を一体的に充実させ、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていかなければならない。また、その際にはカリキュラム・マネジメントの取組を一層進めることも重要である。

本ブロックの各学校の具体的な取り組みと生徒質問紙の結果を分析し、課題解決につなげていきたいと考える。

2 主題設定の理由

(1) 予測困難な時代を生き抜く子どもたちの資質能力の育成のためには、主体的・対話的で深い学びの実現が必要である。

(2) 各学校の生徒質問紙の結果より、自学自習力（主体的に学習を進める力）の充実が各学校の課題となっている。

県生徒質問紙結果		R5年度質問紙 12月			R6年度質問紙 7月		
質問事項		1年	2年	3年	1年	2年	3年
1 自分にはよいところがあると思いますか	A校	90.3%	88.1%	89.6%	79.1%	91.4%	91.1%
	B校	81.3%	77.9%	84.0%	78.2%	82.5%	82.9%
	C校	84.9%	90.4%	85.3%	85.3%	89.0%	92.5%
	D校	78.0%	72.3%	83.7%	70.7%	78.0%	76.4%
2 学校に行くのは楽しいと思いますか	A校	83.9%	81.7%	83.0%	74.8%	80.2%	85.7%
	B校	85.6%	73.8%	69.4%	82.3%	68.8%	76.0%
	C校	85.6%	85.9%	87.3%	93.0%	86.0%	90.0%
	D校	82.7%	70.8%	88.6%	69.9%	80.5%	75.6%
3 家で自分で計画を立てて勉強していますか	A校	52.7%	43.1%	48.9%	53.0%	44.4%	56.3%
	B校	39.6%	39.3%	43.1%	55.7%	43.5%	41.9%
	C校	49.1%	63.0%	65.7%	51.8%	43.0%	51.3%
	D校	61.4%	56.2%	75.6%	60.2%	61.8%	61.8%
4 友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができますか	A校	84.9%	90.8%	86.7%	69.6%	87.7%	91.1%
	B校	78.4%	83.6%	84.0%	87.1%	80.5%	80.6%
	C校	81.2%	83.0%	85.2%	84.7%	85.5%	89.4%
	D校	83.5%	77.7%	87.0%	80.5%	82.1%	89.4%

3 研究の視点

- (1) 授業改善にかかる学校組織体制づくり
- (2) 各学校の特色ある取り組み
- (3) 校長の関わり・指導性

4 研究の実際

(1) 石田中学校の実践

- ① 「石田中授業スタイル」の充実に基づいた、書いて話す言語活動の充実をめざし話し合い活動を年5回以上実践し、自分の考えを深めたり広げたりすることができる生徒を育む。各教科等の年間指導計画に「書いて話す言語活動を取り入れた話し合い活動年5回」を挿入して実践し、年1回以上プランシートを作成し授業を公開する。
- ② 各種検定の奨励及び「成長管理ノート」を活用した目標管理を徹底し、家庭学習を習慣化させ、自学自習力の向上をめざす。
授業と連動した課題を与えることで家庭学習習慣を確立する。「自学自習」につながる授業実践、か・ふ・や・みを意識した授業に取り組む。
- ③ 小中一貫教育を通して交流を深め、小中のつながりを実感させる小学6年生の「石田中登校日」や、「小中あいさつ運動」を実施。全生徒が年1回以上ボランティア活動を年1回以上体験し、地域行事への参加等の体験活動を推進する。

(2) 寄宮中学校の実践

- ① 「問い」が生まれる授業づくりの推進
 ア 他者との交流を通し、「問い」が生まれ自分の考えを広げ深める授業づくり
 イ 全教科で「個別最適な学び」「協働的な学び」を実践し、自ら課題に対し自己調整しながら学習を進めることができる自学自習力
- ② 学習規律(3構え)の徹底
 ア 気構え・・・注意力、根気強さ、常に疑問を持つ、必ず確かめる
 イ 身構え・・・ベルの合図、席で静かに、身なりを正しく
 ウ 物構え・・・忘れ物をしない、学習の準備、机上の整理整頓
- ③ 教科会の充実（教科会へ主事招聘）
 ア 「主体的に学ぶ生徒」「自立した学習者」を育てる授業づくりについて共通理解を図る
 イ 各教科年1回以上指導主事等を要請した研究授業の実施
- ④ 家庭学習の充実、各種検定の奨励
 ア 授業と連動した家庭学習の往還
- ⑤ キャリア教育の充実
 ア 総合的な学習の時間での探究活動の充実
 イ かかわる力・ふり返る力・やり抜く力・みと

おす力を意識した授業づくり
ウ キャリアパスポートやダイアリーを活用した
自立的な学びの支援

⑥ GIGA スクール構想の推進

ア タブレットを活用した授業実践や校務処理の
推進

（3）古蔵中学校の実践

- ① 学習規律は、令和4年度から重点的に取り組んでおり、改善が見られる。また、これまで各教科でICTの積極的な活用により、積極的に学習に取り組む態度が見られる。今後も継続して粘り強く指導しながら基本的な学習態度を身につけさせる。
- ② 全教科による学習観の転換により、生徒主体の授業改善に取り組む。授業中にアウトプットする場を必ず設ける。（教師主導 ⇒ 生徒が主体的に学ぶ学習スタイルへの転換）
- ③ 目的を持ったペア学習やグループ活動による。学び合いを行ない、多様な考え方に気づかせる。
- ④ 1単位時間での「めあて」「まとめ・振り返り」を確実に実施する。また、教師が一方的に「まとめ」を行なうのではなく、生徒の声を拾い、その気づきから「まとめ」を行なう。
- ⑤ 計画を立てて家庭学習に取り組む「自学自習力」の育成は本校の課題である。教師は以下の2点に努め、授業と連動した家庭学習を提示し、「自学自習力」の育成を図る。実生活と関連のある、家族と会話しながら取り組める家庭学習を提示する。タブレットを有効活用しながら取り組めるスタイルの家庭学習を提示する
- ⑥ 個の理解に努め、個に応じた学習課題の提示を行なう。
- ⑦ キャリア教育の充実に努める。将来の夢を持ち、その夢実現のために今なすべき事を、夢実現ノートを活用し、計画立てて取り組ませる。
- ⑧ リフレクションタイムの実施（勤務時間内に時を確保し、毎週金曜日に実施）
- ⑨ 全教師による「1人1授業」の実施

（4）仲井真中学校の実践

- ① 生徒一人一人が大切にされ、良さや可能性を高め伸ばす学級経営
ア 生徒自身の良さや可能性を伸ばし、「自己肯定感」を高める学級経営
- ② 確かな学力の向上（学習を支える力や生徒の「自学自習力」の育成）
ア 「仲井真授業づくり」の共通実践
イ ICTの活用等による個別最適な学びの実現を目指す。（タブレット端末の活用）

③ 基本的な生活習慣の形成

ア 望ましい生活リズムの確立
イ 規範意識・マナーの育成

④ 学力向上マネジメント

ア 全校体制による学力向上推進PDCAサイクルの構築
イ 授業改善PDCAサイクルを生かした学力向上推進

5 校長の関わり

（1）4校の共通している関わり

- ① グランドデザインの周知徹底と共通理解
- ② 日常的な授業参観（観察）とフィードバック
- ③ 研究授業後や校内研修等での指導助言
- ④ 学校だより等での保護者・地域への広報活動
- ⑤ 週案へのコメント
- ⑥ 教職員評価システムを活用した指導（面談等）

（2）各学校の特色ある取り組み

- ① 「成長管理ノート」を活用した目標管理と、達成に向けアドバイス（石田中）
- ② 探究活動におけるカリキュラムマネジメントを働かせた地域教育資源の有効活用（寄宮中）
- ③ 毎週、「リフレクションシート」をチェックし、教師一人一人へコメント（古蔵中）
- ④ 職員を育てること（ミニ勉強会）、職員の良さを見つけることを意識して学校経営（仲井真中）

6 成果と課題

（1）成果

- ① 各学校の取り組みを進めることで、学力を支える力である生徒の自己肯定感や自己有用感の高揚がうかがえる。
- ② 授業改善を進めることで、各学校の授業スタイルの構築がすすんでいる。
- ③ 校長の助言等の関わりが、教職員の意識改革へつながり、授業改善へ活かされてきている。
- ④ 一人一授業や教科会の充実を通じた取り組みは教職員の授業力の向上に確実に寄与している。

（2）課題

- ① 各校で共通実践をする中で、教職員の意識に温度差がある。
- ② 生徒質問紙から自己肯定感等の高揚はうかがえるが、各種調査の点数や不登校数の減少にしっかりと結びついていない。
- ③ 子供の多様性を考えたときにいろいろな支援を要する生徒がいるが、個に応じた指導を行なうための支援員等の人材確保が必要である。

7 おわりに

本研究主題における各校の具体的取り組みや生徒質問紙についてまとめることで、各校の効果的な取り組みの共有ができたが、一方で共通した課題も浮き彫りになった。その課題を改善するためにも、校長としてカリキュラムマネジメントの充実を一層進めながら、生徒の資質能力を育成するために授業改善の充実を図っていく必要がある。

第2分科会【島尻地区】

『確かな学力』

研究主題

主体的・対話的で深い学びの実現

1 はじめに

学習指導要領では予測困難な時代に一人一人の生きる力を育むことを目指し、確かな学力・豊かな心・健やかな体をバランスよく育成するとしている。その中核となる資質・能力として「知識及び技能が習得されるようにすること」「思考力、判断力、表現力等を育成すること」「学びに向かう力、人間性等を涵養すること」の3つの柱を重視している。この3つの柱を全ての生徒が身に付けることができるようにするために、現在、各学校では主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に取り組んでいる。以下、実践事例を紹介する。

2 主題設定の理由

生徒一人一人の可能性を引き出し、未来を生き抜く力を育成する教育が求められており、その実現には「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に推進した「主体的・対話的で深い学び」の授業改善を学校組織として取り組む必要がある。

3 研究の視点

- (1) 授業改善に係る学校組織体制づくり
- (2) 各学校の特色ある取組
- (3) 校長の関わり・指導性

4 研究の実際

- (1) 糸満市立西崎中学校

校内研究テーマ「主体的・対話的な学びで『学びの実感』が生まれる授業づくり～西崎レベルアップメソッドを取り入れた組織的授業改善を通して～」

① 研究のねらい

一人一授業公開を通して学びの質を高め、授業改善・学校改善を図る。

② 取組内容

ア 西崎レベルアップメソッドを学習過程に位置付け目指す授業像や授業のポイントを共有

- 自分の考えを書くこと
- 自分の言葉で説明すること
- 図・グラフ・表の読み取り

共同研究者

- ◇伊井 秀 治（糸満市立西崎中学校）
- ◇稲 福 政 彦（八重瀬町立具志頭中学校）
- ◇平 良 正 哉（南城市立佐敷中学校）
- ◇宮 里 安 英（座間味村立慶留間中学校）

- 難問へのチャレンジ（無答率の改善）

イ 「授業の基本型」を意識した授業実践

- 「つかむ」見通しが持てるような導入
- 「考える」自分自身で考える時間の確保
- 「深める・広げる」他者との交流・確認
- 「まとめる・振り返る」学びの振り返り

ウ リフレクションの充実

- 参観者が付箋紙にコメントを記入しホワイトボードに貼り付け授業改善に生かす。
- 管理職による指導助言の充実を図る。

④ 校長としての関わり

ア 日常的な授業観察及び「一人一公開授業」の指導助言により授業改善を支援する。

イ 教職員評価システムによる職員の育成。

ウ 「一人一授業公開」を学校だよりで紹介し、保護者等への周知を図る。

(2) 八重瀬町立具志頭中学校

校内研究テーマ「主体的に学習に取り組む生徒の育成～ICTの効果的な活用を通して～」

① 研究のねらい

「自己肯定感の高まり」「学び・育ちの実感」

「組織的な関わり」の視点による授業の振り返りの活動を通して主体的に学習する生徒の育成を図る。

② 取組内容

ア 日常的な授業公開・授業参観

イ 各種調査結果の分析に基き、課題となった学習活動を全授業の中で意図的に設定

ウ 授業と連動した宿題の提示

エ キャリアノート「未来ノート」の活用

オ 国・数・英を中心とした朝学習の実施

カ 放課後補習（毎週水曜の15分間）の実施

キ 高校生ボランティア（向陽高）による夏休みの補習及び中学校期における学習方法等についてのアドバイスの実施

③ 校長としての関わり

ア 日常的な授業観察及び「一人一公開授業」において教科等横断的な視点で指導助言を行う。その際に県公立学校教員等育成指標

の採用（1年目）、基礎（2～4年目）、充実（5～9年目）の各ステージの教諭及び臨任教諭等を適宜同行させ助言等を行う。

イ 講話や学校だより等を通して生徒・保護者・教員の「学び」に対する意識改革を図る。

ウ 「学びに向かう集団づくり」の視点で適宜助言を行う。

エ 生徒の学びを支援するファシリテーターとしての役割の視点で適宜助言を行う。

(3) 南城市立佐敷中学校

校内研究テーマ「学びの質を高める授業づくり～生徒指導の4つのポイントを意識した教育活動の実践を通して～」

① 研究のねらい

学びの質を高める授業づくりに向け、生徒指導の4つのポイントを意識した教育活動の実践を展開することにより、生徒の自己肯定感が高まり、生徒が意欲的に学習活動に取り組むと考える。

② 取組内容

ア 生徒指導の4つのポイントを意識した教育活動の工夫

- 指導主事を招聘して研究授業及び全体研修会を実施する。
- 生徒指導の4つのポイントを学級・学年・学校全体など組織的に実践する。
- 生徒指導の4つのポイントを意識した教育活動を実践しての結果を定期的に生徒アンケートを実施することで、取り組みの見直しや改善を行う。
- Q・Uテストを活用し、生徒の実態把握及び支援の手立てを組織的に行う。

イ 教科会で授業リフレクションを取り入れた授業改善の推進

- 全教科で授業リフレクションを取り入れ、教科会の充実を図る。
- 一人一公開授業の指導案を事前に練り合い、授業後に振り返る。
- 授業リフレクションで話し合った内容はリフレクション用紙に記録し掲示する。

③ 校長としての関わり

ア OJTを意識しながら日々の授業観察後、出来るだけ早く確実に感想を伝える。

イ 教科会や学年会へ不定期に参加して効果的に意見交換を行い、授業改善の視点を揃え、授業力の向上を図る。

(4) 座間味村立慶留間中学校

校内研究テーマ「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善～身につけさせたい力を明確にした学習指導の工夫～」

① 研究のねらい

学力向上・校内研修・児童生徒会活動の取組で「問い」を言葉にして表現できる力の育成と共に、問い返しや質問がしやすい支持的風土の醸成に努め、魅力ある学校づくりを目指す。

② 取組内容

ア JST（J：実、S：生活に、T：つなげる）アプローチ

なぜ勉強するのかについて、全職員で4つのKey（実生活につなげる・自己決定の場・見通し・ファシリテーター）を意識して全教育活動で実践。

イ 小鳩会（児童生徒会活動）による自治的活動の推進

「気づき・考え・行動する」をスローガンに掲げ、自己存在感や共感的な人間関係の醸成等を目的に、小中で合同学活を要に以下の活動を年間を通して行っている。

- 週番活動（朝会・集会の運営、放送）
- 委員会活動（保健・環境整備、図書）
- 青少年赤十字活動（奉仕活動・ボランティア活動）

③ 校長としての関わり

ア 日々の授業観察とフィードバック及び支援。

イ 教職員評価システムを効果的に活用し、職員を育てる。

ウ 職員の良さを見つけることを意識する。

エ 家庭学習のサイン（児童・生徒への励まし）。

5 成果と課題

(1) 成果

ア 校内研究等を通して組織的・日常的な共通実践を行ったことで、目指す授業像や授業改善のポイントを全職員で共有するなど教員の意識の向上がみられた。

イ 支持的風土が醸成され、主体的に学ぼうとする集団が形成されつつある。

(2) 課題

ア リフレクションの時間の確保

イ 「個別最適な学び」や「協働的な学び」についての更なる共通理解と組織的体制づくり

第2分科会 【宮古地区】『確かな学力』

研究主題 「主体的・対話的で深い学び」の実現

学習の質を一層高めるための「主体的・対話的で深い学び」の授業実践と学校の体制づくり

共同研究者

◇狩俣 典昭（宮古島市立平良中学校）

◇崎山 用彰（宮古島市立下地中学校）

1 はじめに

学習指導要領では、各教科等の目標及び内容が、育成を目指す資質・能力の三つの柱（「知識及び技能」「思考力、表現力、判断力等」「学びに向かう力、人間性等」）に沿って再整理され、各教科等でどのような資質・能力の育成を目指すのが明確化された。これにより、教師が「子供たちにどのような力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を推進しなければならない。そこで本研究部会では、校長の確固たる教育理念のもと、授業改善や学校組織体制づくりの実践事例を紹介する。

2 主題設定の理由

高度情報化社会への発展に伴い、複雑で将来への予測が困難となるこれからの社会を生きるために必要な力として、「生きる力」を捉え直し、しっかりと発揮できるようにしていくことが求められており、その実現には「主体的・対話的で深い学び」の授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）に学校組織として取り組んでいく必要がある。

3 研究の視点

- (1) 授業改善に係る学校の組織体制づくり
- (2) 授業研究等に係る校長の指導性（関わり）

4 研究の実際

【宮古島市立平良中学校】の実践例

- (1) 学習の質を一層高めるための「主体的・対話的で深い学び」授業実践と学校の体制づくり

○「ベクトルを揃える」校内研修の実施

本校では、5つのSHINPO力(※1)の育成を目指しており、その浸透に向けて「ベクトルを揃える」ための研修を実施(R6.4.5)した。

ア 学年団でベクトルを揃える(研修前)

校長の経営ビジョンの具

現化に向け、SHINPO力の育成について学年団で3つの視点（集団づくり・授業改善・かふやみ手帳の活用）から協議を行い、本年度の具体的実践に繋がってきた。



本校の方向性に向けて

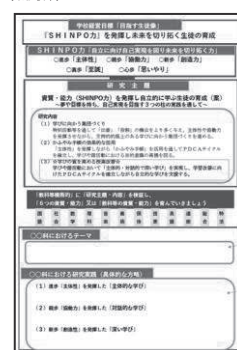


「ベクトルを揃える研修」学年団による協議

イ 各教科でベクトルを揃える（研修後）

SHINPO力を踏まえつつ、各教科の資質・能力の育成及び校内研テーマの視点から協議を行う。協議のまとめとして、教科毎のテーマと研究内容に沿った具体的方策を「教科プラン」にまとめ、日々の授業実践に繋げてきた。

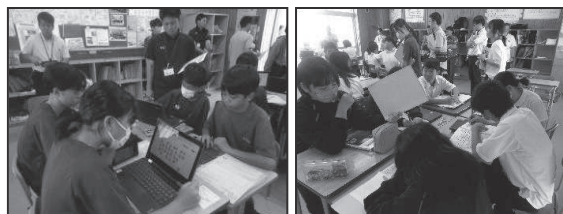
※SHINPO力「主体性」「協働性」「創造性」「至誠」「思いやり」の5つとし、その内、先の3つは、「主体的・対話的で深い学び」を実現させる中で育成することを目指している。



教科プラン

- (2) 各教科等の学習状況の把握及び授業の評価・改善のあり方

① 組織的授業改善「自己申告授業」の実施

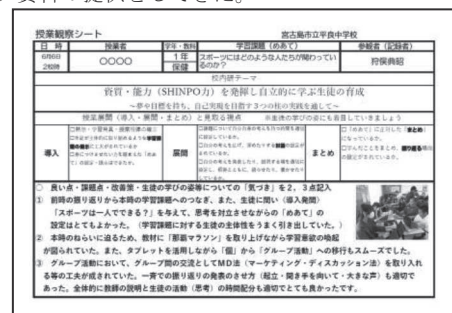


自己申告授業の様子(R6「1学期」)

先述した「ベクトルを揃える」校内研修で「教科プラン」を基にした「自己申告授業」を各教員が実施、教員間の互見授業として参観し合い、教科を主体とした授業改善を推進してきた。

② フィードバックの実施（校長としての関わり）

各教師の授業力向上をねらい、前記①の自己申告授業においては、校長として可能な限り授業観察をし、校内研テーマ（教科プラン）の視点から、授業者一人一人にフィードバック資料の提供をしてきた。



校長 授業フィードバック資料

【宮古島市立下地中学校】の実践例

(1) 時間割や週時程の工夫

① 朝の読書活動・ドリル学習の充実

登校後の10分間を利用して実施。学級担任だけでなく、教科担当者も活動を見守り、子供の学習意欲の向上を図る。職員朝会は原則行わない。

② 「学びづくり」「絆づくり」プロジェクト班会議

6つの資質・能力の育成を目指す2大プロジェクトとしてそれぞれの班会議の時間を毎週1時間設定し、その推進を図る。

③ 毎週水曜日の「ノー部活デー（ノー残業デー）」

水曜日を「ノー部活デー（ノー残業デー）」として設定している（月1回の校内研修会を位置付けている）。

④ 部活動の終了時刻を通年18時に設定

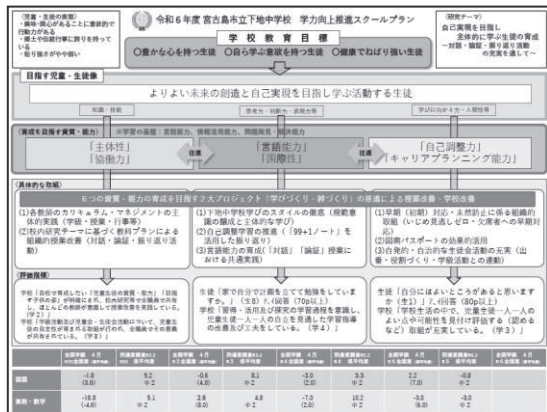
子供の規則正しい生活習慣づくりに資するためにも、部活動の終了時刻を18時に統一している。

(2) 校内研修の工夫・改善

R6年度 校内研修テーマ「自己実現を目指し主体的に学ぶ生徒の育成 ～対話・論証・振り返り活動の充実を通して～」

① 校内研修体制の構築

年間の校内研修計画の内容を全職員で確認する。本校の子供の良さや強み、課題と改善策（全国学力・学習状況調査、標準学力検査、沖縄県学級のたしかめ・到達度調査等の結果）を分析・共有し授業改善に生かす。現状の「R6 下地中学校学力向上推進スクールプラン」を以下に示す。



R6 下地中学校学力向上推進スクールプラン

② 「学びづくり」「絆づくり」プロジェクト班会議と連動した研究・研修等の充実（外部講師等の活用）

ア「生徒発達支援」に係る研修会

合同会社レジスポ管理者 栄 孝之 氏

イ「特別の教科 道徳」研修会

秋田公立美術大学教授 毛内 嘉威 氏

ウ「救命救急（心肺蘇生法）」研修会

本校養護教諭 中村 梢

エ「諸学力調査結果と WebQU 活用」に係る研修会

オ 1 人年 1 回以上の公開授業の実施

・自己申告授業の実施。

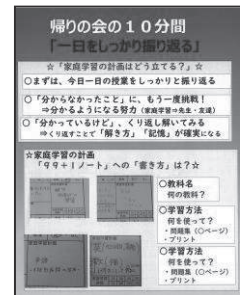
・「学びづくり班」「絆づくり班」からの公開授業の実施。



公開授業等の様子

③ 「99+1 ノート」の活用

「1%の時間（10 分間）で、毎日の振り返りを帰りの会でやり、自分自身に未来（目標達成）に繋げていく」ことをねらいとして、1日の学びを振り返るとともに、家庭での学習を充実させる取組として行っている。



R6 「99+1 ノート」説明

(3) 校長としての関わり

① 学校経営計画等の共通理解

ア 学校ランドデザイン等の共通理解。

イ 学力向上推進スクールプランの共通理解。

ウ「下地中学びのスタイル」の更新。

② 諸学力調査や WebQU、学校評価等の結果分析の活用

ア 諸学力調査や WebQU、学校評価等の結果分析から、学校の課題だけでなく良さ・強みを生かした学校経営の工夫に取り組んでいる。

イ「学びづくり」「絆づくり」プロジェクトの推進

- ・学びづくり班：「自立した学習者の育成」「組織的な授業研究の推進」に資する取組充実に向けた指導・助言。
- ・絆づくり班：「安心・安全な居場所づくり」「なすこと」によって学ぶに資する取組充実に向けた指導・助言。



R6 下地中ランドデザイン

5 成果と課題

(1) 成果

① 学校経営ビジョンや本校で育成を目指す資質・能力を共有し、学力向上に向けた具体的方策を各学年・各教科等への実践に繋げることができた。

② 校内研究・研修後の指導・助言等により、授業改善が進みつつある。

(2) 課題

① 自己申告授業については、可能な限り参観者を増やし、フィードバック内容の質的保障と時間確保等についての改善が必要である。

② 子どもがより主体的に学ぶためのツールとしての ICT の効果的な活用については、今後も研修を積み重ねていく必要がある。

[illegible]

第65回沖縄県中学校長研究大会中頭大会

地区別提案資料

中学校 第3科会

「豊かな心」「健やかな身体」

第3分科会「豊かな心」「健やかな身体」

研究主題

よりよく生きるための道徳性の育成と
健康で安全な生活を実現するための教育の充実

<共同研究者>

榮 葉子（普天間中学校） 仲程 正（嘉数中学校）
又吉 直正（真志喜中学校） 由 博文（宜野湾中学校）
平良 真也（西原中学校） 吉田 敬（西原東中学校）

1 はじめに

これからの学校教育は、一人一人の児童生徒が自分のよさや可能性を認識するとともに、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。以下、校長の確固たる教育理念のもと、学校組織体制で研究主題にせまる本地区4校の実践事例を紹介する。

2 主題設定の理由

学校における道徳教育は、生徒がよりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標としている。教育活動全体を通じて、道徳性を構成する道徳的判断力、心情、実践意欲と態度を養い、人格形成を図る必要がある。また、健やかな身体、体力は人間の活動の源であり、「生きる力」を支える重要な要素である。道徳教育同様、教育課程外の学校教育活動などを相互に関連させながら、学校教育全体として効果的に取り組む必要がある。

3 研究の視点

- (1) 全ての教育活動と「特別な教科 道徳」との関連性を図る道徳教育と健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現するための具体的取組
- (2) 校長の関わり・指導性

4 研究の実際

(1) 真志喜中学校（生徒数950名）

令和6年度より、教育目標を「豊かな心で自ら学び、たくましく国際社会を生きる生徒の育成」とした。生徒個々が豊かな心で信頼関係を構築した上で自主的に学ぶ環境を整え、未来社会を逞しく生きていくことができるよう、公立学校としての役割を果たしていく。

①豊かな心の育成に向けた具体的な取組

ア 人権教育・平和教育の推進充実

毎月第一週を「人権の日」の特別日課を設定し、朝の会後に放送委員による校内放送を入れる。放送終了後にワークシートに感想を記入。学習委員が回収し提出状況を記録簿に記入。平和教育ではこれからの若者の視点による平和への意識と継続して大切

な価値として引継げるよう講師選定等を工夫する。

イ 教育目標の具現化に向けた生徒会活動との連携
豊かな心の育成では、生徒会執行部と連動し、「あいさつ」の掛け声溢れる学校づくりに取り組んでいる。取組の実態把握や成果・課題を図るためのシステムづくりを行っている。

②校長の関わり・指導性

諸校務担当の考えやねらい、運営をしっかり聞いて運営上の課題となりそうなところを助言している。また、取組後の成果と課題を洗い出す材料が設計できるように助言を行っている。

③成果（○）と課題（●）

○学校教育目標の「徳育：豊かな心」を経営の柱に据えたことで学校全体で徳育を意識した実践が提案されるようになった。

●人事異動等で年度を跨いでも目的やねらいが引き継がれていけるように校内研修の充実や年度間での再確認の場を数回入れる必要がある。

(2) 宜野湾中学校（生徒数709名）

①「豊かな心」の育成に向けた具体的な取組

ア 規範意識を高めさせいじめが発生しにくい人間関係づくりの育成

イ 学び合える支持的風土のある学習態度の育成（学習規律確認月間の取組）

ウ 学習指導要領の内容項目を意識した「議論する道徳」「考える道徳」の推進

エ 「輝く集団」づくりの推進

オ 生徒自らが成長を実感でき、これからの課題や目標が見つけれられる教育活動の推進

カ 平和教育・人権教育の推進

キ 学校不適応傾向の生徒への早期対応と不登校生徒へのきめ細やかな対応

「たくましい心と体」の育成に向けた具体的な取組

ア 自ら運動に親しみ体力の向上を図る態度の育成

イ 健康・体力増進に対する実践力の育成

ウ 危険を予測し、それに適切に対応できる安全能力と実践力の育成

②校長の関わり・指導性

校長講話等を活用し本校の現状やこれからの取組等について全生徒が意識を高くもてるような働きがけを行っている。

③成果（○）と課題（●）

○「豊かな心」の育成については、学級内で「議論する道徳」「考える道徳」を推進したことや特活で話し合い活動を中心に行ったことで、「人の気持ちを理解でき、お互いに助け合えること（91.7%）」「私は相手を傷つけるような言葉づかいをしていない（82.1%）」など肯定的な結果に結びついている。

●一方「たくましい心と体」については、「部活動や生徒会、地域での活動等を積極的に行うこと（71.9%）」でやや積極的に行っていない意見が多い。

(3) 西原中学校（生徒数589名）

①具体的な取組

ア 道徳教育の充実

- ・自己を見つめ物事を広い視野から多面的、多角的に考え、人としての生き方についての考えを深める学習を行う。
- ・生徒の実態を踏まえ、いじめの早期発見、早期解決や防止のための対策に関する方針等と関連づけた指導を効果的に行う。
- ・問題解決的な学習や体験的な学習など多様な指導方法を取り入れる。

※担任の道徳ローテーション授業の推進

イ 自治能力の育成

- ・自治能力の育成（生徒会活動等）の充実を図るため、職員の意識改革が必要である。職員が生徒へ必要以上に「指示をしない」等、意識の醸成を図った（日々の会話）。

②校長の関わり・指導性

西中祭の企画立案、職員への職員会議での提案や生徒会による全生徒への「校則を守ろう」と題した校則理解促進のプレゼンの実施などの企画・実践への方向性の確認と助言を行っている。

③成果（○）と課題（●）

○全体・学年での研究が進みつつある。そのことにより、課題や成果が共通確認でき、授業改善に繋がっている。

○生徒の活動が活性化してきた。

●時間の確保、受容性を高める工夫、意識の更なる共有（同じベクトル）等。

●職員の意識改革は時間がかかる。ゆっくりと焦らず推進する。

(4) 西原東中学校（生徒数539名）

①「豊かな心」の育成に係る具体的な取組

ア 道徳の授業改善

- ・校内研修や小中連携授業研究会で道徳を取り上げ協働的に研究を深め、ローテーション授業を実践する。

イ 平和教育の充実

- ・外部講師招聘の講話や平和の礎刻名者の読み上げ、フィールドワーク等を実施し、全学年を通じ系統性を持たせた体験的学習を実施する。

ウ 地域生徒会の結成

- ・校区内の自治会単位で地域生徒会を立ち上げ、地域行事や地域ボランティアへ生徒を参加させ地域への貢献活動の意識を高める。

②「健やかな身体」の育成に係る具体的な取組

ア 食育の充実

- ・栄養士とのTTによる家庭科授業や学年行事（食育講話等）を行って食育を推進する。

イ 持久力を高める取り組み

- ・全学年の保健体育の授業で、年間を通して持久走に取り組む計画を立て実践する。

③校長の関わり・指導性

担当教諭への助言やサポートをし、学校全体で取組むよう職員の意識を高めている。

④成果（○）と課題（●）

○[豊かな心]道徳の授業づくりに関する職員の意識が高まった。[健やかな身体]持久力をはじめとし体力の向上が見られた（全国体力テストの結果から）。

●[豊かな心]道徳の授業の質を高めるために研究・指導体制の更なる充実を図る。

5 おわりに

学校長のリーダーシップのもと、創意工夫しながら学校教育をより充実させていこうとする取組が共有できた。今後も各学校の特色を生かし、知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」の育成をめざし、学校経営の充実・発展に努めていく。

第 3 分 科 会

研 究 主 題 「豊かな心」「健やかな身体」

より良く生きるための道徳性の育成と健康・安全
で豊かな生活を実現する教育の充実

共同研究者 島田 毅（久米島西中学校）

馬上 晃（石嶺中学校）

島袋 勝範（首里中学校）

仲間 健（城北若夏分校）

1 はじめに

社会環境が大きく変化する現代社会において、学校においては子どもたちの支持的風土を醸成し、豊かな心・健やかな身体を育み、人としてのあり方や生き方を考える教育の充実が求められている。

本ブロックでは、各学校で実践されている「豊かな心」の育成、「特別な教科道徳や総合的な学習」の時間に関する取り組みについて研究を進めることとした。

2 主題設定の理由

「魅力ある学校づくり」において学校においては、支持的風土醸成のための「支持的風土4つのポイント」を具現化して取り組むことが求められている。

このような観点から上記研究主題を設定し、教育実践を進めることにした。

3 研究の視点

- (1)「豊かな心」「健やかな身体」の育成に向けた各学校の具体的な取り組み。
- (2)「特別な教科道徳」「総合的な学習」の時間に関する取り組み。

4 研究の実際

(1) 久米島西中学校の実践（生徒数 127 名）

本校では、「豊かな人間性」の育成に向け、自立した一人の人間として、他者とともにより良く生きる人格を形成することを目指し、道徳や総合的な学習の時間等を通して教育活動全体の中で組織的に取り組んでいる。

- ①道徳の授業の重点目標「考え、議論する道徳」に向け、話し合い活動の充実を目指し、ローテーション授業を実施し生徒個々の道徳性の育成の向上を図っている。

②総合的な学習の時間を活用した取り組み

総合的な学習の時間を活用し、全学年でエコプロジェクト（ビーチクリーン）を実施するとともに、学校行事として地域行事への参加や伝統文化

を取り入れる等、「郷土愛」を育む取り組みも行っている。

③SDG s への取り組み

本年度、SDG s 達成に向けた教育実践指定校となり、講師招聘の授業、SDG s パスポートの活用、校内授業研の実施などに取り組み、「共に生きる～持続可能な社会を目指して」達成に向けた取り組みの推進に繋げている。

④校長としてののかかわり

日頃の子どもたちの活動の良い点を学校だよりや各行事での子どもの活躍を映像や写真で掲示するなど、自己肯定感の向上に努めるとともに、校内研での取り組みの共通理解・共通実践について日頃から意識して取り組んでいる。

(2) 那覇市立城北中学校の実践（生徒数 407 名）

本校では、3つの「整える」を念頭に置き、豊かな心の育成に取り組んでいる。

①学校環境を整える

正門周から校舎に至るまでのルートは枝打ち、草の刈り込み、季節によっては花で彩っている。剪定、刈込は日常的に行われ、校歌歌碑からは、校歌が聞こえるよう工夫している。教室フロアでは、進路・生徒指導、その時期の行事に係る掲示資料、生徒作品、教育実践が分かる資料が掲示されている。

②生徒の取組を整える

玄関にスクリーンを設置。プロジェクターで子どもたちの活動の様子、予定等をスライド形式・ループで流している。写真中心だが、合間に言葉のスライドを入れ、ねらいや経過の確認、振り返り、価値づけ・見通しを持たせることを意識している。

③教師の取組を整える

週初めに A4 サイズの校長連絡を発行している。左半分は、現状、近況をふまえた重要実践事項に係る資料、右上は、校長として提示するやるべきことリスト等フォームを固定、上部には前週のような写真を 5.6 カット載せている。特に学校生

活の基礎的単位である学級・学級経営を重視、支持的風土づくりの4つのポイントを意識した内容となっている。

④総合的な学習の時間を核とした学校教育全体を通したキャリア教育の推進

主体性のある生徒の育成を目指し取り組み本年度で5年目を迎える。特に2.3年は異年齢のグループ探究活動で班が年間を通し各自の探究テーマに基づき取組、成果発表を実施（城熱博10月）

(3) 那覇市立石嶺中学校の实践（生徒数450名）

①本校では、年度当初に道德教育の重点や推進すべき方向、育成を目指す生徒像や一斉道德の持ち方について確認し、定例の担任会で、教材の共有、教材研究を行っている。

②具体的な実践

ア 道德推進教師を中心に学校OJTを積極的に活用して研究授業や授業研究会を行い優れた指導スキルや指導資料、学級経営、掲示物、情報交換等を学ぶ機会を設け、指導体制の充実を目指している。

イ 「支持的風土4つのポイント」（安心・所属・承認・自立）を意識した集団の取り組み
○学びを社会とつなげる「鍊心タイム」の推進
○小中一貫教育と校内研究の連動によるキャリア教育の推進

○認め合いよりよい集団を形成する学級力の向上
○生徒会「団活動」による絆づくりの推進と魅力ある生徒主体の学校行事の創造
○望ましい教育環境の整備と部活動、地域活動等の充実

ウ 地域との関わり、放課後子ども教室の茶道や毎年5月の「那覇ハーリー」、10月の「旗頭」、11月の「首里王朝祭り」などの文化的な行事の参加は、地域の方々の協力のもと、連携して参加しており、生徒の行動を支える内面的な資質の育成に関係している。

③校長としてののかかわり

総合的な学習の時間を核としたキャリア教育を推進しており、4月の新職員を迎えて「鍊心タイム」の内容を提案、校内研修「鍊心タイムワークショップ」で本校の教育の目的や目標の実現に必要な教育内容等を教科等横断的な視点で組み立てて実践することについて確認した。

(4) 那覇市立首里中学校の实践（生徒数703名）

学校教育目標「ふるさと首里を誇り 志高く未来の可能性に挑戦し続ける生徒を育む」を掲げ、知・徳・体の調和のとれた成長を目指している。特に校長としての関わりは、毎朝のあいさつ運動と登校指導からはじまり、全体集会などにおける激励や賞賛の講話、生徒会の各活動や行事に関するプレゼンテーションへの助言。教育相談に係る支援指導等の他、部活動の適正化においても先頭に立ち推進している。また、道德科及び人権啓発活動の一環として下記を実践している。

①道德においてはローテーション授業の実施の

他、自己肯定感及びチャレンジ精神の向上を目指し関連する内容項目によって各学期2回実施、年2回実施としている。

②人権啓発活動の一環として那覇人権擁護委員会と連携し、「人権の花運動」に取り組んでいる。生徒が互いに協力しながら花を育てることをとおして命の大切さを実感し、その中で優しさ・思いやりなど人権尊重の精神を育み情操を豊かなものにすることを目的としている。

③地域行事への関わりとして、自治会清掃ボランティア活動、那覇ハーリー、旗頭フェスティバルなどへ取り組んでいる。

5 成果と課題

(1) 成果

①「豊かな心」「健やかな身体」の育成に向け、学校での教育活動全体をとおした取り組みや地域行事とのかかわりを推進することにより、自己肯定感の向上につながった。

②望ましい学習環境の整備や「生徒・教師の取組」を整えるなど、教育環境を整備することにより豊かな心の醸成につながった。

(2) 課題

①学校における多くの教育活動の中で、「豊かな心」「健やかな身体」の育成に向け、どのように関連付けるか、今後も研究が必要である。

6 おわりに

本研究を通し、各学校の教育実践から得られた取り組みを今後の道德教育の実践に生かすとともに、生徒の「豊かな心」「健やかな身体」を育む教育活動の充実・発展に努めたい。

第 3 分科会【島尻地区】

『豊かな心』 『健やかな身体』

研究主題

よりよく生きるための道徳性の育成

共同研究者

- ◇糸洲 修（南城市立久高中学校）
- ◇嘉数 雄信（渡嘉敷村立渡嘉敷中学校）
- ◇奥那嶺律子（南風原町立南星中学校）
- ◇有銘真一郎（南城市立玉城中学校）
- ◇平良 真也（糸満市立糸満中学校）

1 はじめに

学習指導要領改訂で、道徳が「特別の教科」として位置づけられ、検定教科書を使用し、「評価」も行うことになった。

教科書は、生徒目線を重視した教材の選定やデジタル教材を備えるなど、「考え議論する道徳」授業が展開されるよう整備がすすめられている。

教室で「考え議論する道徳」が日常的に実施され、生徒が「道徳的価値を大切にする心」を主体的に育み、道徳性を高めていくためには、教師一人一人がこれまでの「読み物中心」「心情理解のみに偏った」授業から、人間としての生き方を生徒とともに考え合う授業へ転換することが求められる。

本研究では、各教師が「考え議論する道徳」を実践することによって、よりよく生きようとする意思や能力を育むことができる道徳教育を実現していくために、校長としてどのように具体的に関わるかについて追究する。

2 主題設定の理由

急激に変化する社会にあって、青少年の規範意識や人間関係を形成する力が低下し、そのことが生命の軽視につながり、いじめなどの社会的な問題となることもある。これからの社会においては、なおいっそう生徒一人一人に、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を身につけさせることが大切である。

そのためには、他教科等との連携を図りながら、「特別の教科 道徳」において、物事を多面的・多角的に考え、議論していく授業を実施できるよう、校内の指導体制を充実させることが重要である。また、道徳的価値について自覚を深める活動の充実を図ることが必要である。

校長として具体的な関わり方を論じ、協議題に迫る学校経営の展望を究明し、共有する。

3 研究の視点

- (1) よりよく生きようとする意思や能力を育む道徳教育の充実
- (2) 各校の規模や環境等の特性を生かした道徳教育の推進

4 研究の実際

〈南城市立久高中学校の実践〉

本校では、道徳教育の指導内容に『常に「生命尊重」を第一に考えることのできる生徒を育てる』を各学年の共通目標とした教育活動全体で行っている。

(1) 幼・小・中連携「豊かな心を育む」教育の充実

幼稚園・小学校・中学校が一緒に行う学習や行事、活動等があり、年上の子が下の子の世話をしている場面を多く見かける。異校種交流の中では、子供同士がお互いを認め合い信頼することで、思いやりの気持ちが育ちやすい。このような子供達の交流をさらに充実させるために、それぞれの校種や学年の教科や領域のねらいを明確化するとともに異校種交流をはじめ道徳的価値のある活動が実施できる時期や内容を再検討し、教育課程に明確に位置づけた指導計画の作成を進めている。

(2) 地域人材を活用した授業の充実

家庭・地域との連携として、地域人材を活用した授業づくりに取り組んだ。ゲストティーチャーの方の子供達に対する思い、故郷への思い、自分の生き方についての考え等が子供達の心に深く響き、これまでの自分を振り返ったり、自分のできることをしていこうという意欲に繋がったりするなど、良い学びとなっている。

(3) 道徳的实践力を高める体験活動の充実

他教科との関連を図りながら、体験活動を道徳に生かすように各教科の学習内容と道徳の内容項目との関連を整理、改善している。

〈渡嘉敷村立渡嘉敷中学校の実践〉

本校は、離島の小規模校ということでクラスの生徒が少ないという実態から、多様な考えが出にくい、強い意見に流されてしまうという傾向があり、多角的に物事を見たり、考えたりする機会に乏しい。そのため、全教諭が「主体的・対話的で深い学びの創造」をテーマに発問の工夫を通して授業づくりを目指している。

(1) ローテーション授業の取組

1学期は道徳の授業を担当で行い、2学期は担任

と副担任で、3学期は全学年・全教諭でローテーションしながら授業を行う。ローテーション授業を実施することで、各教師の個性を生かした多面的なアプローチを行うことができ、「考え議論する道德」の推進に繋がっている。

(2) 愛汗活動

愛汗活動は、小中学生を縦割りにし、異年齢による奉仕活動を通して、勤労の精神を培っている。各班は、中学3年生の班長を置き、児童・生徒・教師が共に汗を流し、協力することにより、絆を深めている。

(3) 地域人材の活用した取組

平和学習において、地域の戦争体験者を講師に依頼し、講話やフィールドワークを実施している。

(4) 校内研修へ位置づけ

教育センターの出席講座を活用して道德の授業づくりの理論研究や主事招聘授業を校内研修で計画し、実践する。

＜南風原町立南星中学校の実践＞

本校は生徒数 665 名で通常学級 20 クラス、特別支援学級 3 クラスと比較的大きな学校である。そのため、教育活動の展開に際し、職員の共通理解を図りベクトルを一つにした実践、取組になるよう校長がビジョンを示すことが大きな役割だと考える。そこで経営方針の重点項目に「特別な教科『道德』を要とした道德教育の推進」と「考える道德・議論する道德、全員で関わる道德」を位置付け、年度当初に職員に伝え、それを踏まえた企画委員会での指導助言、職員会議での話し合いへの支援等、ベクトルと一つにすることを意識して以下取り組んだ。

(1) 全職員で関わるローテーション授業の継続実践

担当から全職員に実施の目的（①教師集団の道德教育に対する風土の醸成②学級担任が生徒を客観的に見取り新たな良さを把握、学年全体で生徒の様子を把握して成長を支援していく）及び具体的な方法等を提示し、各学年で時期を設定して取り組んだ。実施後は GoogleForm による振り返りを行って改善を図った。

(2) 「いじめ防止特設授業」と「ハートフル行動宣言」

道德における特設授業を実施し、生徒一人一人がいじめについて考え、互いの考えを共有し、今後の自分の行動を書き記した。本授業後は特活等でクラス全体でどう取り組んでいくかを話し合い「ハートフル行動宣言」として生徒会朝会で発表させ、全学級に宣言を掲示する取組を行った。道德の授業を要

としながら生徒の主体的な行動を促し、より良く生きたいという意識を育てる取組になっている。

＜南城市立玉城中学校の実践＞

本校は全生徒 489 名の中規模の学校である。道德性の育成については特別の教科道德を中心に教育目標や特別活動等と関連づけた取り組みを行っている。

(1) 凡事徹底事項を通した取り組み

本校の凡事徹底事項は「時を守り、場を清め、礼を正す」として位置づけられている。生徒会とも連携し、凡事徹底事項を推進することで日常生活における道德的な判断力、心情、実践意欲と態度の向上を図っている。

(2) 道德科のローテーション授業を通した取り組み

学年職員全体で道德科の授業に取り組んでいる。多くの教師が関わり、各教師の個性を生かした授業を行う事で、物事を多面的・多角的にとらえ「考え議論する道德」に繋げている。評価についても学年全体で評価に関わっている。

(3) 人権教育を通した取り組み

毎月第一火曜日を「人権の日」と位置づけ各学級に資料提供を行い、人権について考える機会をつくっている。また、各学年に人権教育コーナーを設け、人権の日の取り組みの生徒の感想を掲示し、それぞれの意見を共有することで他者と共感したり、考え方の違いに気づいたりできるようにしている。

(4) 平和教育を通した取り組み

慰霊の日に向けた図書室での企画展の実施や外部から講師を招聘した平和に関する特設授業、平和祈念資料館等の見学を通して、生命の尊さを知り、平和を愛する心を育てている。

5 成果と課題

- (1) 道德の授業の改善によって教材研究の進化と業務改善に取り組めた。また、生徒は様々な視点（方法）で授業を受け、学習意欲が高まった。
- (2) 生徒の道德的価値の伸長について、適切に評価するための研修の充実を図ることが必要である。

6 おわりに

新学習指導要領がめざす「考え、議論する道德」への転換から更なる充実を図るために、学校全体で道德を進める環境づくり、その具体的な旗振り役となる道德推進教師や校内研修担当などのミドルリーダーの育成を継続するとともに校長のリーダーシップが求められる。

第 3 分 科 会 【宮古地区】

『 「豊かな心」 「健やかな身体」 』

研 究 主 題

よりよく生きるための道徳性の育成と
健康で安全な生活を実現するための教育の充実

共同研究者

◇下地 直樹 （宮古島市立久松中学校）

◇垣花 秀明 （宮古島市立城東中学校）

1 はじめに

両校の学校教育目標の目指す生徒像には、道徳教育（道徳性）を学校経営の中心的な柱に据えている。

カリキュラムマネジメントにおける道徳教育では、上記の主旨で示され、学校長の経営方針のもとに構築されている。これらを学校教育活動全体で組織的に機能させることが、校長のマネジメント力であると捉えている。

校長として、研究主題の具現化に向けての取り組みを報告する。

2 研究の実際

1 宮古島市立久松中学校の実践

(1) 本校の特徴

本校は、宮古島市の市街地から南西 2 km に位置している。近年新興住宅地域として住宅が増え、島外からの移住者を中心に生徒数が年々増加している。

全国学力学習状況調査等の各種学力調査では、島外（特に本土）からの転入生徒の基礎学力が高く、県平均を上回ることも多い。

道徳科の授業における話し合い活動においても、転入生徒の建設的な意見発表や話し合い活動をリードする場面が多く見られる。

(2) 道徳教育における校長方針

道徳教育の目標として、「人間としての生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」を掲げ、生徒の発達段階を考慮した適切な指導を行うこと。また、各学年の実態に合わせた重点目標においては、育てたい資質・能力【創造・挑戦・自立】に関連付けた学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てること。

(3) 指導の工夫

- ① 学校の実態に即して道徳教育の重点目標および重点内容項目を明確にし、それらに関わる指導の充実が図れるよう年間指導計画の工夫・改善を図る。
- ② 道徳教育推進教師を核に、管理職を含む全教師が指導力を発揮し、協力して展開できる指導体制（ローテーション授業等）を整える。
- ③ 学校行事や総合的な学習の時間と関連付け、道徳性を培う豊かな体験活動の充実を図る。

④ 各教科の指導を充実させる過程で、道徳教育と各教科等の目標内容および教材との関わりや学習活動（学び方）、学習態度（学びに向かう姿勢）に配慮する。

⑤ 日々の清掃活動を通して、勤労の貴さや意義を理解し、奉仕の精神をもって公共の福祉と社会の発展に寄与する態度を育てる。

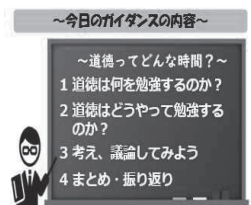
⑥ 日々の集団活動において規範意識・マナーを育成することで、学校や社会のルールを遵守し、いじめの防止や安全確保等の課題にも生徒が主体的に関わることができるよう配慮する。

⑦ 互いの考えを聴き合う活動、自分の考えを基に討論したり書いたりするなどの言語活動を積極的に取り入れる。

⑧ 生徒が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり、感動を覚えたりすることができるよう、生徒の心に響く教材の開発に努める。

(4) 道徳の授業実践

- ① 道徳教育推進教師による【道徳の授業ガイダンス～道徳の授業で大切なこと～】を全校生徒対象に 4 月中旬に実施した。「道徳ってどんな授業だろう？」や「道徳は何を勉強するのか？」等、個人での思考やグループ討議で学びを深めさせた。



- ② 各学年所属職員によるローテーション授業の実施と参観により教師相互の指導力向上に努めた。なお、管理職（校長：3 学年、教頭：1・2 学年）も所属学年での授業実践により指導力を向上させた。
- ③ 空手研究指定校としての取り組みとして、空手道に通じる有識者や地域伝統行事に係る地域人材を招聘した特設授業を行った。

(5) 成果（○）と課題（●）

- 道徳の授業ガイダンスを全校生徒・全職員参加で実施することにより、道徳授業の方向性を確認することができた。
- ローテーション授業の実施によって、教師個々の指導力向上を図ることができたこと。そして、指導者個々の特性に触れることによる授業マンネリ化の防止に繋がった。
- 研究指定校（空手道）との関連付けにより、地域

の良さや伝統文化継承について考えを深めることができた。

- 講師招聘による特設授業を行う場合の、講師との日程調整や年間指導計画との内容項目の調整。
- ICT機器の効果的活用について、研修・研鑽を積む必要がある。

2 宮古市立城東中学校の実践

(1) 学校経営における校長の方針（願い）

本校の学校教育目標は、『未来を自分らしく生きる生徒の育成』である。生徒が他者との関係性を大切にしつつ、今以上により良く生きようとする意思や能力を育むためには、自分らしさを自覚することや集団が自分らしさを受容してくれる安心感が必要である。

生徒が自分や友達の長所に気づき、お互いを認め合える支持的風土を育むことで、学びに向かう姿勢や意欲を高めたい。

(2) 自他を認め尊重し合う支持的風土を育む取り組み

① 道徳の授業の充実を図る取り組み

本校では、自他の良さを認め、自ら判断し、より良く生きようとする生徒の育成を目指して、「向上心、個性の伸長」「思いやり・感謝」「公正・公平・社会正義」「生命の尊重」を重点指導内容項目とし、各学年教師による道徳ローテーション授業により教師相互の指導力向上を図っている。

② 心と身体の安心・安全を図る取り組み

外部講師を活用し、講話や体験を通して命の大切さ、自分や他者を認め尊重することの大切さについて学習する取り組みを行った。

ア 性教育講話

講師：助産師・保健師・
誕生学アドバイザー

- 性について正しい理解を深め、相手の人格を尊重し、思いやりのある人間関係を育てる。

- 命のワーク（妊婦体験、抱っこ体験、産道体験、離乳食体験）を通して、自分の生まれてくる力を伝え、再認識することで自尊感情を育む。

- 中学生期の心身の発達特性を知り、性的関心や態度を学び、自分自身で適切な判断・行動力を身につけさせる。

イ パステルアートワークショップ

講師：メンタルカラーコンサルタント

- 生徒が自分自身どのような心状態にあるかを知り、どのようにストレスへ対応していくか考えるきっかけとする。

- 色彩心理学の観点から生徒の状態を把握し、生徒理解へつなげる。



ウ 人権講話

講師：レインボーハートOkinawa代表

- 講話を通してLGBT・性の多様性について理解を深め、自分らしく生きることの大切さに気づく。
- 友達と意見交換したり、考えを共有したりすることで、互いの個性や立場を尊重し、自らの考えを深め、高める。

(3) 人間関係形成力を育む体験的な学習の取り組み

横浜サイエンスフロンティア高校附属中学校（YSF）との交流学习（2学年）

毎年4月に学習旅行で宮古島を訪れるYSFの中学2年生との学年交流学习を行い、コミュニケーション能力と互いの良さを認め合う相互理解の態度を育てている。前年度の3学期に相互の生徒による実行委員会を立ち上げ、GoogleMeetを用いた遠隔会議により交流会の目的や実施方法の打ち合わせ確認を重ね、交流会当日の準備やプログラム進行も実行委員を中心に生徒が主体となって行った。

(4) 成果（○）と課題（●）

- 道徳の授業の充実を図る取り組みや外部講師を活用した心と身体の安心・安全を図る取り組みを通して、自他を認め尊重し合う支持的風土が育まれ、学習時における言語活動にも良い影響が現れている。

- 外部との交流を通じた体験学習により、生徒の主体性やコミュニケーション能力が高まった。また、環境の異なる先進的な地域の中学生との交流を通して自信を持ち、様々な活動に積極的に取り組む生徒が増えた。

- 今年度、生徒の変容を見取る手法として、一部の学年においてWebQUの活用を試みているが、年度末まで継続した取り組みとして検証していきたい。

- 体験的な活動と道徳の授業との連動について、まだまだ研究を深める必要がある。

3 おわりに

学校教育において、生徒一人一人に道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を身につけさせること、様々な学習活動を通して人間関係形成能力を育むことは、学習活動の充実や将来社会を形成する自立した人間としての資質能力を高めるためにも大切である。

様々な学習活動等との関連を図りながら、「特別の教科道徳」において、物事を多面的多角的に考え、議論していく授業を実施できるよう、校内での指導体制を整え、さらに道徳的価値について自覚を深める体験的な活動の充実を図ることが重要である。学校の経営者としての関わりについて今後も究明し、協議題に迫る取組を推進していきたいと考える。

第3分科会 『豊かな心』『健やかな身体』	共同研究者 ◇入高西 清幸（石垣市立名蔵中学校） ◇下 地 和 美（石垣市立崎枝中学校） ◇比 嘉 正 樹（石垣市立川平中学校） ◇山 城 篤（竹富町立船浮中学校）
研究主題 よりよく生きるための道徳性や健康・体力を育む教育の充実	

1 はじめに

少子・高齢化が進むとともに、めまぐるしく変化する現代社会において、教育現場も劇的に変わる状況が生じつつある。近年、国際化や情報化、価値観の多様化など日本社会では多方面にわたって、大きな変化がもたらされ、それに応じた学校現場の取り組みが求められている。

そのような中、価値観の多様化とともに、社会全体のモラルの低下が見られ、規範意識や道徳心の低下などが指摘されている。子どもたちがよりよく生きるためには、道徳性や生きる力の根底となる健康・体力は、生涯にわたって必要不可欠なものである。現在の学校では、よりよく生きるための道徳性をどのように養うか、相手を思いやる心を育むとともに、体力の向上や健康づくりに自ら意欲的に取り組む態度をどのように育てればよいのか等の課題がある。さまざまな課題に正面から向き合わせてその考えを深め、自らの生き方を育てていくようにさせたいという思いから各学校で課題解決に向けて取り組んできた。

2 主題設定の理由

急激に変化する社会にあって、青少年の規範意識や人間関係を形成する力が低下し、そのことが生命軽視の言動につながり、いじめなどの社会的な問題となっている。これからの社会においては、なおいつそう生徒一人一人に、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を身につけさせることが大切である。そのためには、「特別な教科 道徳」において、道徳的諸価値について多面的・多角的に捉えながら多様な考えの交流をとおして、その価値について深く考える授業を充実させることが重要である。また各教科・領域と関連づけて、道徳的諸価値について自覚を深める活動の充実を図ることが必要である。以上のことから本主題を設定し、校長としての関わりを具体的に示しながら研究を進めていく。

3 研究の視点

本研究では「特別な教科 道徳」を中心とした教育活動全体で道徳教育の実践をとおして「よりよく生きるた

めの道徳性」の育成を図る。共同研究校は小規模小中併置校であり、9年間を見据えた実践が可能である。また地域と協働しながら、体験活動や地域行事をとおした道徳教育を推進する。本研究の視点を以下の4つとした。

- (1) 「特別な教科 道徳」の授業の充実
校内研の充実
- (2) 小中併置の強みを活かした道徳教育
- (3) 各教科・領域との関連を活かした道徳教育
- (4) 近隣校との交流学习

4 研究の実際（※校長の関わりを具体的に示す）

石垣市立名蔵中学校の実践事例

- (1) 学校経営目標の指導の重点から指導計画との整合性を図りながら、振り返りと課題の改善に努める。
 - ①年間指導計画に基づく道徳の時間の充実
 - ア 4月に全生徒・職員で心を育てる道徳授業のオリエンテーションと授業の方向性を確認
 - イ 複数の教師による授業実践（多様な考え方）
 - ②教育活動全体をとおした、「心の教育」の推進
 - ア 地域資源を活用した開かれた道徳教育の推進（ふれいあ給食、地域行事、卒業生の講話など）
 - イ 家庭・地域と連携した道徳教育の推進（行事等でのマナーの在り方）
 - ③生命を尊重し平和を希求する心の育成
 - ア 平和月間を設定し、全職員の協働体制のもと、平和教育の指導の充実
 - イ 教師による自分事として講話の実践
 - ④自己肯定感を育む教育の推進
 - ア 自分のよさを実感（自己評価・自己受容）
 - イ 多様な関わりを通して自己に気付く
- (2) 近隣校との交流学习（多様な関わりと他者理解）
 - ① 中学生の交流学习
 - ② 小学生の交流ハリー一体験

石垣市立崎枝中学校の実践事例

- (1) 「特別な教科 道徳」の授業の充実
 - ① 少人数指導の工夫
 - ア 合同道徳授業の実施を通じた多様な考えの交流
 - イ 端末を用いた発表による表現力・発信力の育成

- ② ゲストティーチャーの導入
 - ア 職員によるキャリア講話や平和講話の実施
 - イ 地域人材等の活用による講話の実施
- ③ 校長による全体道德講話
 - ア 月一の校長講話におけるミニ道德講話の実施
- (2) 小中併置校の強みを活かした道德教育
 - ①小中合同で行う諸行事・活動の充実
 - ア 全児童生徒で行う朝の清掃活動
 - イ フラワータイムの実施
 - ②地域と連携した活動
 - ア 海岸清掃（ボランティア）
 - イ 地域行事への参加
 - ウ ふれあい感謝祭の実施
- (3) 各教科・領域との関連を活かした道德教育
 - ①各教科・総合的な学習の時間との関連
 - ア 稲作体験（地域内農園）
 - イ 教科横断を意識した授業や活動の実施
- (4) 近隣校との交流学习
 - ア 中学生の交流学习
 - イ 小学生の交流ハリー体験

石垣市立川平中学校の実践事例

- (1) 特色ある取組
 - ①小中連携した行事活動の取り組み
 - ア 「ライオン美らアクション」の年間の取り組み
 - イ 学校内外のクリーン活動ボランティア（毎朝の校内クリーン活動、地域道・観光地清掃など）
 - ウ 文化庁子供育成推進事業への取り組み
 - ②SDG'S 取り組みと広報活動
 - ア FM 石垣ラジオにて放送
 - イ 高校生を講師に CM 作成
 - ウ 川平小中 HP へ掲載（YouTube 配信）
 - エ ゴミ捨て禁止看板作成と地域への設置
 - オ 石垣市教育委員会へ学びの成果報告会
- (2) 校長の指導性
 - ①校内研及び互見授業を重視し、管理職による授業観察やフィードバック指導助言による授業改善など、教師の資質向上に向けた取り組みの再確認と実施
 - ②「石垣市勇気づけの教育」に基づいた計画的な取組と P D C A による取り組みと共通実践。
 - ③校長講話や外部講師活用による取り組み

竹富町立船浮中学校の実践事例

- (1) 「特別の教科 道德」の授業の充実
 - ①生徒一人一人の実態を共通確認した指導の充実

- ア 道德を教育活動全体の要とした全職員への周知
- イ 授業参観をしながら担任への指導助言
- ②複式学級（中 1・中 2）での実施。
 - ア 生徒や学級の実態に合わせた取り組み
 - イ ペアで意見交換や教師による問い返し等を実施
- (2) 小中併置校の強みを活かした道德教育
 - ①ボランティア活動
 - ア 朝の C G 活動（師弟同行）
 - イ 海浜清掃等で児童生徒が連携した体験活動
 - ②日々の道德活動の推進
 - ア 凡事徹底（当たり前の 10 カ条の実践）
 - イ 保護者、地域の方による読み聞かせ
- (3) 各教科・領域との関連を活かした道德教育
 - ①海洋教育の推進
 - ア 船浮地区周辺の生物の生態調査
 - イ 近隣校との交流学习における道德教育
 - ②キャリア教育の推進
 - ア 校長講話の実施
 - イ 地域人材の活用及び講話の実施

5 成果と課題

- 交流学习（学習活動や体験活動）を通して、他者理解や道德的実践力を身に付ける機会となった。
- 生徒に行事や活動に意図的に参画させることで主体性や自主性が育ちつつある。
- 小中全教師による互見授業後の振り返りの実施で共通確認と共通実践の統一した取り組みができた。
- 小中の校種間を超えた道德科の授業や、体験活動を行う事で、他者の考えを自分ごととして捉え、更に他者の意見を元に自分の考えについて深まりを持ちつつある。
- 少人数の課題を ICT 機器の利活用で改善
- 新しい環境や未体験の活動に消極的である。
- 研修計画の見直し等 P D C A 取組の更なる改善
- 近隣校との交流学习等が少ないため、主体的に考えることに苦手意識がある。

6 おわりに

各学校ともに小中併置校の特色を活かし、地域との繋がりを密接に行い創意工夫を施し 9 カ年を見据えた実践が行われている。今後は、限られた少人数の中で効果的な実践が行えるよう校長のリーダーシップの下、よりよく生きるための道德性や主体的に行動できる生徒の育成を目指した道德教育の充実に努めていきたい。

This image shows a single page of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and run across the width of the page. There are no margins, text, or other markings on the paper.

第65回沖縄県中学校長研究大会中頭大会

地区別提案資料

中学校 第4科会

「自らの生き方」

研究主題

豊かな学校生活を築き、自らの生き方を育む
キャリア教育の充実

- ◇神山 吉明（名護市立名護中学校）
- ◇永野 正也（名護市立久辺中学校）
- ◇玉城 史江（本部町立上本部学園）
- ◇具志堅仁一（伊是名村立伊是名中学校）

1 はじめに

近年、情報化、グローバル化、少子高齢化など、変化の予測が難しい時代が訪れており、今後さらに加速することが想像できる。

そこで、生徒自らの可能性を最大限に発揮し、社会的・職業的自立に向けて必要な資質・能力を身につけることが出来るよう、「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」によって構成される「基礎的・汎用的能力」を育成することは、キャリア教育の大きな役割である。

2 主題設定の理由

令和3年度から全面実施となった学習指導要領では、「児童生徒が学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身につけていくことができるように、特別活動を要しつつ各教科などの特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること」が示されている。

本研究では、各学校の実践をもとに、研究主題「豊かな学校生活を築き、自らの生き方を育むキャリア教育の充実」の視点から協議題に迫る具体的な方策を校長としての具体的な関わりを通して研究を深めていきたい。

3 研究の視点

- (1) 各学校の実践事例をもとに、キャリア教育の在り方や校長の指導性について研究する。
- (2) 生徒に「基礎的・汎用的能力」を育むキャリア教育について研究する。
- (3) 地域の特性・教育資源等を活用し、保護者・関係機関と連携したキャリア教育の在り

方について研究する。

4 研究の実際

【名護市立名護中学校の実践：生徒 664 名】

(1) 学校の特色ある取組

① てんだばる語れ一会

地域の方々が学校を訪れ、各学級において自身の職業のこと、地域のこと、これまでの人生の中で経験したことなどを生徒に分かりやすく語る場を毎月2回、月曜日の朝の時間に実施している。様々な方々の職業観や人生観を聞くことで、生徒個々が自らを見つめ、「なりたい自分」を見つけるきっかけになると同時に将来、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現できる生徒を育成することを目的に行っている。平成22年度からスタートし、現在約300名の地域の方々が関わっている。

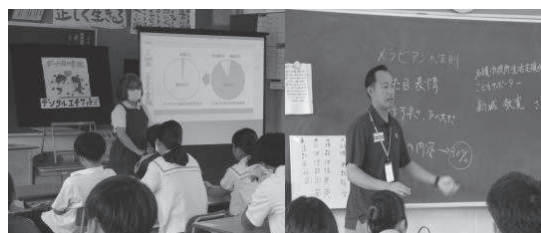


写真1 てんだばる語れ一会の様子

【名護市立久辺中学校の実践：生徒 84 名】

(1) 学校の特色ある取組

① 自治的活動の取組

本校では、「気づき・考え・行動、そして成長へ」をキーワードに、授業や生徒会活動等あらゆる場面で自治的活動に取り組んでいる。どの活動においてもリーダーを中心とした話し合いを持ち、決定・活動することで自分事として学校生活を創り出していく雰囲気づくりに取り組んでいる。（行動等の企画運営・校則の見直し等）

また、キャリア発達に向けて、自己の生活を管理・調整する力の育成を目指して「ドリカム Diary」（PDCA サイクル帳）に取り組んでいる。自らの生活を見直し改善することで成果に結びつきやすく、結果として自分に自信が持てるようになり自学自習力(自ら学ぶ力)が身につくと考え取り組んでいる。

【本部町立上本部学園の実践：生徒 106 名】

(1) 学校の特色ある取組

① 地域連携型「ふるさと学習」の実践

令和 7 年度に CS を導入にするにあたり、今年度は、地域が持つ資源を活用した教育活動に重点を置いている。総合的な学習の時間を見直し、地域に受け継がれている文化の学習を設定し、講師は全て地域人材を活用する。

1 年生は、むとうぶしまくうとうば編集委員会の協力を得て「本部の島くうとうば学習」を行った。また 2 年生は、九州への修学旅行との関連から「本部の沖縄戦」について学び、3 年生は具志堅区に伝わる「シヌグ」学習をそれぞれ 12 時間設定しその学びを通して地域の人々の生き方や生活に触れ、自己のキャリアに活かす。



写真2【シヌグ舞を習う中3】【備瀬区に伝わるサミの様子】

※「サミ」とは、方言版グーチョキパーのこと

【伊是名村立伊是名中学校の実践：生徒 47 名】

(1) 学校の特色ある取組

① 伊是名漁協ハーリーの取組

3 年生をリーダーとした全校生徒による縦割り班において様々な体験活動を行うことで、異学年の親交を深めると共に、自然と関わりながら自ら考え、行動できる力を養う場となった。生徒は豊漁と航海安全を祈願した地域の伝統行事である「伊是名漁協ハーリー」への参加を通して、地域文化に対する理解と郷土愛を学ぶことができた。



写真3 伊是名漁協ハーリーの様子

その他に 1 年生は漁協女性部の指導による「魚さばき体験学習」や全校生徒で地域の伝統療法を学ぶ「ワーダ漁」は安全確保と漁業指導を漁協・PTA・消防団が全面協力した「自然体験学習」として定着している。

4 校長としての関わり

- (1) キャリア教育の視点を踏まえて、育てたい生徒像を全教職員で共有し、取組の方向性を確認し、実践することができた。
- (2) 生徒達の「夢・希望」を地域と共に育む教育活動を実践することができた。
- (3) 各行事を通して「人と関わる」喜びを育み、地域資源や人材を活かした取組や「異年齢交流」を実践することができた。
- (4) 家庭、地域、行政との連携を図り、工夫して生徒の活動を支援することができた。

5 成果と課題

【成果】

- (1) 学校が地域や関係機関との連携や協働する意識を持つことにより、地域と学校の共通理解が図られ、地域の協力が得られた。
- (2) 校長の地域連携の意識が高まると、教職員にも浸透し、授業などの教育活動全体を通して地域人材を活用したキャリア教育の充実が図られた。
- (3) キャリア教育に関する取組や校長の指導性を学ぶことができた。
- (4) 学校規模や地域環境、文化の異なる 4 校の実践事例を確認し、共有することができた。

【課題】

- (1) 自己実現できる生徒の育成
- (2) 地域教育資源の活用
- (3) 地域と共に実践するキャリア教育

6 おわりに

令和 6 年度は国頭地区 4 校の取組を持ち寄り、分析をしてまとめる形で研究を進めた。名護市・本部町・伊是名村の各地域の特色ある取組の中で、学校と地域が連携・協働する「キャリア教育」の構築の在り方という視点で研究を共有できた。次年度は国頭地区全体におけるキャリア教育に関するアンケートを実施し、実態把握に努めるなどさらに研究を深めていきたい。

第4分科会「自らの生き方」

研究主題

自己理解を促し、将来にわたって人としての
生き方を深める生徒指導とキャリア教育の充実

＜共同研究者＞

比 嘉 利博（恩納村立うんな中学校）
宮 城 秀輝（読谷村立古堅中学校）
後 藤 直樹（読谷村立読谷中学校）
與志平 洋子（嘉手納町立嘉手納中学校）
上 原 靖（北谷町立北谷中学校）
玉 城 祥（北谷町立桑江中学校）

1 はじめに

キャリア教育は、生徒が自己の将来や社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力や態度を育てる教育です。学習指導要領では、キャリア教育の充実を図ることが明示されており、小学校から高等学校まで、生徒の発達段階を踏まえた計画的な進路指導が重視されています。

本分科会では、生徒の夢実現に向けた学校の取り組みを通して、キャリア教育について考えていきたいと思います。

2 主題設定の理由

令和2年に「沖縄県キャリア教育の基本方針」が作成され、同年4月には「キャリア・パスポート」が導入されました。本県では、キャリア教育における育成すべき能力「基礎的・汎用的能力」である4つの力を「かかわる力・ふり返る力・やりぬく力・みとおす力」とし、キャリア教育の目標や重点目標をより焦点化・具体化することで取り組みやすくした。

そこで、本研究では、協議②の社会的・職業的自立に向けて必要な基礎的・汎用的能力「か・ふ・や・み」を育成するためのキャリア教育の充実を図るべく研究を進めました。

3 研究の視点

- (1) 学年・学級の経営充実による「かかわる力」の実践的取組
- (2) 学校家庭地域の取り組み
「夢を持ち、じりつ、共生できる生徒の育成」

4 研究の実際

【北谷町立桑江中学校の実践】（生徒数 460名）

本校での、キャリア教育における基礎的・汎用的能力「か・ふ・や・み」における「か：かかわる力」の人間関係形成・社会形成能力育成についての実践的取り組みを紹介する。

(1) 具体的な取り組み

①「スマイルプログラム」の実践

構成的グループエンカウターの手法を活用し、学年・学級単位で実施（授業、総合、特活）。人間

関係づくりのスキルを身に付けさせ、生徒相互の望ましい関係性構築による「支持的風土のある学級・学年づくり」に繋げている。

②「クラス会議」の実践

「クラス会議」とは、自分たちの問題を自分たちの力で解決していくための話し合い活動で、日常生活において自ら協力して問題解決する力を促進し、自発的・自治的かつ自己教育力のある学級集団を育むことを目的としている。今年度から、週時程に位置づけ（週一回15分）全学級で取り組んでいる。



クラス会議の様子

③ハイパーQUを活用した学級経営の充実

年2回（5月・9月）実施し、学級における生徒個々の人間関係の様子や生徒理解に努めている。併せて、学級・学年全体の傾向を把握することにより、「学級満足度尺度結果まとめ」に見られる「集団の型」に応じた指導の改善に活用している。

④生徒会の自治的・自主的活動の推進

日々の教育活動全体を通して、「生徒指導の4つの視点」を生かした指導を行うことで、生徒の自治的・自発的活動の促進に努めている。



生徒会と校長との懇談会

(2) 成果と課題

① 成果

学校評価の生徒アンケートにおいて、「学校に行くのが楽しい」と肯定的に回答した生徒が、昨年同時期に比べて 10 ポイント増加した。「授業において、生徒同士で話し合ったり、教え合う雰囲気がある」との質問に対し、肯定的に回答した生徒が90%を超え、学級の支持的風土の改善に繋がっていると思われる。また、ハイパーQUの分析に基づく対応の工夫で、生徒理解や学級・学年経営の充実に生かされている。

② 課題

「スマイルプログラム」や「クラス会議」等の共通実践において、職員間の意識レベルに差があり、学級間の取り組み状況をそろえることが難しい。

(3) 校長の指導性と関わり

ア 教職員評価システムや校長発出毎月の「学校経営の重点」を通して、全職員に対し、学校経営方針の共有化を図り、教育目標の具現化に向けたベクトルを一つにした協働体制の構築に努めている。

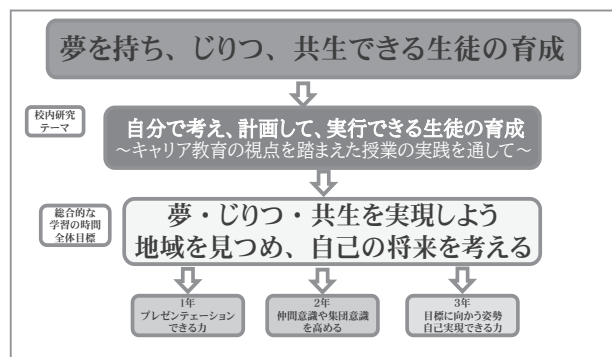
イ 生徒会との懇談会や部活のキャプテン会への参加、また、校長講話等を通して、生徒自己肯定感や有用感を高め、キャリア発達に繋げている。

【読谷村立古堅中学校の実践】（生徒数 606名）

本校は令和5年度より、学校総括目標「教育にぬふぁ星」（めざす人格像）が学校運営教委議会で制定し、生徒の教育活動のすべてにおいて、「夢を持ち、じりつ、共生できる生徒の育成」を学校家庭地域と一丸となって、取り組んでいます。

(1) 具体的な取り組み

① 令和6年度は下図のような、体制で校内研究と総合的な学習の時間のテーマを整理した。



学校目標から学級目標、個人目標とすべてが連動した目標を揃えることで、どのような教育活動の取り組みにおいても、総括目標にむけた活動となった。校内研究でもキャリア教育の視点を踏まえた授業実践とし、沖縄県の基本方針の中の「か・ふ・や・

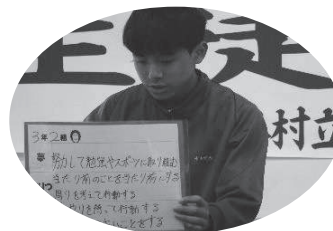
み」を全教室の黒板に掲示し、先生方はそのカードを授業のまとめ等で活用して、生徒達への基礎的・汎用的能力の意識付けを実施している。

か かかわる力	ふ ふり返る力	や やりぬく力	み みとおす力
人間関係形成・社会形成能力 ・多様な集団の中で他者とかわる力 ・進んで考えや気持ちを伝え合う力 ・人や地域を大切に思う気持ちや感謝する心 ・協力のする力 ・社会に参画し、社会を積極的に形成する力 など	自己理解・自己管理能力 ・行動を振り返り、改善につなげる力 ・自己の役割を理解する力 ・情報・助言を正しく理解し自分を見つめる力 ・自分の良いところを見つめる力 など	課題対応能力 ・問題を発見できる力 ・問いを立てる力 ・課題に対応した計画を立案する力 ・計画を実行する力 ・発想（想像）する力 ・間違いや他人との違いをおそれない力 ・最後までねばり強くやり通す力 など	キャリアプランニング能力 ・将来を想像する力 ・自分の目標を設定する力 ・目標設定のために計画を立てる力 ・立てた目標を確認し次につなげる力 ・自ら主体的に判断して、キャリアを形成していく力 など

② 生徒会活動（自治的活動）

生徒会における自治活動において、「共生」する社会を意識した生徒会実践に取り組んでいる。

生徒総会では、個々の目標が学級や学年の取り組みと連動させ、それらを達成できる具体的取り組みに



ついて、各学級・学年話し合い活動ができた。

③ 学習活動

各教科担当教師は、授業の中でも「か・ふ・や・み」をまとめ等に活用している。



(2) 成果と課題

① 成果（年度途中）

生徒も教師も常に「教育にぬふぁ星」を意識した教育活動に取り組んでいる。

② 課題

「夢やじりつ」は、個人内で取り組むことが多く達成している実感はあるが、「共生」部分がまだまだできていない場面もあり、他者との関係性を持たせる取り組みを推進していく必要がある。

6 おわりに

両校の特色ある取り組みについて学べたことは、各学校の学校経営を充実させる上で大変参考になった。課題に対する対応策等を考え、キャリア教育を充実させ、全生徒が「夢」を持てるよう邁進していきます。

第 4 分 科 会

研 究 主 題 「自らの生き方」

自己理解を促し、将来にわたって人としての生き方を深める生徒指導とキャリア教育の充実

共同研究者	金城 健一	(金城中学校)
	松田 孝	(小禄中学校)
	石田 陽一郎	(鏡原中学校)
	仲間 一史	(南大東中学校)
	幸地 巧	(北大東中学校)

1 はじめに

予測困難な社会を「生き抜く力の育成」、持続可能な社会の担い手となるための「社会に貢献できる人材の育成」は、これからの学校教育の目指すところである。さらに、これからの社会を担う人材は、社会的・職業的自立を図るための基礎的・汎用的能力を身に付けさせ、他者との連携や協働を行うことで自己実現を図ることができる資質・能力を育むことが求められる。

このような資質・能力を育むためには、生徒自らが望ましい人間関係を構築し、豊かで充実した学校生活を過ごすことが必要である。

以上のことを踏まえ、本ブロックでは、各学校の課題である人間関係づくりを高めるための「人間関係・社会形成能力（コミュニケーション能力）の育成」「不登校中生徒への取組」等に着目する。さらに、生徒一人一人が、
4 自己理解からよりよい人間関係を築き、協働や対話を深
3 める中で、自己肯定感や自己有用感をより実感し、自己
①指導能力を育成するような学校体制が必要である。

そこから自己の夢実現のために学校で多くのことを学び、「学校に行くことが楽しい」と感じる生徒の育成に繋がることを考える。

2 主題設定の理由点

いじめや問題行動、不登校、インターネット上のトラブルなど生徒を取り巻く問題が深刻化している。学校は、生徒の健全な成長を図るために、これらの問題解決に喫緊に取り組む必要がある。生徒指導は、集団や社会の一員としてよりよい生活や望ましい人間関係を築く基盤であり、人間としての望ましい生き方についての自覚を深め、自己指導能力を育成することがねらいである。様々な問題に対応するために、各学校での組織的、継続的な取組をさらに充実させることが重要である。

現在、変化の予測が難しい時代が訪れており、今後さらに加速することが想像できる。そこで、生徒が自らの可能性を最大限に発揮し、協働や対話をもとに社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を育み、自らの生き方を模索することは、キャリア教育の大きな役割である。

これらのことから、個々の生徒の個性の伸長を図りな

がら、社会的・職業的自立を図るための基礎的・汎用的能力を身に付けさせ、キャリア発達を促さなければならない。このような視点から、校長としての具体的な関わり方を論じ、協議題に迫る学校経営の展望を究明し共有する。

3 研究の視点

(1) 「人間関係・社会形成能力の育成」を図るための具体的な取組

(2) 校長の指導性と関わり

4 研究の実際

【北大東村立北大東中学校（生徒数 11 名）】

(1) 本校の取り組み

① 総合的な学習の時間で地域産業について調べ、調べたことを伝え合う。

② 職業講話 1 講師：サトウキビ農家、カボチャ・ジャガイモ農家

③ 職業講話 2 講師：飲食業経営者と調理員

④ 地域産業体験 1 サトウキビの植え付け準備と月桃の収穫体験を実施

⑤ 地域産業体験 2 サトウキビの植え付け、月桃工場での加工等の体験を実施

【南大東村立南大東中学校（生徒数 45 名）】

(1) 本校の取り組み（R5・R6 年度の実践から）

「非認知能力の育成（自己肯定感の高揚）」を目指す取り組みを通して、「通いたい」「通わせたい」「勤めたい」「応援したい」学校づくりを推進する

① 安心安全な学習環境の整備（そろえる・支える）

・学習規律 ・特支教育充実 ・幼小中連携充実

② 所属感の充足（関わる・動く）

・学級活動 ・児童会・生徒会活動 ・SDGs 研究推進

③ 承認場面の設定（認める・つなぐ）

・取り組みの成果共有 ・児童生徒相互の承認

・効果的情報発信

④ 自立した学習者の育成（見通す・やりきる）

・自学自習を取り入れた授業構築 ・夢実現フォーサイト

・「ガイラー」活用

⑤ 職員の職能育成

「学び続ける教師の育成」

- ・職員研修の質向上、学びの共有（フィードバック）

【那覇市立小禄中学校（生徒数733名）】

本校は「文武両道」をモットーにスポーツ・文化活動、勉学に精一杯取り組んでいる。また、本校の校訓「自律進取」「不撓不屈」は人間尊重の精神を基盤に激しく変化する社会に主体的に参加し困難を乗り越え自らの力で未来を切り拓くたくましい生徒の育成をめざしている。

(1) 「人間関係・社会形成能力の育成」

- ① 生徒主体の体育的行事「小禄フェス」の実施
生徒会、各団の団長を中心にリーダー研修会で生徒会種目や団アピールを企画し、生徒が中心となって準備を進め小禄フェスを実施した。
- ② 異学年の団活動を取り入れた絆づくりの推進
(クラスごとに4つの団に分ける)
日々のホームワーク提出率や朝読書、小禄フェスや合唱コンクール等の行事をポイントにし、1年間を通して団の総合ポイントを競う団活動を実施している。
- ③ 総合的な学習の時間の学習内容・学習活動の充実
毎週水曜日（1校時）に総合部会を実施し、各学年の総合的な学習の時間の取組状況等の情報交換を行い総合的な学習の時間の充実に取り組んでいる。
- ④ 校内適応指導教室「ポプラ教室」の取り組み
心理的要因と集団不適応や情緒不安等を持つ生徒を校内適応指導教室「ポプラ教室」で受け入れ教育相談、学習支援、体験活動等を実施し「心の安定」や「心のエネルギーの回復」に努めている。
- ⑤ アドバイザー（地域人材）の活用
アドバイザーを活用して、総合的な学習の時間の改革（探究的な学習の充実）、生徒主体の学校行事、異学年集団の絆づくりを目指す生徒会活動等の充実に取り組んでいる。

【那覇市立鏡原中学校（生徒数649名）】

(1) 本校の取り組み

- ① 鏡原中授業スタイル（有効な積極的生徒指導）
- ② サポートルームの充実（心因と非行の2クラス）
- ③ 自己管理ノート使用の推進
- ④ 生徒会活動の充実

【那覇市立金城中学校（生徒数540名）】

(1) 本校の取り組み

本校は、那覇市の都市計画と学園都市構想のもとに設立された学校で、広大な敷地が確保されている。

「心身ともに健康な生徒」「自らよく考えて実践する生徒」「情操豊かで思いやりのある生徒」の3つを学校

教育目標に掲げ、創立以来38年間にわたり文武両道と友愛の精神を貫いて来た。

① キャリアアップノートの活用

今年度も昨年度同様、キャリアアップノートを活用し、見通しを持った学習計画を立てさせ実践を語る。また、生徒会学芸委員会委員による提出調査や提出率による効果等を行い、その意義の共通理解と、取組方法の確認と共通実践に努めている。

② 「自分事」として捉える授業づくり

特別活動の授業の中で、段階的な思考を毎回促し、対話を通して互いの意見を交流させながら、多面的・多角的に考えることを大切にし、深い学びとなる授業を目指す。（校内研テーマと連動）

③ 「いじめなくそう友の会」

生徒会生活委員会の取り組みで、校内からいじめを無くすため、会員証を作成配布やポスターの掲示を行いいじめ取り組みの啓蒙活動が続けている。

④ 「自分たちで考える校則」

校則の見直しが話題となる中、生徒会が中心となってアンケートや学級討論・中央委員会で話し合い、生徒の要望書として取りまとめ生徒会から校長へ提出、試行期間を経て正式に改訂を行う。

⑤ 「校内クイズ大会」の実施

生徒会執行部を中心に、放課後の約15分間、各学級をミートで本部とつなぎ、問題を配信し学級全体で答えを出し入力する。クイズ大会を通して、多くの生徒に活躍の場を与え、学級の仲が深まることを図っている。

5 校長の指導性と関わり

- (1) 今後も、授業だけでなく、生徒集会の校長講話等の中で基礎的・汎用的能力の育成に繋がる講話内容に取り組んでいく。
- (2) 学校評価や諸調査による成果と課題の把握。
- (3) 現状分析と今後の対応についてビジョンの提示。
- (4) 学校教育全般において「チーム小禄中」として協働体制づくりと職員間の同僚性を育み、より良い教育活動を推進する。
- (5) 生徒指導の4つのポイントを活かした集団や個への取り組みを推進する。
- (6) 教師主導を見直し生徒の課題発見力や調整力等の育成、達成感や自己肯定感高め、支持的風土づくりを意識した日常化を推進する。
- (7) 生徒や職員、保護者、その他幅広く意見や考えを取り入れつつ、地域や島外の人材活用を積極的に推進し魅力ある学校づくりに努める。

第4分科会【島尻地区】「自らの生き方」

研究主題

自己理解を促し、将来にわたって人として生き方を深める生徒指導とキャリア教育の充実

～「基礎的・汎用的能力」を育成するキャリア教育の充実～

共同研究者

◇比嘉 智也（南風原中学校）

◇仲座 正（渡名喜中学校）

◇足立 克枝（大里中学校）

◇仲程 俊浩（三和中学校）

1 はじめに

キャリア教育は、子どもたちがキャリアを形成していくために必要な能力や態度の育成を目標とする教育的働きかけである。キャリア形成で重要なのは、自らの力で生き方を選択できるよう必要な能力や態度を身に付けることにある。自分が自分として生きるために学び続けたい、働き続けたいと願い、それを実現させていく姿がキャリア教育の目指す子どもの姿といえる。

2 主題設定の理由

本分科会は協議題を『社会的・職業的自立に向けて必要な「基礎的・汎用的能力」を育成するためのキャリア教育の充実』とした。「基礎的・汎用的能力」とは『人間関係形成・社会形成能力』『自己理解・自己管理能力』『課題対応能力』『キャリアプランニング能力』であり、相互に関連・依存関係にあることから満遍なく身に付ける必要がある。また義務教育が終了する中学校では「生き方や進路に関する現実的模索」も重要な目標になり、キャリア教育を全校的に推進していく必要がある。そこで本研究では協議題に沿って各学校の実践事例をまとめるとともに校長の関わりについても考察し、共有することとした。

3 研究の視点

以下の視点で共同研究者の各学校における取り組み等を紹介し、今後の指導の参考に資する。

（1）社会的・職業的自立に向けた取り組み。

（2）「基礎的・汎用的能力」を育成するためのキャリア教育の充実。

4 研究の実践

（1）南風原町立南風原中学校の実践

本校では、～未来の『幸せ』へつながる教育～をテーマに置き、それに迫るために、めざす学校像・生徒像・教師像を設定し、教育活動を展開している。生徒一人ひとりがそれぞれの『幸せ』を感じるためには、生徒自身が自分は今何をすべきかを常に意識し活動することが重要であると考えている。

①学校教育目標と重点取組の確認

校長の理念は「学力の保障」「社会性の醸成」であることを確認した。本年度は「子ども一人ひとりに自己肯定感をもたせる」を重点取組にすることを共有し、教育活動を実践している。

②自立するために必要な基盤の力の意識づけ

どの職業や分野においても自立するために必要な基盤の力として「コミュニケーション能力」「熱意・意欲」「行動力・実行力」が挙げられる。その力を身に付けさせるため、生徒向けに話をする場面では「自分を表現できる」「他人を尊重できる」「周りとの対話ができる」をキーワードに盛り込み、生徒へ意識させている。

③学級や生徒会活動における支持的風土の醸成

学校は生徒一人ひとりに、人間関係形成・社会形成能力を身に付けて欲しいと考えている。そのため、学級や生徒会活動において、互いを認め、安心して学校生活できる居心地のいい居場所や支持的風土作りを全職員で行っている。

④自己理解・自己管理能力の育成

社会的自己実現を目指すには、生徒一人ひとりが自ら考え、選択し決定する体験を多く設定することが必要である。そのために、生徒一人ひとりへは自分のペースをみつけさせ、生徒個々にあった支援を行うことを確認した。

⑤校長の関わりとして意識していること

- 理念や方針等の「経営の軸」をもつこと。
- 生徒が自己決定できる場面をつくること。
- 職員へ常にアップデートを求めること。

（2）渡名喜村立渡名喜中学校の実践

本校は離島小規模校であり、中学校卒業後、ほとんどの生徒が高校進学のため、親元を離れる「15の島立ち」を迎える。そのため生徒には中学校卒業までに基本的生活習慣を確立することや人として自分らしく生きるために「基礎的・汎用的能力」を育成することが重要である。これらを踏まえ、本校では「目標を達成するために継続して努力する態度」や「自分で考え、計画して、行動に移すことのできる生徒」の育成に力を入れている。

①目標達成のために努力する態度の育成

学校の教育活動において、生徒一人ひとりに授業を通して、「学び方」を育成することが重要であると考えている。そのために、生徒一人ひとりに丁寧に寄り添い、自分のペースで継続して努力できるような支援を行っている。

②自分で考え、計画し行動できる生徒の育成

教育活動の中でキャリアパスポートガイダンスを設定し、何のために作成するのか、身につけて欲しい力は何なのかを確認し、生徒一人ひとりが社会で自分の力で歩んでいける力を伸ばし、自ら成長していくことを意識させている。まずは、キャリアパスポートを毎日見ることや各学期末に自分で考えた目標を振り返らせる活動などを行わせ、キャリアパスポートの効果的活用を図っている。また、自分で計画し学んでいく活動を通して、自分の育ちを実感させながら、自学自習力を育む取組を推進している。

③校長の関わり

これらの取組が組織的、計画的に進められ、より大きな成果となるようキャリア担当、学推担当、研究主任等と連絡調整に努め、学校教育全体を通して、生徒の「基礎的・汎用的能力」の育成に向け、取組むよう助言を行っている。

（3）南城市立大里中学校の実践

本校は「自主勇往」（自分で「やる」と決めたことを粘り強くひるまずに頑張る続ける）を校訓としている。また、めざす生徒像の一つに「自己実現できる生徒」を掲げ、生徒会は「夢をつかむ（Chance, Challenge, Change）」をテーマに活動している。

①多様な体験活動の実践

本校には30年近く続く「ふるさと伝統芸能祭り」があり、地域と連携して取り組んでいる。地域の大人や異学年の生徒と関わることで、「多様な人々と協働する力」を育てている。

②電子版「フォーサイト手帳」の活用

朝、生徒は登校したらPC端末を立ち上げ、各自で「フォーサイト手帳」に1日の予定や目標を入力し、下校前は1日の振り返りや翌日の予定などを入力している。この活動を通して「ふりかえる力」「やりぬく力」「見通す力」の育成を図っている。

③校長の関わり

校長の「Mission」「Vision」「Passion」を職員や生徒と共有し、目指す方向を確認している。また、校長発行の学校だより「保護者用」と「職員用」を通して学校が目指す教育について共通理解を図り、生徒には校長講話を通してSociety5.0及びVUCAな時代を生きるために必要な力について考える機会を作った。

（4）糸満市立三和中学校の実践

本校ではキャリア教育目標を「将来に対する夢や希望を持ち、努力する態度を育てる」と設定している。また各学年の重点目標として、1学年「自己を知る」、2学年「働く意義を知る」、3学年「進路を切り拓く」と掲げ、各教科や道徳、特別活動、清掃活動や生徒会活動等を実践基盤として推進している。

①「My Schedule 帳」の活用

～自分だけの「ゴール」を持つ～

人生の中で大切な中学3年間の中で、自分自身と向き合い、自分だけの目標をつくり、計画を立て、実行する習慣を身に付けることは重要なことである。本校で活用している「My Schedule 帳」は、夢（目標）の実現のために自分の予定を決め、実行・行動したり振り返って修正したりする「自己調整能力」「自己管理能力」の育成につながっている。また、生徒の自学自習を促すことでキャリア能力育成に、そして目標を立て、振り返りまでセットで行うことで毎日の意識改革につながっている。

②「字生徒会」活動の取り組み

～「地域は皆の学校」を目指す取組の推進～

本校では生徒会活動の取組みの一環として「字生徒会」を組織し、生徒たちが「地域でできること」を考え、各字での自主活動を計画している。今年度は、夏休みに各字の生徒が自分たちで時間を決め、地域の皆さんへの挨拶運動や地域のごみ拾い、掃き掃除等の清掃活動を計画している。地域での役割を果たすことで、責任感や連帯感の育成につながっている。

③校長の関わり

- ア キャリア教育の視点に基づいた校長講話。
- イ キャリア教育を学校経営の柱として設定。
- ウ 生徒への声掛けと激励。

5 成果と課題

（1）成果

地域人材の活用や外部機関との関わり、教職員との協働、家庭や地域との連携等、各学校での特色ある取り組みを行う際の校長としての関わりについて共有することができた。

（2）課題

本分科会の研究視点でもある「基礎的・汎用的能力」の育成と各学校におけるキャリア教育の実践・取り組みとの関連を明確に示し、「4つの能力」を満遍なく生徒に身に付けることができるよう校長として関わっていく必要がある。

6 おわりに

時代の変化と共にキャリア教育に必要とされるものは変わっていく。それに伴い、校長として今後の学校におけるキャリア教育の課題や方向性を示していくことは必須である。校長のリーダーシップの下、全職員でキャリア教育の課題等を理解・整理し、時代に合った教育内容を充実・実践していくことが重要である。生徒が将来明確な職業観と勤労観を持って社会に出られるようキャリア教育の土壌を整えていきたい。

研究主題

自己理解を促し、将来にわたって人としての生き方を深める
生徒指導とキャリア教育の充実

大 原 中：大 嶺 千 秋
船 浦 中：宮 良 健
波 照 間 中：阿 利 正 則

1 はじめに

現代は、テクノロジーの進化によって、あらゆるものを取り巻く環境が複雑さを増し、将来の予測が困難な状況にあることから、「VUCA（ブーカ）時代」（先行きが不透明で、将来の予測が困難な状態）と呼ばれている。

社会や生活環境が変化し、将来への不透明感が増し、価値観が多様化している昨今においては、生徒が自己の生き方に向き合い、自己実現を達成するために、社会や集団の変化に対応しながら主体的に自己の判断、責任において自らの行動を決定していく自己指導能力の育成と社会的・職業的自立に必要な基礎的・汎用的能力の育成が重要である。

生徒の自己指導能力と基礎的・汎用的能力は、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、その他の教育活動を通じて育成していかなければならない。特に学級集団を指導する学級活動は育成の重要な場の一つとなり、教職員の資質・能力の向上にも繋がると考える。

そこで、本研究では研究主題に沿って各学校の実践事例をまとめ、共有したい。

2 研究の視点

- (1) 自他を敬愛し、他者と関わりながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実
- (2) 社会的・職業的自立に必要な基礎的・汎用的能力を育成するキャリア教育の充実

3 研究の実際

【竹富町立大原中学校の実践】

(1) 具体的取組

① 自己指導能力の育成

ア じぶんログ（生活ノート）を活用した自己管理能力と自己調整力の育成

イ 朝学習・家庭学習による自学自習力の育成

ウ 生徒主体の話し合い活動による合意形成や自己決定による学級生活の向上

② キャリア学習

ア 1年生を対象とした3日間の職場体験

イ 県内で活躍する地域人材を活用した進路講話

ウ 3年生を対象とした、進路選択や勉強方法などを先輩から学ぶ座談会

③ 郷土に誇りを持ち、持続可能な社会生活のための海洋教育の推進

ア 基幹産業であるサトウキビ生産による勤労生産活動を融合したキャリア学習

イ 三大体験（西表横断・古見岳登山・仲間川筏下り）・ダイビング体験・SUP 体験による、豊かな自然の保持と環境保全に向けた課題解決学習

④ 生徒会活動

ア 定例の委員会サミットによる自主的活動

イ 各種専門委員会の主体的活動

ウ 各種行事での実行委員会を中心とした活動

エ ボランティア清掃やビーチクリーンを通じた地域社会との連携や環境保全活動

(2) 校長の指導性と関わり

① 学校経営ビジョンの共有とマネジメントサイクルによる改善

② 「15の島立ち」を見据えた校長講話等によるキャリア形成

③ キャリア教育の基礎的・汎用的能力を意識したキャリア発達の促進への支援

(3) 成果と課題（○成果 ●課題）

○めざす生徒像及び「15の島立ち」に向けた教職員間の認識の共有と連携ができた。

●自主性は育っているが主体性が弱い。社会的・職業的に自立するために必要な能力の育成に向けた支援の在り方に課題が残る。

【竹富町立船浦中学校の実践】

(1) 具体的取組

① 「生徒指導」と「キャリア教育」の充実に向けた共通実践

ア 「自ら考え、判断し、言動できる人」の育成

イ 生徒・保護者と対話を通じた学習環境の構築

② 各教育活動における4つの行動指針の具現化

ア みとめ合います（自己存在感の感受）

・ふり返る力（自己理解・自己管理能力）

- ・価値を発見し合い、伝え合うこと
- イ みんなとします（共感的な人間関係の育成）
 - ・かかわる力（人間関係形成・社会形成能力）
 - ・非認知能力→他者とつながる力（協調性）
- ウ 自分がします（自己決定の場の提供）
 - ・やりぬく力（課題解決能力）
 - ・非認知能力→自分を高める力（意欲・向上心）
- エ 互いを尊重します（安心・安全な風土の醸成）
 - ・みとおす力（キャリアプランニング能力）
 - ・非認知能力→自分と向き合う力（自制心）

③ 共通理解・共通実践における「キーワード」

- ア ウェルビーイング（幸福）
- イ エージェンシー（主体性・当事者意識）
- ウ アップデート（更新・成長）

④ 「自己指導能力」と「基礎的・汎用的能力」を育むための日課表の工夫（午前5時間制の導入）

- ア 個別・協働学習の充実
- イ 生活リズムの確立
- ウ 放課後の自由時間の拡大
- エ 教材研究等の充実

(2) 校長の指導性と関わり

- ① 職員ミーティングにおける学校経営ビジョンの共有
- ② 校長講話による言動の価値付け
→島立ちに関する情報（言葉の力・人間関係等）
- ③ 学校だより・学校HPによる情報発信
→授業の様子・学校行事等の様子等

(3) 成果と課題（○成果 ●課題）

- 日課表（学びの午前・自律の午後）の充実
- キャリア形成における意識の高まり
- 困り感のある生徒に対する支援の在り方

【竹富町立波照間中学校の実践】

(1) 具体的取組

- ① 職場体験学習
毎年中学2年生は島外（石垣市内）において、2日間の職場体験学習を実施
- ② 進路講演会
ア 職業人による進路講演
地域人材を活用して進路講演会を行い、島内で働く方々や地元の関係者の講演を聞く
イ 「先輩の姿に学ぶ会」
高校へ進学した「先輩の姿に学ぶ会」を行い、卒業生の進路選択から決定までの様子や勉強方法など身近な先輩の体験等を聞く…8月下旬頃

③ 黒糖づくり体験（3年に1回）

地元の基幹産業であるサトウキビから精製される黒糖（含密糖）づくりの作業工程を製糖工場で見学し、実際に昔ながらの黒糖づくりを体験

④ 海洋教育の推進

- ア 浜下り（はまうり）…旧暦3月3日頃に実施
4月新学期当初に、浜下りを行い、身近な自然の海の生き物、海の恵み（魚介類等）を知り、島の伝統的な行事を体験
- イ 水泳教室…プールがないため、海洋での実施
島内外のライフセーバーの指導の下、泳力指導・海での安全な過ごし方・水難事故の救助法、海洋レジャーを体験
- ウ ビーチクリーン活動
自然豊かで綺麗な地元の海浜を守る取組

(2) 校長の指導性と関わり

- ① 校長のカリキュラムマネジメントによる学校経営との連動
- ② PDCAシート活用によるマネジメントサイクルによる改善
- ③ 全職員による共通実践と学校評価による成果や課題の共有等

(3) 成果と課題（○成果 ●課題）

- キャリア教育「4つの能力」を意識した教育活動の実践を通して、「15の春」に向けた、自立心・自律心を育み、自ら主体的に判断し適切な進路選択の意識の高揚に繋がっている。
- 離島へき地であるがゆえに職場体験を行う職場が少なく、島外（石垣市内）での実施では宿泊の負担や船便の欠航等で計画が中止になることもある。

4 おわりに

今後、情報化、国際化など、急速に変化し続ける社会において、これから求められる力は、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら、新たな価値を創造する力と言われている。

竹富町の離島へき地の各学校においては、学校の教育目標や学校規模、地域のニーズや特色等に応じて多種多様な教育活動が行われており、各校ともへき地・小規模校の特性を強みにして学校経営を行ってきた。これからもその強みを生かしながら、社会の変化に対応し、主体的に生きることが出来る自己指導能力の育成と、社会的自立・職業的自立に向けて必要な資質・能力の育成を、教育活動全体を通して、生徒指導とキャリア教育の充実を図ることが重要である。

今後も生徒の15の島立ちに向け、教職員の資質・能力の向上と組織体制の更なる充実を図りたい。

[illegible]

第65回沖縄県中学校長研究大会中頭大会

地区別提案資料

中学校 第5科会
「人材育成」

第 5 分科会【国頭地区】

『人 材 育 成』

研究主題

多様化した教育課題に対応できる学校経営
と教員の育成
～教職員の専門性と指導力を発揮する研修
や学校運営の在り方～

具志堅 勝司 (国頭村立国頭中学校)
池原 健 (伊平屋村立野甫中学校)
伊波 勉 (本部町立伊豆味中学校)
佐藤 繁 (名護市立大宮中学校)

1 はじめに

全ての教員は、児童生徒の人格の完成を目指し、その資質の向上を促すという非常に重要な職責を担う高度な専門職である。次世代を担う子供たちの育成において、学校教育の果たすべき役割は大きなものがある。その中で従来から指摘されている課題に加え、貧困・虐待・ヤングケアラーなどの課題を抱えた児童生徒への対応、特別な配慮や支援を必要とする児童生徒への対応等、「令和の日本型学校教育」に必要な資質能力の育成、そのための個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実と主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善、一人一台端末を活用した情報・教育データの利活用と、教員の資質能力の向上を図り続けることが求められている。

これらの状況を踏まえ、学校規模や地域環境の異なる本地区 4 校において、多様化した教育課題に対応できる学校経営と、教員の育成について実践事例をまとめ、成果と課題を明らかにする。

2 主題設定の理由

グローバル化や情報化の進展等、社会が急速に変化する中で、学校教育における新たな課題への対応も求められている。教育の直接の担い手である教員の資質能力の向上、多様化した教育課題に対応できる学校経営と教員の育成に校長は、どう関わり、どうリーダーシップを発揮していくのか、各校の実践を通して明らかにしていきたい。

3 研究の視点

- (1)各学校の特色ある取り組み
- (2)多様化した教育課題に対応できる学校経営と教員の育成への、校長の関わり・指導性

4 研究の実際

【国頭村立国頭中学校（生徒数 118 名）】

本校は、沖縄本島最北端の中学校で村唯一の中学校である。村全体で「学びの共同体」ヴィジョンと哲学による学校改革を推進しており、全ての子どもの「学び」の保障を目指している。保護者、地域の方々には卒業生も多く、学校への関心も高い。

(1)特色ある取り組み

- ①全教師が校内研修において授業研究を行うことで、

教科の壁を越え多くの意見が出され、教師の資質向上に有効である。（外部講師は年 3 回程度）

- ②学校評価を有効的に活用し、各学級・各学年で情報共有を図り課題の把握・改善策等を話し合い、次学期に活かしている

- ③村より毎週 ICT 支援員の派遣があること、並びに週 3 日以上 SSW の訪問があり、授業改善や生徒理解・不登校対応等に役立っており、教師力の向上も図られている。

- ④校長室の間口をオープンにし、いつでも相談できる雰囲気確立している。

(2)校長の関わり・指導性

- ①全教師が授業改善に関わる校内研を通して指導助言を行い、県の主要施策や村の学力向上についても適宜触れ指導力向上を図っている。

- ②週案や月ごとの学校経営等でそれぞれの校務や重点指導事項等確認し、取り組み強化を図っている。（グループウェア等の活用）

- ③校長室の間口を広くし、教職員が出入りしやすくなり、小さなことでも気軽に相談できる雰囲気を作り、困り感の解消を図っている。

- ④村派遣の SSW と連携を密にし、家庭環境の把握、相談等を行い、改善策等協議し、担任の負担感の軽減に努めている。

【伊平屋村野甫中学校（生徒数 1 名）】

本校は、伊平屋島と橋で繋がった野甫島にある少人数へき地校で、中学 2 年生の女子 1 名の在籍である。授業を受け持つ教諭は本務 1 名に臨任 2 名の計 3 名で、皆若く経験が浅い。また、昨年度から小学校が休校となっていて、教頭が未配置である。

(1)特色ある取組

- ①生徒が 1 名での授業のため、過度な板書は避けるようにし、大型電子黒板の活用を行っている。また、生徒目線で寄り添い本校の石碑にもある「師弟同行」で共に汗を流し共に行う授業展開を勧めている。

- ②島外で宿泊を伴う交流学習を、北部地域の学校と 2 回予定している。職員も授業参観で指導法を学ぶ機会となっている。

- ③離島へ赴任し、区民として地域と付き合う場面を大切にし、島での勤務が今後の教員生活の糧となるよう関わらせている。

(2)職員の資質・能力の向上を図る学校経営

①一人1回授業や日々の授業観察を通して、授業力の向上を図る。一人1回授業では、指導主事等を招聘して、授業改善に努めている。また、学校経営方針で、「道徳科を中心とした心の教育の充実を図る」とし、週1回の授業を交代で行い、互見授業を通して資質・能力の向上に努めている。

②研修会への積極的な参加を促し資質・能力の向上を図る。出張は、1泊2日となるため、オンラインでの参加の可否を問い合わせ、できない場合は時間割の調整で研修機会を確保している。

(3)校長の関わり・指導性

本校は、教頭未配置で教務主任も若いため、職員と校長が密に連携する必要がある。校長室と職員室間のドアは開放し、往来しやすいようにしている。毎週の職員集会は、校長だよりで情報共有を図っている。ミライムでの情報共有で会議を削減し、免許外の教材研究や複数の校務分掌の業務時間を確保している。

【本部町立伊豆味中学校（児童生徒数 40 名）】

本校は伊豆味区の一字を校区に擁する、一区一校の小中併置校（併設幼稚園在り）である。保護者・地域の学校教育に対する関心は高く、期待も大きい。児童生徒数は減少傾向だが、「湧き出でよ人材」の校訓のもと、児童生徒の素直で勤勉な態度は校風として息づいている。

(1)特色ある取り組み

①小学校の複式解消の為、中学校職員が可能な限り授業応援を行う体制を取っている。小中職員のコミュニケーションが活発に行われ、複式解消だけでなく、小中の学びの連続性の理解や、児童生徒理解の深化等、教員の資質向上に寄与する効果が副産物として生まれている。

②地域との良好な関係性を土台に、学校に積極的に関わる地域人材が豊富である。総合的な学習を始め、諸学校課題の解決にも建設的で、力強い協力体制が存在する。

③本部町魅力化スタッフの関わりで、伊豆味区外の教育資源にもアクセスできる環境が整備されている。

(2)校長の関わり・指導性

①小学校、中学校の文化や職員の持つ既存概念の違いを認め合う風土を醸成し、それを逆に、前例踏襲を見直し、変化・改善に繋がるよう努めている。

②小学校の課題、中学校の課題を学校全体で共有し「(幼)小中で一つの学校である」ことを強調・意識させ、建設的で積極的な経営参画ができるよう、校長のリーダーシップを発揮している。

③ICT 活用能力、学習評価への理解等、全体的に能力に課題を感じられる事柄について、積極的に外部

人材を活用するなどスキルアップの研修を企画している。

【名護市立大宮中学校(生徒数 417 名)】

本校は、本島北部にある名護市に位置し、商業施設が並ぶ 58 号線沿いにあり、開校 35 年を迎える。生徒会活動が活発であり、教師の手をできるだけ少なくし、生徒が主体となって様々な活動が行われている。

(1)特色ある取組

①主任クラスの教師が O J T を発揮し、生徒対応・学級経営・授業経営など、あらゆる場面でアドバイスし、時には一緒に生徒の中に入るなど、若手教師に寄り添った支援を行っている。

②職員はきょうどう（協働・協同・共同）を意識している。学校課題に対して、職員全体で話し合いの場を持ち、お互いの困り感を共有しながら、学年の枠を超え、職員全体で課題にあたっている。

③運営委員会では、教育課程や生徒の対応について、前年度踏襲の考えにとらわれず、教育の原点に立った話し合いが行われている。それにより全職員が教育課程の目的を理解・連携し、それぞれの役割を主体的に捉え、学校経営に参画している。

(2)校長の関わり・指導性

①毎月の学校経営では必ず「職員のきょうどう」を入れ、生徒をたくさんの教師で見ることの大切さや困り感のある職員を一人にさせないことなどを伝えている。

②教職員評価システムを活用し、目標設定から校務分掌や授業に関わることを具体化しながら、それぞれの力が発揮できるよう手立てを明確にさせる。

③教職員が「自立した学習者の育成を図る（校内研）」願いをもって、提案したものに対して、可否の判断の前に、まず受容的態度で接し、どうしたら実現可能なかを支援するよう努めている。

5 成果・課題**(1)成果**

①実態が異なる 4 校であるが、「風通しの良い職場環境づくり」が共通する実践として明確になった。

②職員間の結束力が高まることにより、O J T や同僚の間でアドバイスや情報共有が活発になり、職員同士が切磋琢磨し合うことができた。

(2)課題

①共通の課題として職員が教科指導や諸経営について話し合う、ゆとりある時間の確保が必要である。

6 おわりに

学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、子供一人一人の学びを最大限に引き出し、子供の主体的な学びを支援する伴走者としての役割を果たす教員の育成について、今後も研究を継続していく。

第 5 分 科 会

研 究 主 題

多様化した教育課題に対応できる学校経営と教員の育成
～学校経営に積極的に参画する教職員や人事評価
在り方～

【共同研究者】

1. 照屋 武（伊波中学校）
2. 新垣 和哉（あげな中学校）
3. 金城かなえ（石川中学校）
4. 伊波 努（具志川中学校）
5. 仲村 正樹（具志川東中学校）

1 はじめに

人工知能 AI の出現による情報通信技術の進歩や社会のグローバル化などに伴い、社会は、急速に変化している。急速な変化に対応するために各学校においては教職員の資質・能力の育成を図り、専門性・指導力を高めて複雑化・多様化する教育課題に対応できる人材育成が不可欠である。

本研究では、「人材育成」に焦点をあて、学校経営に積極的に参画する教職員や人事評価の在り方について、各学校の実践を通して考えていきたい。

2 主題設定の理由

- (1) 教職員の年齢構成や経験年数に偏りがあり、学校組織としての教育力向上が喫緊の課題である。そこで、学校組織として教育力の向上を図るため、指導期教員を活用したミドルリーダーや若手教員の育成を図る。
- (2) 校長として教職員の専門性を高め、実践的な指導力を発揮する教職員育成のための研修や学校運営の在り方について、各学校の取組を共有し、実践的な研究を行う。

3 研究の視点

- (1) 教職員評価の適切な実施
- (2) ミドルリーダーの育成
- (3) 若手教員の育成

4 研究の実際（※校長の関わりを具体的に示す）

- (1) 伊波中学校（生徒数 345 名）

①教職員評価の適切な実施

学校教育目標を実現するために全職員が学校グランドデザインや学力向上スクールプランに基づいて目標や達成するための手立てを設定した育成評価記録書を作成することである。

ア グランドデザインとスクールプランの共有

校長が作成したグランドデザインを三者会や企画委員会、職員会議で共通理解する。

イ 当初面談で個々の目標や手立てを確認

事前に個々の教師の授業観察を行い、良さや特徴を捉える。目標設定や目標達成のための手

立てのなどについて具体的に助言を与える。

②若手教員の育成

昨今の教員不足で、若手教員や経験浅い職員が 4 割近くおり、ミドルリーダーと人材育成の重要性を共有し、沖縄県公立学校教員等育成指標に応じた人材を育成する環境を管理職中心に作る。

ア 各学年主任等を中心に中核となるミドルリーダーの育成を意図的かつ計画的に行う。

イ 当初面談で、育成指標に基づいてミドルリーダーとしての役割を明確化し、人材育成の視点を持たせる。

ウ 日常的な取組の振り返りや中間申告等で、成果と課題を確認して、解決の助言を与える。

エ 最終申告で年度末の振り返りを行い、成果と課題をまとめる。次年度の自立的な人材育成につなげるために各主任を中心に同僚性に基づいた協働体制をつくる。

- (2) あげな中学校（生徒数 792 名）

① 教職員評価の適切な実施

教職員評価は、教職員面談が中心となるが、実情は個々の目標設定に比重がおかれ、形骸化が懸念される。そこで、本校ではコミュニケーションを重視した。具体的には、学習指導は「ワクワクドキドキ」を、学級経営は「登校したくなる」等を上位目標に、先生方も面談で話したくなるテーマを設定した。また、臨時的任用職員も全員、面談を実施し、適切な教職員評価の土台の構築を図った。

② ミドルリーダーの育成

ミドルリーダーの存在が組織マネジメントで最も重要である。その力量は組織運営・学校経営に直結する。ミドルリーダーを育成するために学校の教育活動全体を通じて、期待値が高い人材の発言や行動を注視する。適宜に管理職の意向と学年や全体での評価を伝え、組織での役割を拡充させ、学校経営への参画意識を高めた。具体的には企画委員会や教科部会、生徒指導等の各種部会に参加・介入し、期待される人材の意見等を評価し、中・長期的に支援を行う。

③ 若手教員の育成

近年は教員不足のため、若手教員の育成は急務であり、個々の自己伸長を後押しする必要がある。具体的に若手教員は、ICT 活用の面等で柔軟な姿勢を兼ね備えているので、校内研修等で活躍の場を提供し、自己有用感を高める取組を実施した。さらに、部活動めぐりや学校整備等で同僚性の向上や働きがいのある職場環境の構築を図った。

④ 後方支援

学校 HP 等の学校便りで、生徒の活躍と教職員の活躍も評価・掲載することで、個々の自己伸長を促し、学校参画意識の向上に繋げている。

(3) 石川中学校（生徒数 4 1 1 名）

① 教職員評価の適切な実施について

職員の日々の教育活動を適切に評価し、さらに個々の教職員の教育力向上を目指すために、見取り・価値付け等を次のように行った。

- ・ 授業実践に関して、「生徒の良さ」「主体的な学びの視点での活動の様子」「教師の工夫」等についてまとめ、全職員で共有する。
- ・ 職員向けの校長便りで教員の発言や行動を取り上げ価値付ける。評価システムで取組んだ内容で効果的なことを取り上げ解説する。
- ・ 課題（例えば評価に関する事）等は、根拠や問題点を示し、おのおのが考える機会を作る。

② ミドルリーダーの育成について

本校教員における 4 割が指導期ステージに位置し、そのほとんどが主任等の役職を担っている。そのため、その役職に応じて必要とされる視点を評価面談等で共通・確認し、これまでの経験を生かした教育活動をより効果的・効率的に推進することを明確にしている。ただし、大きな課題は、職員同士の対話や教科部会の充実である。

③ 若手教員の育成について

本校における採用ステージ・基礎ステージ並びに臨時的任用職員は、ある程度の経験を積んでいる者が多い状況である。特に授業づくりについては、授業リフレクションを有効に活用した。例えば、2 年目研修者の授業を管理職と初任者、初任者指導員とともにリフレクションを行った。キャリアや教科の違いを活かすことで、意見交流が活発になり、楽しみながら互いの学び合いにつながった。学校全体で楽しみながらリフレクションが行える同僚性を高めていきたい。

(4) 具志川中学校（生徒数 698 名）

本校は、教員 46 名のうち本務教員 31 名、臨任教員が 15 名である。教職経験の浅い教師と積極的に教育活動に取り組む教師がおり、管理職で明確なビ

ジョンの提示と活動目的の整理等をしなければ、職員個々の嗜好による活動に偏ることが危惧される。

① 教職員評価の適切な実施

ア.経営方針と連動させた個々の目標設定

経営方針の中から、学習指導で 3 点、生徒指導で 3 点を重点取り組み事項として焦点化・明確化した。これらの取り組みを生徒への校長講話と保護者への学校説明で周知し、職員は学級経営案と育成評価記録書に記載させ、2 つを連動させて、意識化を図り、個々の教育活動推進の目標につなげる仕組みを整えた。

イ.キャリアステージに応じた指導助言

面談では、個々の教職員の経験年数に対応するキャリアステージを確認し、個々の教職員がキャリアステージに応じて教育活動を推進できるように助言を行った。

② ミドルリーダーの育成

校長の方針と行政の施策の関連性を示すために各種委員会や部会等で校長のまとめの言葉が重要である。その中で、個々のミドルリーダーの取り組みを価値付けて育成を図る。

③ 若手教員の育成

個々の教員の課題の改善方法について様々な教育活動の目的を共に整理して育成を図る。

(5) 具志川東中学校（生徒数 4 9 9 名）

① 教職員評価の適切な実施について

年度当初に教職員に学校経営方針を示し、重点項目の焦点化を図った。また、作成手順を示し、上位目標と教職員の目標がつながるよう職員会議等で周知を図った。自己目標については、役割達成可能なものとなるよう指導助言を行った。

このことによって、当初面談において学校経営に参画意欲を示す教職員が増加した。今後、日々の授業観察や学級経営について、適切な指導助言を行い、意欲を高める教職員評価を実践する。

② ミドルリーダーの育成について

ミドルリーダーが本校の課題等の対応策について、知見を深めるために校外研修への積極的参加を促す。そこで得た情報等を職員間で共有化し、校内部会（学推、七者企画員会、生徒指導部会）を通じて、学校運営の状況を分析し、着実に改善、実践する力等の資質・能力の育成を図る。

③ 若手教員の育成について

校内研修では若手教員とベテラン教諭、ミドルリーダーでグループを編制し、相互の意見交換の場を設けている。ICT の活用に長けている若手教員に ICT 活用例を紹介してもらうなど、出番を意図的に設定し意欲喚起を図っている。

第 5 分 科 会 【 那 覇 地 区 】

研 究 主 題

多様化した教育課題に対応できる学校経営と教員の育成
～教職員の専門性を発揮できる研修の在り方～

共同研究者

黒 島 佐和子（那覇市立松城中学校）
森 山 涼 子（那覇市立真和志中学校）
平 良 一（那覇市立安岡中学校）
又 吉 史 晃（那覇市立松島中学校）

1 はじめに

変化の激しい社会を自らの力で切り開いていける人材の育成のためには、教員自身が技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、その時々状況に応じて子ども一人一人の学びを最大限に引き出す役割を果たすことが求められている。

学校においては、いじめや不登校などの生徒指導上の問題、特別支援教育の充実、家庭や地域との連携・協働等、多様な課題に対応できる教員の資質・能力の向上が不可欠である。

本稿では、グループ内中学校の具体的な実践を通じ、成果と課題及び対応策の共有を行い、多様化した教育課題に対応できる学校経営と教員の育成の在り方について研究を深めていく。

2 研究の視点

次の(1)～(3)の視点から本主題を実践していく。

- (1) 「評価システム」の実践を通じての人材育成
- (2) 「校内研修」及び校内 OJT を通じての人材育成
- (3) 「学校組織マネジメント」における人材育成

3 研究の実践

【那覇市立 松城中学校の実践】

(1) 校内研修の充実

令和の日本型教育の認知と授業力向上をねらいとして、1人1授業を校内研の一貫で行っている。教科会として位置づけ、授業づくりや検証を教科単位で行うことで教科指導の標準を上げていく。授業の振り返りと管理職からのフィードバックも確実に実施している。



- ・特活(学級討議)と特支(自立活動)の授業づくり
- ・管理職が発行する授業参観レポート。



授業者にはフィードバック、全体には本時の伝達と令和の日本型教育（動向）についての周知になるように（心がけて）作成している。

(2) 働き方改革の具体的な推進

生徒玄関解錠時刻の変更、通知表所見欄の見直し、校務DX、休憩時間の確保等、『みんなの学校！ピースフルプラン』を礎に具体的な改善に取り組んでいる。同プラン策定の目的①～⑤を達成に近づけることで人材育成を図りたい。

【那覇市立 真和志中学校の実践】

(1) 校内研修の充実

道徳研修、生徒理解 QU 研修、SST・エンカウンター研修、一人一授業

(2) 授業改善アドバイザーと管理職による授業参観フィードバック

アドバイザーには、授業改善に有効なアドバイスや、タブレットを活用した個別最適な学びと協働的な学びの実践を校内で普及するよう動いてもらっている。

校長もアドバイザーも、Google Chat を使い、参観授業の場面を映像に撮り、フィードバックを即時に UP している。全職員がリアルタイムに、授業の良さを知り、タイムラグ無く共有でき、自己の授業改善に役立ててもらっている。一方、改善点や課題は、直接教諭に伝えるようにしている。



〇〇先生の授業、ベテランの安泰な授業でした。普段から全員が発言し、グループで対話できていることが分かりました。揺さぶりの二項対立、ディベートのワクワクで思考を深めたと思います。また板書の美しいこと。若者たちよ、美しく見やすい板書を学んで欲しいものです。

【那覇市立 安岡中学校の実践】

(1) 評価システムの活用

4 月当初に昨年度の学校評価等から学校の課題を確認し、教職員評価システムを活用して、それを元にした具体的な数値目標を、自己目標の中に明確に示してもらっている。夏季校内研修では「県版生徒質問紙調査」の結果から、学級経営・教科経営等について、学年会・教科会を通じて再検討し、それを元に夏休み明けの指導に生かしている。また、10 月の 2 回目の面談では、具体的な数値目標を示して、後期の教育活動に臨めるようにしている。

(2) ICT 機器を活用した校務改善

ICT 機器を活用した業務の効率化を進めており、校務上の情報交換については、Google のクラスルームを活用している。また、職員室に大型モニターを設置し、週報や授業改善リーダーの授業参観便りなどを掲示し、授業改善及び職員間の情報共有に役立てている。職員会議のペーパーレス化に取り組んでおり、各種公文や研修会の資料等もデータで共有できるようにしている。

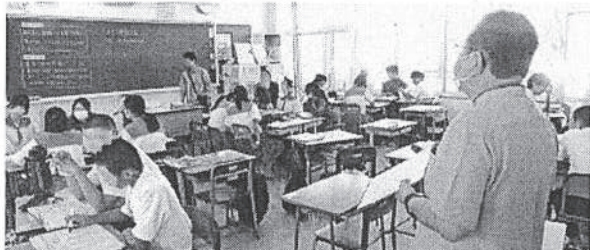
(3) 校内研修の充実

多岐にわたる教育課題に取り組むために、校内研修の内容に工夫をしている。キャリア教育、不登校生徒への対応については、小中一貫の校内研修の時間を活用して、小中での情報交換を行っている。夏季校内研修では「県版生徒質問紙調査」を活用し学級・教科の実態を把握した。また、大学教授を講師として招聘し、特別支援教育について理解を深めた。読書活動への理解を深めるために、県立図書館のバックヤードツアーを行った。

【松島中学校の実践】

(1) 評価システムの実践

当初面談で昨年度の学校経営の成果と課題を基に教科指導、校務分掌での揃えを明確かつ具体的に伝え、業務内容を焦点化することで、関係スキルの向上を図り、人材育成に繋がった。また、学校運営アドバイザー訪問では比嘉先生に評価システムや学校評価の有効活用について助言をいただきました。



(2) 校内研及び校内 OJT の実践

従来の「一人一授業」に加え、事前に管理職が授業観察をして一人一人に管理職からフィードバックして、それを基に一人一授業を実施することでより効果的なスキルアップを図った。



校内研で学習評価に関する研修や校務支援システムの操作等に関する研修を一学期前半で行い、共通理解を図った。ICT 機器を活用した業務の効率化については、現在「松島中ポータル」を作成中で、「掲示板」「出

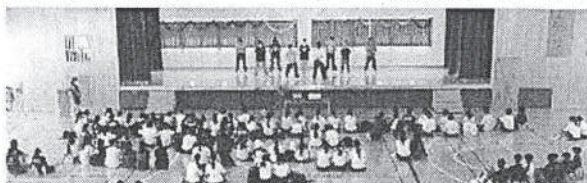
席届」「スクリレ」「今週の予定」「日誌関連」「週案」「生徒支援」等を盛り込み、こちらを有効活用して情報共有を一括化して業務の効率化を図りたい。

各学年にベテラン職員を OJT 担当として校務分掌上位置付けて、円滑な職員関係の構築と人材育成を図っている。生徒指導主事田場先生は授業を持たないが、若手育成のため、師範授業を率先して示してくれました。また週末には慰労会を計画し、悩みを聞いたりするなど OJT の果たす役割は大きいです。



(3) 学校組織マネジメントの実践

経年研を終えた本務の職員は、原則 2 年連続で主任級の、未経験の校務分掌を優先して、経験させることでスキルアップに繋がった。今年度生徒会主任を引き受けた知念先生は生徒会を活性化して生徒が学校に通いたくなる魅力ある学校作りに貢献している。下の写真は放課後の生徒会イベントでダンスを披露している。



「ホウ・レン・ソウ」の徹底を図ることで、共通実践の共通理解を図り、学校組織のマネジメントを図り、人材育成に繋がった。

4 成果と課題

(1) 成果

- 評価システムを活用することで教師の努力を認め励ます良い機会となり、意欲向上と関係スキルの向上が図れ、人材育成に繋がった。
- 校内研の充実を図ることで、学校課題を共有し、解決に向けて共通実践を組織的に取り組むことで人材育成に繋がった。
- 各学校長がリーダーシップを発揮し、組織マネジメントの充実を図り、教師がファシリテーターとなって生徒一人一人が輝く魅力ある学校作りに繋がった。

(2) 課題

- 教職員を支える働き方改革の具体的な取り組み。
- 教職員の教育情報アップデート(昭和の指導)

5 おわりに

AI 化と多様化が進む現代において今後教師に求められるファシリテーター的なスキル向上を図りたい。

研究主題

『多様化した教育課題に対応できる
学校経営と教員の育成』

共同研究者

砂川 泰範（宮古島市立上野中学校）

安田 一博（多良間村立多良間中学校）

1 はじめに

学校を取り巻く環境が急激に変化し、教育課題が多様化、複雑化する中で、学校や教職員に期待される業務は広がっている。また「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（中教審答申）」誰一人取り残すことのない持続可能な社会の創り手の育成をめざすとされている。

このような状況下で、校長は、マネジメント能力を発揮し教員一人一人の持続的な成長に向けて、急激な変化に対応できるための教員の「学び」が組織的に行われるような環境づくりが求められている。

2 主題設定の理由

教職員の人材育成について、中教審答申において「教職生活を通じて、実践的指導力等を高めるとともに、社会の急速な進展の中で、知識・技能の絶えざる刷新が必要であることから、教員が探究力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠」であるとし、「学び続ける教員像」そして「チームとしての学校」が効果的に機能し、職員がそれぞれの力を発揮し、伸ばしていくことが重要であるとされている。

人材育成の充実に資する取組として、校長は、教職員一人一人のもつ資質・能力を高めるための「学ぶ時間」や「学ぶマインド」を確保し、組織的に支援する体制をつくと共に、面談等の機会、人事評価制度を活用し、チーム学校の一員として学校運営に参画する教職員を育成することが必要となることから、本主題を設定する。

3 研究の視点

多様化した学校教育課題に対応できる教職員の育成と多様化する課題について組織的な対応を図る体制を構築するために、次の2つを視点において研究を推進する。

- (1) 教職員の専門性と指導力を発揮する研修や学校運営の在り方(教職員の資質能力の向上)
- (2) 学校経営に積極的に参画する教職員の育成や人事評価の在り方(チーム学校としての組織力の向上)

4 研究の実践

【宮古島市立上野中学校】

- (1) 多様化した教育課題に対応する教職員の専門性と指導力を発揮する研修や学校運営の在り方(教職員の資質能力の向上)

①小中連携の推進(教員の交流促進)

上野中学校と上野小学校両校で年4回の授業参観及び研究協議を実施し、教員の交流を促進しながら互いに学び合うことで、指導力の向上を図っている。また、両校校長、各担当で年6回協議等を実施し、計画的・継続的な連携を図っている。



②学校教育課題に即した校内研修の実施

校長と各担当が提示した学校教育課題をもとに、学力向上推進スクールプランについての協議、オンデマンド理論研修、県教育センター出前講座等の校内研修を計画的に実施し、資質・能力を高めている。



③当初・中間面談前の自己申告授業

当初・中間面談前に自己申告授業を実施し、校長（ICT活用と支持的風土等）の視点と教頭の視点（主体的・対話的等）で観察し、面談時にフィードバックを行うことで資質・能力の向上及び質的授業改善に役立てている。

- (2) 学校運営に積極的に参画する教職員の育成について(チーム学校としての組織力の向上)

①教育DXの推進

クラウド(jamboard・chat等)を使った研究協議や情報共有等、ICTインフルエンサーと校長で校務の効率化を推進し教職員の「学ぶ時間」や「学ぶマインド」を確保することで、組織力の向上を図っている。



②育成・評価記録書を活用した意識付け

育成・評価記録書（申告書）を作成するにあたり、校長として基礎期・発展期・指導期毎に資質能力評価の着眼点が違うことに触れ、経験年数に応じた学校運営への関わりと自律的成長を促している。

③学校マネジメントシートの活用

教育計画を作成するにあたり、学校マネジメントシート（学校評価等を根拠）を活用することで教職員一人一人の学校運営に対する参画意識を高め改善を図っている。

【多良間村立多良間中学校】

- (1) 多様化した教育課題に対応する教職員の専門性と指導力を発揮する研修や学校運営の在り方（教職員の資質能力の向上）

①教育事務所指導主事を招聘しての授業観察・フィードバックの実施

各教科担当教諭の授業力向上をねらいとして、宮古教育事務所の指導主事を6人招聘して、授業観察・授業フィードバックを実施。資質・能力を身につけさせるために単元デザインの工夫や指導と評価の一体化を各教科共通の視点として助言をいただき、指導力の向上に生かしている。

指導主事との
授業フィードバック

②授業力向上に向けた校内研修(理論研等)の充実

「学年のつなぎは資質・能力のつなぎ」を確実に実践していくために、各教科共通の視点を理論研修等で共有し実践につなげている。主な内容として、「単元デザイン」の工夫や、「指導観の転換→学習観の転換へ」、学びに向かう力を意識した「非認知能力の育成」や「自立した学習者の育成」等について、ベクトルを合わせて取り組んでいる。

③地域人材活用等に係る企画運営・調整力を育む

各先生方には、外部のキャリア教育コーディネーターと連携し、企画運営や外部との調整に関わり、地域人材の活用やオンラインによる職業講話宮古島市や那覇での体験活動等、キャリア教育の充実に努めてもらっている。その中で、離島のハンデを逆に生かして、教師として求められる企画や運営力、調整力等の資質能力を高めている。

1学年 沖縄本島の起業家との、オンラインによる
キャリア教育講話

- (2) 学校運営に積極的に参画する教職員の育成について（チーム学校としての組織力の向上）

①学校組織マネジメントに係るワークショップの実施

今年度の学校経営・運営が軌道に乗り始めた6月の時期に、宮古教育事務所の指導班長、指導班主任を招聘して、学校組織マネジメントについて整理し、指導助言をいただく機会を設けた。学校グランドデザインやスクールプランの内容、各種施策を関連させ、学校が向かうべき方向性を確認できた。後日、校内研修で全職員で共有し、ベクトルを揃えて取り組む事につながっている。

学校組織マネジメントの
ワークショップの様子

②主体的に「学び続ける教師集団」を目指して

年度当初に「教師が学び、学び続ける教師集団」であれば「生徒も学び、学び合う」学校に繋がると共通理解を図った。校内研修や週1開催の職員集会において、主体性を重視した「教職員の学び」を重視して、チーム学校としての取り組みを推進している。

教師自身の学び
(研修観)の転換

校内研修ワークショップ

5 成果と課題

【成果】

- ・児童生徒の実態や指導のあり方などについて理解を深めることができた。
- ・教職員の主体的な学校運営への参画意識の向上を図ることができた。
- ・教職員のベクトルを揃える事に繋がっている。
- ・ミドルリーダーの育成が図られている。

【課題】

- ・教育DXの更なる推進（教師間の活用に差がある）
- ・各教師が、「学校組織マネジメント」を意識した、更なる学校運営への参画。

6 おわりに

校務をつかさどる校長は、学校のリーダーとして教職員の人材育成について大きな責任と役割を担っている。また、多様化する学校教育課題に対応できる教職員の資質・能力向上及び学校全体の教育力の向上を図っていくことが求められている。そして、課題を解決するために組織として取り組める学校づくり（チーム学校）に務めていかなければならない。

第5分科会 『人材育成』

研究主題

多様化した教育課題に対応できる学校運営と教員の育成
～教職員の専門性と指導力を発揮する研修や学校運営の在り方～

共同研究者

◇西原 琢哉（与那国中学校）
◇伊舎堂 用右（富野小中学校）
◇川端 修（鳩間小中学校）

1 はじめに

急激に変化する時代の中で、次代を切り拓く子供たちに求められる資質・能力としては、文章の意味を正確に理解する読解力、教科等固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力、対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力などが求められる。

教員がこうした課題に対応できる専門的知識・技能を向上させるためにもマネジメント力を有する校長のリーダーシップの下、チームとして組織的かつ効果的な対応を行う必要がある。

2 主題設定の理由

社会が急激に変化する中、管理職に求められる取り組みは多様化してきている。校長は、組織力の向上と人材育成を積極的に取り組むために職員との共有の教育観を持ち、チームとして学校課題を解決していく姿勢が大事である。

そのためには、管理職（校長・教頭）は、教員同士が学び合い、高め合いながらエージェンシーを身につける組織づくり、OJTを通じた日常的な研修等の環境整備と学び続ける教員を支えるキャリアシステムの体制整備を構築しなければいけない。

3 研究の視点

「多様化した教育課題に対応できる教員の育成」のための視点を次の3点に設定し人材育成を試みる。

- (1) ICTを活用した授業改善及び働き方改革
- (2) OJTによる授業力向上
- (3) 管理職による積極的な校内研修への参加

上記の視点を踏まえ、学校の特色ある取組、校長の指導性（関わり）等について各学校の実践を把握し考察を図りたい。

4 研究の実際

与那国町立与那国中学校

(1) 学校・概要の概要

本校は、風光明媚な島の北側に位置し全校生徒33名、教職員12名の僻地小規模校である。保護者や地域の方

々は、学校教育に理解があり、各諸活動に多くの保護者等が参画するなど教育への関心が高い。校長の方針を学校経営基本構想として掲げ、特に豊かな心の育成に力を入れている。

(2) 本校の取組

今年度の校内研修テーマを「主体的に学ぶ生徒を育成する指導の工夫」～ICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びを通して～と設定した。

① キャリア教育の視点を踏まえた取組

ア 「BEEタイム・個別補習」の実施
基礎的・基本的事項の確実な定着を図る

イ 系統的・組織的な進路指導の充実

基幹産業体験、職場体験、キャリア講演会、高校入試説明会の実施

ウ 三点固定

生活学習チェックシートを活用し、生活リズム（起床、学習、就寝時間）の固定化を図る

エ キャリアパスポートの充実

3年間使用する一人一冊のキャリアパスポートを作成し、毎学期の記録等をつづり「振り返り」と「見通し」を繰り返し行う

② わかる授業の実践

ア 「与中授業スタンダード」の実践

めあて、まとめ、振り返り、新たな問いを見つける授業を各教科・領域で実践する

イ ICTを活用した個別学習とペア・グループ学習を通して、深い学びへ繋げる

ウ 一人一授業（互見授業）の実施

週時程に位置づけたOJTの実施

スランティライン理論による生徒支援

エ 各種学習調査を分析した教材・教具の工夫

オ 授業と家庭学習の往還

授業の予習・復習をICT（キュビナ含む）を活用しながら適宜行い、自学自習力の向上を図る

(3) 校長の指導性

社会の在り方が劇的に変わる時代の中で、生徒一人一人の個性の伸長を図り、持続可能な社会の創り手を育成することが求められており、教職員一人一人の強みを生かした特色ある学校づくりを進めなければならない。校

長は、保護者や地域のニーズ等を把握し課題解決に向けた指導・助言を行う必要がある。限られた時間を有効活用するために、ブリーフミーティングなども活用しながら、次なる一手を思考し教職員をリードしながら「チーム与那国中」の組織力の向上に努めている。

石垣市立富野小中学校

(1) 学校・地域の概要

本校は、石垣島の中央を走る於茂登山系の北部の山麓に位置し、小学部8名、中学部5名、合計13名の極小規模の小中併置校である。(世帯数：6世帯)

校訓「美ら心」の精神のもと、「自立」・「共生」・「貢献」の学校目標を掲げ、ひとり一人をしっかりと見とり適切な支援を心がけ、日々の教育活動を実践をしている。

(2) 本校の取組

本校の校内研修テーマは「適切な子ども理解に基づく「個別最適な学び」を保障する授業改善～キャリア発達に関わる諸能力の育成を目指したICTの効果的な活用と支援を通して～」とし、個々の特性の理解に重きを置き、支援の充実を図っている。

① 校内研修の充実

ア 校内研修に沿った取組の実践

・小中合同研修

イ 公開授業・互見授業

・主事要請(年間4回)、互見授業(全職員)

・授業後、授業研究会を行い、指導助言を行う

ウ 指導案検討会(各小中部会)

② 管理職による人材育成

ア 企画運営委員会・校内委員会との連動

・情報、行動連携の充実(協働体制の構築)

イ 終礼・週案のコメントによる指導助言

・教育トピックの提供(終礼)

・コメントを通して、激励やアドバイス(週案)

ウ 授業参観

③ 研修の奨励と外部機関との連携

ア 研修の奨励(資質向上)と受講体制を整える

イ 行政、SC、SSW、必要となる外部機関や地域とつなぐ(校務分掌上の支援・助言)

(3) 校長の指導性(関わり)

① 支持的風土のある小中連携した学校経営

② 関係機関との連携(人と人をつなげる)

③ 児童生徒・保護者・地域から信頼される教職員の育成

竹富町立鳩間小中学校

(1) 学校・地域の概要

鳩間島は、西表島の北約5.4kmにある面積約0.96km²の小さな島である。本校は、小学部3名、中学部4名、計7名の極小規模校である。ほぼ半数以上が、親元を離れ、鳩間島留学支援多目的施設「つばさ寮」で、集団生活をしている。

(2) 本校の取組

校内研修テーマを「自己有用感を高め、主体的に地域社会に参画する児童生徒の育成」とし、自分の考えを豊かに表現できる児童生徒の育成、島の豊かな環境・文化を活かした海洋教育の推進に取り組んでいる。

① 授業力向上のための校内研修の充実

ア 全職員が研究授業・授業研究会を実施

主事要請授業(年3回)、一人一授業(通年)、

イ GIGA 端末利活用研修の実施(年2回)

② OJTによる若手教師の育成

ア 指導案検討会の実施と授業研究会

指導案検討会と授業後の研究協議会を実施

イ 校外研修の奨励

研修受講履歴記録と受講奨励

③ 管理職による人材育成

ア 授業参観による授業力向上

管理職による授業参観(校長・教頭：各週1回)

イ 校務分掌に係る指導助言

管理職による日常的な相談と指導助言

ウ 週案による指導力の育成

コメントを通して、学校経営目標の浸透

(3) 校長の指導性

① 子供、保護者、地域から信頼される教職員の育成

② 学校経営へ全職員の参画や同僚性の育成

③ 支持的風土のある学校経営

5 成果と課題

○ ICTを活用した授業改善が図られた。

○ OJTの推進による学び合う協働体制の構築が図られた。

● 教職員の学び続ける意欲付けや研修時間の確保。

6 おわりに

校長として、教職員との共有の教育観を持ち、常に情報を発信してチームとして学校課題を解決していく姿勢が大切である。校長は、実践の中で不易と流行を踏まえ、教育改革や授業改善の在り方についてリーダーシップを発揮し、推進していくことが大切である。

[illegible]

第65回沖縄県中学校長研究大会中頭大会

地区別提案資料

中学校 第6科会
「学校経営」

研究主題

地域や専門機関との連携・協働による「チーム学校」の実現とその機能強化
～学校と地域が連携・協働する「チーム学校」の構築の在り方～

◇比嘉 智広(東江中学校)
◇小渡 克彦(屋我地ひるぎ学園)
◇大田 守利(伊平屋中学校)

1 はじめに

近年、不登校、いじめ、SNS に起因する問題をはじめ、学校が抱える課題はより複雑化、多様化している。生徒をより良く育て、これからの時代をたくましく生きていく力を育成するには学校のみならず、社会総がかりで教育を進めていく必要がある。そのためには、SC、SSW、相談員等専門性を持つ人々と地域との連携・共有が不可欠である。

また、校長は、「チーム学校」として教育活動に取り組む体制を創り上げ、学校のマネジメント機能の強化、教職員個々の力を発揮できる環境整備をし、家庭・地域・関係機関の連携・協力を一層強く推進していく必要がある。

本研究では、各学校の実践例をもとに、研究主題の視点から協議題に迫る具体的な方策を校長の関わりを通して研究を深めたい。

2 主題設定の理由

社会の大きな変化の中で、学校や家庭、地域の在り方やその機能も変化してきた。近年、家庭や地域の教育力の低下などが指摘される一方、保護者や地域の自発的な意見を尊重しながら、新たな連携協力の仕組みを構築し、関係者が一体となって取り組む必要があり、さらに部活動の在り方や様々な地域人材等との連携・協働を通して、保護者や地域、関係機関を巻き込み、教育活動を充実させていくことが求められている。このような視点から協議題に迫る具体的な方策を校長の指導を通して究明する。

3 研究の視点

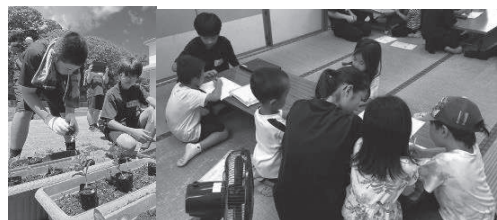
- (1) 各学校の地域と連携した生徒支援の実践事例をもとに、今後のチーム学校の在り方や校長の指導性について研究する。
- (2) 地域等の人的・物的資源の効果的な活用。
- (3) 学校・家庭・地域が目標・ビジョンを共有し、いかに推進していくか、その連携の在り方を研究する。
- (4) 学校教育目標具現化のための効果的な地域連携の在り方。

4 研究の実践

(1) 東江中学校の実践（全校生徒 239 名）

①公民館地域交流会の実施

総合的な学習において、地域学習や体験活動を通して自分たちが住んでいる地域の理解を深めるとともに地域貢献の大切さを理解し地域の一員という意識を高め、他者との関わり方を学ぶ機会として公民館地域交流会を実施している。今年度も各区区長の協力を得ながら校区内の8つの公民館に生徒を振り分け交流活動を行った。



②名護市教委キャリア教育コーディネーターとの連携

学校で企画した同内容をキャリア教育コーディネーターが校区内の各区長と連携し、講話や区内の拝所めぐり、地域の清掃、お年寄りや児童との交流など学校側からの提案や、区として経験させたいことなどを調整してもらい、充実した活動内容となるよう打ち合わせを行った。

③校長の関わりと指導性

- ア 学校経営方針の総合学習での具現化。
- イ 校区区長との連携、協働。
- ウ CS組織の機能化と情報発信

(2) 屋我地ひるぎ学園の実践（全校児童生徒 171 名）

①コミュニティスクール(以下 CS とする)の仕組みを活かした教育活動の推進

ア 総合的な学習の時間（生活科含む）

小学1年生から中学3年生までの系統的な指導計画を作成し、地域資源（人材・施設）を活用した

様々な体験学習を実施。みつばち教室、アジサン（渡り鳥）観察、塩田体験、干潟の生物観察等。

イ 放課後学習支援

保護者、地域住民による児童生徒支援活動を実施。（英会話、生き物観察、宿題サポート、合気道、プログラミング等）

ウ 朝の見守り・読み語りや各教科、行事への参画

保護者や地域住民による朝の交通整理や読語り、各教科や進路、クラブ、運動会エイサー等の指導。



アジサン（渡り鳥）観察 干潟の生物観察

②関係機関と連携した特別な支援を要する児童生徒への対応

ア 生徒指導（特別支援）委員会へ関係者の参加
週1回開催される会議に、スクールカウンセラー、名護市生活支援課こどもサポーター、名護警察署警察官等が同席し、情報共有や具体的な対応を検討

イ 関係機関と連携した居場所づくりと家庭支援
名護市あけみお学級やフリースクール、児童相談所等と連携した居場所づくり。市役所福祉部生活支援課と連携した家庭支援。

③校長の関わりと指導性

ア 職員への学校経営方針等とCS推進の確認

イ 保護者や地域と連携・協働した取組の推進
PTA組織とCS組織の融合に向けた取組。学校だより、HP、安心安全メール等による情報発信

ウ 校内支援体制と関係機関との連携の構築

(3)伊平屋中学校の実践（全校生徒数37名）

①地域一帯として進める「伝統文化学習」の取組
総合学習の一環として、小・中合同で、「伝統文化学習の日」を位置づけ、各字公民館等に出向き、伝統文化を学ぶ機会とし、地域の講師の方々と連携協働して伝統文化の継承に努めている。



②「いへやムーンライトマラソン」へ積極的に参画し、地域・関係機関との連携強化

※教育活動の一環として取り組み、一緒になって島の一大イベントの成功を体感する。

ア 選手を受け入れる前の袋詰め作業

イ 選手の受け入れのボランティア（受付等）

ウ 大会当日のゴールでのボランティア（メダル授与）



③校長の関わりと指導性

ア 「伝統文化学習」や「ムーンライトマラソン」のボランティアを教育課程に位置づけ、小中学の校長及び教育委員会・関係機関との連携を図る。

イ 伝統文化学習では、各字公民館の講師の方（地域）との連携及び、先生方については、各講座に担当教師を決め、伝統文化を学び地域密着を図る。

5 成果(○)と課題(●)

○教育目標である「生徒を地域とともに育てる」を具体的に実践できた。

○全国学調生徒質問紙「地域や社会をよりよくするために何かしてみたいと思いますか」（肯定的回答65.9%）

○「チーム学校」の取り組みの推進には、地域や関係機関等との日頃の交流や情報交換が大切であることを再確認することができた。

○総合的な学習や各教科で保護者や地域人材を効果的に活用し、子ども達の学びや体験が充実した。

○関係機関との連携により、特別な支援を要する児童生徒への対応の幅が広がり、改善に向かうことが多かった。

●CS推進のための地域学校協働活動推進員との連携

●学校と地域等が目標を共有できる関係性をさらに築き、マネジメント機能の強化を図る。

6 おわりに

「魅力ある学校」づくりには、学校・地域が連携・協働することが不可欠である。今後も校長のリーダーシップを発揮し、各学校の特色を生かし、学校と地域が連携・協働できる「チーム学校」の実現と機能強化を目指した学校経営を推進していきたい。

第 6 分科会 【 那 覇 地 区 】

研 究 主 題

地域や専門機関との連携・協働による「チーム学校」の実現とその機能強化

共同研究者 （那覇ブロック）

當 間 五 弥（那覇市立上山中学校）
吉 村 雅 也（那覇市立那覇中学校）
名嘉原 安 志（那覇市立神原中学校）
平 良 裕 樹（久米島町立球美中学校）

1 はじめに

21 世紀は知識基盤社会であり、少子・高齢化、グローバル化の進展や AI をはじめとするデジタル技術の革新等により、我が国を取り巻く環境は変化の速度を一層増しており、予測が困難な時代となっている。

この潮流への対応については学校教育も例外ではなく、文部科学省は「学校が地域住民や企業、NPO 等、様々な専門知識・能力を持った人材が関わることで、将来を生き抜く子どもたちに必要な資質・能力を育成することができる」と謳っている。

2 主題設定の理由

学校における課題は本来の業務にプラスして不登校対応や保護者対応等、複雑化・多様化している。また、学校教育の質・量の維持・向上を図り、教職員が本来の業務に集中できる環境づくりという観点からも、学校と地域、専門機関が連携・協働する「チーム学校」の実現は重要である。学校、家庭、地域、企業、関係機関等が垣根を越えて、生徒の学び方や新たな教育システムをデザインすることが肝要であるため、本主題を設定した。

3 研究の視点

- (1) 家庭や地域、企業、関係機関と連携した実践事例を基に今後の「チーム学校」の在り方について研究する。
- (2) 小中一貫教育の実践事例を基に校種間における共通実践の強化を図る学校経営の在り方について研究する。
- (3) 教職員の専門性を高め、組織力の強化を図る学校経営の在り方について研究する。

4 研究の実際

【那覇市立 神原中学校の実践】生徒数 320 名

本校は学校教育目標を達成するために、学校経営の基本方針に学校組織の活性化と「チーム学校」を構築することを示し、教師が PTCA や関係機関、専門家等と連携して、課題の解決にことのできる「チーム学校」の構築を目指している。

今年度の重点事項を「キャリア形成を図り、夢・希望・志を持ち社会を生き抜く力を育む」と掲げて、

キャリア教育の充実に取り組んでいる。内容については、「金融教育」と「職業教育」を計画している。

(1) 授業における連携・協働

キャリア教育の推進を図るため、日本生命が実施している出前授業「わたしのライフデザイン～みらいとつなぐ～」を活用した人生設計についての授業を 3 年生対象に総合的な学習の時間で行った。2 時間構成で、1 時間目は事前授業として学級担任が生徒に将来の姿をイメージさせ、将来の生活にどの程度の費用がかかるかを考えさせた。2 時間目は金融の専門家による授業で、何を大切に自分の人生を設計するかについて学んだ。

生徒は自分の将来について漠然と考えるのではなく、具体的にライフデザインを描くことでキャリアプランニング能力を育成し、より実感を持って自分の人生設計について考えるきっかけとなった。

その他、「職業人に学ぶ進路講演会」を予定しており、「職業観」「勤労観」の育成を計画している。

(2) 校長の指導性と関わり

キャリア教育については、生徒自身が将来に対する目的意識を高める学びとなるよう、常に目的、ねらいを明確にして実践することを助言している。



【那覇市立 那覇中学校の実践】生徒数 617 名

本校では教育目標「未来に生きる 確かな学力 豊かな人間性 健康・体力を育む」の達成するために、スローガンである「那覇中生のプライド実現」を合い言葉に、「知・徳・体バランスのとれた成長」、「誇れる自分、誇れる学校、誇れる地域・ふるさと」を学校経営の基本理念に据え、教育活動を展開している。今年度、めざす生徒像として『目標に向かってチャレンジし、「考え、行動する」生徒をめざす』事を掲げている。

(1) 対外行事・地域行事における連携・協働

那覇ハーリーや旗頭や那覇大綱挽、地域祭りに参

加することは伝統文化継承と社会貢献に繋がる。毎年、時期になるとチンクーの鐘の音やかけ声で心が躍り出し行事を心待ちにしている。行事を通して関係性が深まり地域の方々の声かけで自己肯定感が高まり所属感を味わえることを楽しみにしている。ハーリーにおいては優勝という結果も大事だが、そこに至る取り組んだ経過や叱咤激励の言葉がけが生徒のより良き変容に好影響を与えている。



(2) 校長の指導性と関わり

常に目標設定を行い「そのために なにを い つまでにどうする」を考えゴールを見据えた逆算が大事である。地域指導者に感謝と丁寧な対応を心がけている。

【那覇市立 上山中学校の実践】生徒数353名

本校は「質実剛健」を校訓に掲げ、育成したい生徒の3つの資質・能力「自立心、協働心、向上心」を育むことを目標に教育活動を行っている。本校における生徒指導の課題は不登校であり、商業施設や飲食店も多いことから深夜徘徊への対策にも力を入れている。

(1) 生徒指導・健全育成における連携・協働

日常的な健全育成の取組としての地域住民による「旗、ダンス、空手、三線教室」の公民館による「美術クラブ」の開催

不登校対策の取組としての「教育相談課への来所」と「民生委員による家庭訪問」、「児童館による受け入れ」、「フリースクール等民間施設活用者の出席取り扱い連携」の実施

深夜徘徊・問題行動対策の取組としての「年5回の青少協夜間街頭指導」、「親父の会による毎月の夜間パトロール」の実施



(2) 校長の指導性と関わり

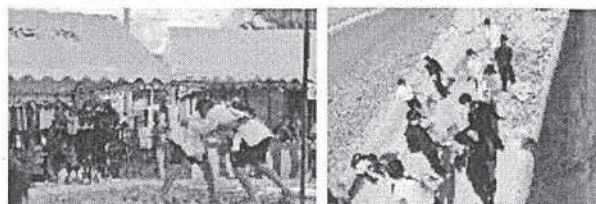
生徒指導・保護者対応は授業の空き時間や放課後が多く、働き方改革から夜間及び休日業務を0に近づけることが求められている。生徒指導の情報共有と家庭訪問・夜間パトロールを「教員なし」で実施するために「児童館情報交換会」や「まちづくり協議会」等に参加して、理解をしてもらうための説明と具体的な方策の指示を行うことに努めている。

【久米島町立 球美中学校の実践】生徒数102名

本校では学校教育目標の達成に向け、知・徳・体のバランスのとれた生徒の育成、並びに郷土愛を育成することを目指し、学校・家庭・地域が連携・協働する「チーム学校」の構築を図り、下記実践に取り組んでいる。

(1) 地域行事との関わり

地域のハーリーや沖縄角力大会、町民運動会や地域清掃活動への生徒・職員の参加など、地域との連携・協働で伝統文化の継承、地域貢献を行っている。



(2) 校長の指導性との関わり

地域の行事や会合への積極的な参加と毎月の学校だよりの発行による保護者・地域への情報公開(学校HPの活用)。

5 成果と課題

(1) 成果

- キャリア教育の推進が図られた。
- 健全育成で、協力体制が充実した。
- 文化継承と社会貢献、人材育成に繋がった。

(2) 課題

- 地域人材システムの構築をどう図るか。
- 教師の関わり方をどう図るべきか。
- 地域人材バンク登録者をどう増やすか。

6 おわりに

新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指して、保護者や地域人材、専門機関など、専門性を持つ教師以外の人材を積極的に活用し、協働体制を構築することで連携・協働による「チーム学校」づくりに取り組んできた。このことは「魅力ある学校づくり」を推進するためには必要不可欠であり、今後も多くの外部人材との連携・協働体制の強化を図っていきたい。

第6分科会「学校経営」【島尻地区】

研究主題

地域や専門機関との連携・共同による「チーム学校」の実現とその機能強化
～学校と地域が連携・共同する
「チーム学校」の構築の在り方～

共同研究者

神 里 吉 竹（座間味村立阿嘉小中学校）
川 上 一 （八重瀬町立東風平中学校）
新 崎 峰 子（豊見城市立長嶺中学校）
平 仲 健 （栗国村立栗国小中学校）

1 はじめに

校長は、教職員の多岐にわたる校務に対して、進捗状況を管理するとともに、具体的な事象に基づいて評価しながら、個々の力を引き出すことが求められている。また、外部の関係機関や地域人材、保護者等を積極的に巻き込みながら、「チーム学校」としての取り組みをマネジメントする必要がある。

そして、多様な人々とつながりを持ちながら学ぶことができる開かれた環境、開かれた教育課程を実現する学校づくりが不可欠とされる。

その視点において国は「チームとしての学校」を提言し、学校が地域や関係機関と連携した組織として教育活動に取り組む体制づくりの重要性を打ち出しており、校長はリーダーシップを発揮して目標の実現や課題解決に努めなければならない。

2 主題設定の理由

- (1) 「チーム学校」として必要な地域との接続や関係機関との連携の進め方のノウハウを明らかにするため。
- (2) より機能する「チーム学校」のための組織づくりの要点や役割分担を明確にし、校長のリーダーシップをより高めるため。

3 研究の視点

学校の有する課題の解決やさらに伸ばしたい生徒の強みに焦点を当て、何をどう変えたいのかという目標に迫るための「チーム学校」の機能化とその実践。

4 研究の実践（※校長の関わりを具体的に示す）

(1) 阿嘉小中学校の実践

①地域人材及び関係機関との連携・協働

ア サンゴ産卵観察と体験ダイビング

阿嘉・慶留間ダイビング協会の全面的な協力の下、小学3～6年生はサンゴ産卵観察会、中学生は体験ダイビングを実施している。地域の豊かな自然を体験し、故郷への誇りと愛着を育む機会となっている。

イ 平和学習会

地域の戦争体験者を講師として招き、平和学習に取り組んでいる。米

軍上陸の地や壕などの戦跡めぐりなどを通して戦争時の郷土の悲惨な状況を知り、平和の尊さについて学ぶ機会となっている。

ウ 阿嘉陸上クラブ

保護者で村役場職員の金城氏が代表を務め、約8割の児童生徒が活動に参加している。今年度も中学生1名が県大会で上位の成績を収め、九州大会への派遣も決まり、子どもたちの自信とやる気に繋がっている。

②成果と課題

ア 成果

地域の人材や関係機関との連携・協働を通して地域の特性を生かした教育活動の充実を図ることができた。

イ 課題

保護者や地域及び関係機関との協働体制を構築し、教育活動の更なる充実を図り、学校の業務改善にも繋げたい。

(2) 東風平中学校の実践

①スクール・カウンセラーの活用

ア 各学校におけるスクール・カウンセラー（以下、SC）による相談活動等は、生徒や保護者、教職員にとって重要な役割を果たしている。

とりわけ本校では、当該生徒との面談はもとより、

医療等の専門的機関の活用も視野に入れた予防的な相



体験ダイビングの様子



三者面談の様子

談活動を取り入れる等、積極的な教育相談の充実に寄与している。

イ SCの相談等の件数で最も多いのが、友人や家族関係、学習、進路等である。相談内容によっては保護者とSC、学校の三者によるケース会議を開き、より具体的な助言等が得られるよう工夫している。

② 成果と課題

ア 高度且つ専門的な知見を有する本校のSCの強みを活かして、教師が個別の事例に関する専門的な助言をSCから直接仰いだり、適応指導教室に通室する生徒の面談を積極的に対応したりする等、実効性のある連携に努めている。

イ 今後は、SCに生徒指導委員会と教育相談委員会の定例会議に参加してもらい、ケースに応じた専門的な助言等を受け、問題の改善や解決を迅速にする必要がある。

(3) 長嶺中学校の実践

① 学校運営協議会（CS）、地域との連携

ア 「地域とともにある学校」を実現する仕組みとして学校運営協議委員の皆さんと連携し、校内適応教室へ入室している生徒の人とのかかわりを目的とした根差部花友会の皆さんとの交流と校外に蘭の花の植え付け。3年理科の「発酵」の授業では、JA女性部の皆さんに教わり一人一人が実際に味噌づくりを体験した。どの実践も貴重な体験となった。

イ キャリア教育の一環として、地域にある南部農林高校と食をテーマに探求学習を行った。各学科について理解し、食の大切さを学び、実際に沖縄の食材でお菓子やパン作り、無菌室体験、バイオテクノロジー等について体験活動を行った。12月には2学年全員、1月

には1学年全員が食をテーマに交流、体験学習を予定している。



沖縄の食材でお菓子作りの様子

② 成果と課題

成果としては、地域と保護者、学校が連携して子供たちと関わり育てることで、一人一人の良さが増し、コミュニケーション力が高まりつつある。また、農林高校を体験したことで、生徒一人一人が、自分の進路について真剣に考える機会となったことが、生徒の感想から伺えた。

課題としては、次年度から、年計に組み込み、生徒・職員が見通しを持った取り組みになるようにしたい。

(4) 栗国小中学校の実践

① 地域に愛着を抱く教育活動

ア 離島校であることから島の特性を生かした総合の学習や行事等の体験活動を通して伝統文化や地域の自然や生活に誇りを持つ取り組みを行っている。また職員の勤務年数が2年から3年ということもあり入れ替わりが早いことから、PTA、役場、各事業所の協力は欠かせないものである。

イ 地域と共にある学校の在り方としてまず、学校教育に関心をもってもらうために、学校の様子や児童生徒の各種コンクールや諸検定、大会等での活躍状況について、積極的に「学校便り」を発信している。「学校便り」は保護者のみならず、地域の各事業所等の窓口にも配布している。また「チーム栗国」として学校職員が地域住民の一人として地域に溶け込みやすい



栗国特産品かりんとう作り体験

② 成果と課題

ア 成果

- ・ 行事等の体験活動は勤務2年目職員が中心となるため円滑な引継が行われている。
- ・ PTA や地域の意見も尊重し行事運営に取り組むことができた。

イ 課題

- ・ 児童生徒の意見を考慮した行事の運営に関する場の設定
- ・ 地域住民の参加の拡大

6 おわりに

各校ともに、学校や地域の状況と特色に応じて「チーム学校」の構築と機能強化が図られている。

「チーム学校」の実現のためには、校長のリーダーシップが不可欠である。そのためには、家庭・地域・学校の三者による学校教育目標の教育課題等を共有するとともに、地域のニーズを把握し、学校教育活動を充実・推進し、家庭・地域と共に創意工夫のもと、学校マネジメントの実践に努め、力量を高めたい。

研究主題

地域や専門機関との連携・協働による「チーム学校」の実現とその機能強化

共同研究者 松 本 尚（狩俣中学校）

// 佐久本 聡（伊良部島中学校）

1 はじめに

学習指導要領には、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという理念を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程」の重要性が示されている。

そのため、学校では家庭や地域、専門機関と協力し「チーム学校」として教育活動の一層の充実に向けて、地域と円滑な連携を目指した「持続可能な学校組織運営」を推進していくことが求められている。

本研究は2年目であり、前年度に引き続き各学校の実践事例をもとに、学校のマネジメント機能の強化等「チーム学校」を高める校長の役割を探究し、研究主題に迫る具体的な取り組み（方策）について紹介していく。

2 主題設定の理由

(1) 「チーム学校」の実現とその機能強化のため、学校長は専門性に基づく組織体制の構築や学校のマネジメント機能の強化、教職員一人一人が力を発揮できる環境の整備などを目指した学校運営をどのように推進、管理していくかを探究するため。

(2) コミュニティスクールの設置等、変化する社会にに応じて、より機能する学校運営とその進め方、校長のリーダーシップを明らかにするため。

以上の理由により、本主題を設定した。

3 研究の視点

2年目となる本研究においては「学校と地域が連携・協働する『チーム学校』の構築のあり方」を研究の視点として、以下の2点を念頭におきながら取り組んでいく。

- ① 家庭・地域と連携したチーム学校の在り方
- ② 「チーム学校」の機能向上と校長の役割

4 研究の実際

(1) その1 宮古島市立伊良部島中学校(結の橋学園)

【中学：生徒数 103 名、学級数 7、職員数 17 名】

本校は、平成 31 年 4 月に 4 つの小中学校が統合し、施設一体型小中一貫校として開校している。

校区は伊良部島全体（伊良部地区・佐良浜地区）

であり、家庭との連携はもちろん、地域コミュニティの活性化を図るためにも、島全体を地域とした魅力ある教育活動の展開が求められている。

小中学校あわせた児童生徒数は 302 名、職員数は 45 名である。

① 家庭・地域と連携したチーム学校の在り方

○ 「PTCA」活動の強化

本校では、一般的な保護者と教職員だけから成る PTA に加え地域の方々も参加し、支えあうことで、児童生徒の健全育成ならびに三者が親和協力しグローバル人材育成を目指した P T C A 活動を展開している。



この活動は、伊良部島全体の活性化と 2 地区（伊良部地区・佐良浜地区）の連携強化を図ることに大きな役割を担っている。

○ 地域人材の活用と「職場体験」の取り組み

伊良部・佐良浜地区は漁師町として栄えた歴史もあるが、現在は観光を中心とした第三次産業の発達により地区全体の産業形態も変わりつつある。

地区（伊良部島）の現状を学び、地域課題の解決に向けて取り組んでいく姿勢を育成するために、伊良部島の企業を中心とした職場体験学習や地域人材を活用した環境保全講話・活動等に取り組んでいる。



② 「チーム学校」の機能向上と校長の役割

○ 「学校運営協議会」の設置

本校では、本年度より「結いの橋学園学校運営協議会」を設置し、学校と地域で目指す子ども像（資質能力）を共有し、地域と一体となって子どもたちを育む「地域とともにある学校」に向けて活動している。

協議会の設置にあたっては、宮古島市派遣の地域コーディネーターと学校管理職での協議を重ね保護者、地域住民、学識経験者等 15 名の運営委員を委嘱し会の運営を行っている。

8 月末（予定）には第 1 回の運営協議会を開催して学校運営の基本方針し説明、12 月以降に開催

予定の第2回運営協議会にて、地域の特色を活かした学校運営の改善および児童生徒の健全育成に向けた協議を予定している。

C Sの取り組みを含め、校長がリーダーシップを発揮し、学校課題を解決し教育力を向上させていくため、管理職もチームとして取り組むことが有効である。教頭との確実な情報共有の推進等、管理職の連携体制を強化することを意識しながら校長としての役割を推進している。

(2) その2 宮古島市立狩俣中学校

【生徒数 12名、学級数 2、職員 10名】

本校は、「豊かな知性と品性を持ちたくましく生きる生徒」を教育目標とし、「未来を創造し社会を生き抜く力を備えた生徒を育成する」ことを目標に教育活動を行っている。そのため、家庭・地域との連携を密にし、地域の社会の一員であることを自覚し、故郷を誇りに思い守り育てようとする心を育成することが重要であると考えている。そのため、地域行事への参加、家庭・地域と連携した学校行事の運営が必要不可欠であると考えている。

① 家庭・地域と連携した各種行事の取り組み

海洋に関する学校行事、地域行事、PTA活動が多くあり、地域性を生かした行事を取り入れることで、魅力ある学校づくりを目指している。

ア モズク収穫体験（PTA活動）

保護者と地域の漁師のご厚意により、収穫体験を行い、地域の主な産業を知り、親に対する感謝の念を育てる。



イ 「海神祭」への参加（地域行事）

地域の伝統的行事に参加することにより、地域の基盤産業を知ると共に故郷に誇りを持ち守ろうとする態度を育成する。



ウ 追い込み体験学習（学校行事）

令和5年度から再開した、学行事で、生徒の人間形成、キャリア発達等に大きな影響を与えているため、家庭、地域、学校が協力して行う「持続可能な学校行事」として組織体の構築を目指して取り組んでいる。



② 校長の役割

ア 企画委員会・運営委員会

行事等に参加するに当たり、参加、開催する上での目的、ねらいを明確にし、教頭と連携して全職員が協働して取り組む体制を構築する。

イ 地域、家庭（PTA）との連携

教頭と連携して、地域・家庭（PTA）との行事に向けた連絡会の開催及び連絡調整を行った。

また、各種行事における学校、家庭、地域の役割を明確化し、行事参加、開催に必要な役割分担を明確化・確立した（持続可能な学校行事の構築）。

ウ コミュニティースクールの組織編成

令和6年度、狩俣学区としてコミュニティースクール（学校運営委員会）を組織する。そのため、小・中学校連携のもと、組織の構築と運営に向けた調整を行い、持続可能な学校行事の構築に向けた取り組みと協力依頼を行う。

5 成果と課題

(1) 成果

- 各校ともに、地域の特色や人材活用を図った教育活動を展開し学習成果をあげている。
- 地域連携の推進で、校外活動への対応がより具体的になり、職員の負担軽減にもつながった。
- 地域・家庭に対して、学校行事等における、組織作り、協力体制の必要性を意識づけできた。
- 「学校運営協議会」の設置により、学校教育に対する地域の協力や理解が得られやすくなった。

(2) 課題

- 地域全体での学びを展開していくコミュニティースクールへの運営と実践力のある組織運営
- 学校におけるミドルリーダーの養成と地域コーディネーターの活用

6 おわりに

2年間の研究を通して、「チーム学校」を推進するための校長の役割は、根拠に基づいた学校の実態把握と理論的思考による経営計画の策定、組織のベクトルを揃えるためのゴールの可視化（学校グランドデザイン等の作成）が必要であることを再認識できた。さらに、保護者や地域住民等が学校運営に参画するコミュニティースクール等の仕組みを活用しつつ、「チーム学校」の力を一層高めていくことの重要性も確認できた。

地域の良さを生かし充実した教育活動を進めていくためにも、カリキュラム・マネジメントの充実を図りながら、適切な連携、組織づくりを進めていくことを念頭に、今後も「チーム学校」の実現とその機能強化に向けた研究を進めていく。

研究主題

地域や専門機関との連携・協働による「チーム学校」の実現とその機能連携

共同研究者

- ◇宮良 篤（石垣市立白保中学校）
- ◇當銘 武志（石垣市立伊原間中学校）
- ◇手登根広幸（与那国町立久部良中学校）

1 はじめに

本地区における学校と地域や専門機関との連携・協働体制については、離島・へき地という強みを活かし、従前より各学校ごとに特色ある取組が充実している。一方、各種取組を推進する上で、より一層、学校と地域や専門機関それぞれの課題解決が図られ、対等な立場の下で、共に活動する協働関係を構築することが、「持続可能な社会の創り手」である生徒の育成に資すると思われる。

2 主題設定の理由

学力向上やいじめ・不登校などの複雑化・多様化した課題の山積に加え、教職員の多忙化や業務負担軽減を目的に「働き方改革」の強力な推進が求められている。また、「特色ある学校づくり」の実現に向けては、地域や専門機関の地域素材である「ひと・もの・こと」を把握するとともに、教職員一人一人が教育課程編成者である自覚と、カリキュラム・マネジメント力を高めるため、校長のリーダーシップと学校マネジメント機能強化が必須である。

3 研究の視点

学習指導要領では「社会（地域）に開かれた教育課程」の実現が求められているが、今後は、もう一步踏み込んだ「社会（地域）と共にある学校」づくりが重要である。協議①学校と地域が連携・協働する「チーム学校」構築の在り方を受け、具体的方策と校長の指導性について、下記の2点を中心に実践事例をまとめ、成果と課題を明らかにする。

- （1）教職員の専門性を高め、主体的な教育課程編成者の在り方
- （2）教育課程編成に参画・参加する地域や専門機関の在り方

4 研究の実際

＜石垣市立白保中学校の取組＞

（1）学校の概要

本校は昭和24年創立の今年度で75年目を迎える歴史と伝統ある学校で、各学年1クラスの3学級、特別支援学級2学級、計5学級、全校生徒数59名の小規模校である。

（2）取組の実際

①総合的な学習の時間における連携

WWF しらほサンゴ村に本拠を置く「NPO 夏花」と連携し、白保集落の自然・文化の学習に取り組んでいる。

②地域伝統文化の継承

本地域は伝統芸能、催事が盛んで、その継承者として生徒の関わりが重要である。そのため、公民館、青年会、婦人会、伝統芸能保存会と連携を図り、豊年祭、海神祭、棒術保存会、獅子保存会、校歌ダンス等の行事に地域の一住民として積極的に参加するよう教職員に呼びかけ、地域との連携・協働に努めている。

③近隣校との連携

地域にある八重山特別支援学校との交流を通して、障がいのある児童生徒への理解を深め、互いを認め合う気持ちを育み、障がいを理由とする差別の解消の推進を図りインクルーシブ教育を進めている。

（3）校長の指導性

「チーム学校」を実現するためには、学校と家庭、地域社会との関係を重要視し、連携・協働による教育活動を推進し、充実していくことが肝心である。総合的な学習の時間における地域の自然・伝統文化の学習や、福祉体験及び職場体験等の活動時に直接、得られる指導・助言、あるいは専門性を有する地域教育資源（人材）と連携・協働することは、生徒の興味・関心を高めるとともに効果的である。更に、他地域から赴任し短期間の勤務で去って行く教職員の地域への思いにも温度差があり、「地域あつての学校」という思いを管理職としてどこまで理解させるのか非常に悩みどころである。

このような「チーム学校」の体制を整備することにより、教職員一人一人が自らの専門性を発揮するとともに、教職員以外の地域の専門的能力を持った人材資源の参画を得て、課題の解決に求められる専門性や経験を補い、生徒に必要な資質・能力を確実に身に付けさせることが期待できる。

（4）成果と課題

○地域の「NPO 法人夏花」スタッフの全面的な協力により、「地域の自然に学ぶ活動」を通して、生徒の郷土学習に関する興味・関心が高まり、地域を愛する心や豊かな情操を育むことができた。

○コロナ禍も明け、地域の伝統文化、芸能催事が復活し、地域文化の継承者としての生徒の活躍の場が増加し、生き生きとした表情で矜持を持ち、取り組む姿が見られる。

- コロナ禍で各種行事が中止、縮小、見直し等となり、更に、働き方改革が声高く叫ばれ、教職員の勤務時間外に指導を仰ぐ地域行事への参加協力に対する理解度が低く、温度差も見られる。そのような状態でも、地域に誇りを持てる生徒の育成に努めていきたい。

＜石垣市立伊原間中学校の取組＞

（１）学校の概要

本校は石垣市の北部に位置し、昭和38年に伊野田中、野底中、明石中、平久保中の4中学校が伊原間中学校に統合され61年を迎える。特別支援学級1クラスと各学年1クラスの4学級で、全校生徒23名の小規模校である。

（２）取組の実際

①ハーリー及び豊年祭（地域との連携）

校区内で行われる行事（ハーリー・豊年祭）に学校として参加し、地域の伝統や文化を学んでいる。ハーリーでは、北部漁友会の協力の下、生徒・職員全員が体験することができた。豊年祭では、指導者や青年会の協力で、学校の旗頭を奉納した。

②生物多様性学習（専門機関との連携）

石垣島北部地区における在来生物・外来生物の学習を環境省や環境教育に取り組んでいる業者と連携して学習している。オオヒキガエルやイグアナなどの外来生物が増える中、在来生物にどのような影響を及ぼしているのか等を継続して観察し、自然への関心と郷土についての理解を深めている。また、校区内小学校への出前授業を行い、未来に向けてできることを共同で考え実践していく力を培っている。

③統合60周年記念事業（地域との連携）

令和5年度に統合60周年を迎えた。地域や卒業生の方々の協力により、校内の環境整備が充実し快適な学習環境を整えることができた。その裏には、本校卒業生の方々の母校愛と献身的な働きがあり感謝に堪えない。改めて地域の学校を実感した。

（３）校長の指導性

「チーム学校」の実現に向け、地域や関係機関との連携・協働を図るとともに、職員が専門性を高め、生徒が活躍できる環境づくりに努めている。その基盤を整備することが私の役目として取り組んできた。幸い地域との関係性も良好である。今後は、職員の指導力向上と生徒が輝けるよう、その指導と支援に努めたい。

（４）成果と課題

- 地域との連携並びに関係性は良好で、生徒・職員全員が体験活動をとおして、地域の伝

統や文化に触れることができた。

- 専門機関等と学んだことを基に、校区内小学校と連携し、「未来に向けてできること」という問いを設定し、共に考え、最適解を見つける出前授業の実践ができた。

- 地域や関係機関との連携・協働する際、教職員の勤務時間外となる場合が多く、持続可能な地域づくり並びに仕組みの構築。

５ おわりに

地域や専門機関との連携・協働による「チーム学校」の実現と、その機能連携については、実践発表の2校を含め、本地区においては従前より、地域の自然や歴史・文化、伝統行事等を見たり、聞いたり、触れたり等の体験活動内容や機会が充実しており、「社会（地域）に開かれた教育課程」の取組が充実していると感じる。

各学校においては、コロナ禍における活動制限等も撤廃され、安全・安心を確保しながら、地域素材である「ひと・もの・こと」を効果的に活用するため、意図的・計画的かつ継続的な教育課程編成に努めている。また、学校と地域や専門機関との連携・協働による教育活動の実践をとおして、生徒達が、変化の激しい社会を生きるのに必要な力を獲得したり、地域や実社会に学びのテーマを求めたり、体験活動の重視により、生徒達の関心・意欲を高めている。

また、「チーム学校」の機能連携によって、学校の協力者・支援者が増え、学校の存在意義が向上するとともに、地域活性化が期待できる。

一方で、教職員が専門性を高め、主体的な教育課程の編成者となるためには、教職員一人一人が地域や専門機関とのつながりを意識したり、実社会と向き合い、生徒の学びを自分事として捉え、その課題解決に向けて取り組む意識を学校全体で統一することが重要である。そのため、校長には、教職員に理解させ、協力を得るためのリーダーシップとマネジメント力が求められるている。

更に、地域や専門機関を教育課程の編成に主体的に参画・参加してもらうためには、現在、機能化が図られている「地域学校協働活動」の持続可能な取組充実と、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）の導入により、学校と地域が一体となって、「特色ある学校づくり」を推進する仕組みの構築が急務である。

結びに、教職員の多忙化や業務負担軽減に向けた「働き方改革」を推進しながらも、学校と地域や専門機関それぞれの課題解決が図られ、対等な立場の下で、共に活動する協働関係を構築し、「持続可能な社会の創り手」である生徒の育成に資するため、今後は、教職員全員が「社会（地域）と共にある学校」づくりに、主体的な参画者となり着実な一歩を踏み込んでもらうよう、指導・助言に努めていく。

[illegible]